GOD EATER - ゴッドイーター - ~神崎タクミの戦い~

神崎タクミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R - ゴッドイーター - 神崎タクミの戦い

【Nコード】

N 7 1 3 8 W

【作者名】

神崎タクミ

【あらすじ】

極東の地、少年は全てを失い、そして、力を手に入れた。神を喰らう者、ゴッドイーターとなった少年は、戦いの果てに、何を見るのか。これは、荒ぶる神々に挑む俺達の物語。ついに、新章に突入しました。力を手にして、力に溺れていた少年は、先輩の死で、決意した。新種のアラガミ、激化する戦い、彼は明日を見出せるか。

腐りきったこの世界（前書き）

この作品はg d g dになると思うので注意が必要です。
アドバイスやその他諸々がありましたらご指摘をお願いします！
気に入りませんでしたらブラウザの閉じるか戻るを押してください。

腐りきったこの世界

俺は全てを失い、そして力を手に入れた。

西暦2071年

世界はいつでも終末を迎えられる状況にあった。

それといつても二十年前に突如出現した異形の怪物

その怪物には如何なる兵器であろうと傷をつけることもかなわなかった。

その絶対的な怪物を人々は極東に伝わる神々「荒神^{アラガミ}」と呼んだ。

しかし、人類も負けてばかりではなかった。

フィンランドの製薬会社『フェンリル』はアラガミを形成するコアとオラクル細胞で神機^{神機}を創り出した。

それを使用するにあたっても適合しなければ神機は使えないということもあった。

こんな中にも、革新を生む神機が開発された

遠近両用の新型神機だ。

しかし、新型にも謎は多い

不安もありつつ戦い続けるゴツドイーター達。

これは、俺達の戦いの物語^{きごと}

EX・GE COMMUNITY&GODEATER 2 (前書き)

初の番外編です(こういう番外編はGEシリーズの新しい情報が入ったときに特別更新で行きます)

では、神崎タクミがおおくりする番外編です！

EX・GE COMMUNITY&GODEATER2

GODEATER2 だと？

いやあ、「GODEATER」って検索しようとおもったらなんと！GODEATER2という文字を発見しましてビックリしましたよお

まあここはガセかもしれないのでスルーしたのですが GECO COMMUNITYの方でGODEATER2の文字を発見してビックリしました

なんと言っても後ろのアラガミさん。カッコいいんだけど可愛いと思ったのは俺だけでしょうか？

しかも前の人はかつこよかったです しかし、今の俺の活躍しようとしている時代から三年後だと俺はすでに

いやっ、生きていれば万事どうにでもなるものだっ ?

リンドウさん ?

そっつえば、まだあっていない まだだっ！あと2、3話くらいで会えるはずだ！

作者次第だけだな

次回！主人公が登場 ?

俺は まだ登場していなかったのか ?

EX・GE COMMUNITY&GODEATER 2 (後書き)

フェンリル極東支部まではまだ遠い あと2、3話でアリサ以外のメンバーと会えます アリサを早くだしてあげたいけど、まだこの時代の紹介だからなあ gd gd更新なのであと二週間以上かかると思います 次回、お楽しみに！

主人公、登場！と見知らぬ天井。（前書き）

タイトルどおりに俺、神崎タクミの本編初登場だぜ！
早く物語を進めていきたいとします。

なにつ！？ 適合試験は次回？
戦闘はいつになるんだろうね

主人公、登場！と見知らぬ天井。

俺、神崎タクミは外郭居住区の住民だった。

位置はE 12という所である。

しかし、そこは今は存在していない　そう、アラガミによって壊滅されたのだ

アナグラのゴッドイーターによって事態は収まったが生存者は多くはなかった。

その生存者の内の一人、俺は助かったんだ

しかし、家族や友達はいずれ皆死んでしまった

俺の、目の前で

ところでここは、どこだ？見知らぬ天井、か

看護婦「起きましたか？」

タクミ「ああ、ここはどこだ？」

看護婦「ここはフェンリル極東支部、通称アナグラの医務室です。」

タクミ「そうか、ここはアナグラなのか　」

????「失礼する」

タクミ「だれですか？」

職員「神崎タクミだな？」

タクミ「そうですけど、何ですか？」

職員「突然だが、新型神機の適合試験を受けてもらうことになった」

タクミ「え、？新型神機？なんだそれ、うまいのか？」

職員「説明している暇はない、支部長がお待ちだ。」

タクミ「わかりました、ってこの服は？」

職員「ここ、フェンリルの制服だ。そんなことより早く試験場に行くぞ」

タクミ（まあ、前の服より動きやすいし、金もないからよかったのかな？）

主人公、登場！と見知らぬ天井。（後書き）

次回、遂に適合試験が行われる！

それにアナグラの面々も続々登場！！

まだ、戦闘は遠いです。（主人公は強いですが、そう、ゲーム並みに）

真の第壱話「適合試験」(前書き)

遂にきました！俺は遂に　　遂に神機を手に入れる！
しかし、それはこれから始まる激戦の幕開けだった

「真の第壱話「適合試験」」

エレベーターは着いた、適合試験場に。

低い、がいい意味で印象的な男の声が試験場に響き渡る。

???「よく来たね、ここは人類最後の砦フェンリル、そして私はフェンリル極東支部、支部長のヨハネス・フォン・シックザール」

タクミ（よく来たね、か、こっちは大体無理矢理じゃねーか）

シックザール「早速だがその中央のプレス機の前に行きたまえ」

シックザール「そうそう、リラックスした方がいい結果が出易い」

タクミ（リラックスしても適合しなきゃ完全な死亡フラグ製造&回収マシーンじゃねーか）

シックザール「さあ、そこに手を置いてくれ」

タクミ（危険そうな物が見えるんですけど）

俺は少々不満気な顔でプレス機に手を置いた。

タクミ（これって不意打ちでバシーンってくる気がするんですけど）

数秒後 バシーン！！

タクミ「やっぱり 気を抜いた瞬間にきやがった」

シクザールは微笑みながらこう言った「素晴らしい、これが新型の力なのか、というより、落ち着いたか？」

タクミ「ああ、おかげでな、サンキュー」

シクザール「ではこれよりエントランスへ行き雨宮ツバキ教官に会い、指示を受けて動いてくれ」

タクミ「分かりました」(なんだったんださっきの俺は?)

そういつて俺は試験場を離れた。

研究員「彼はいったい 本当にゴッドイーターなのか？」

研究員「ああ強すぎる それに、あそこまで神機を使いこなすとは

」

????「彼は逸材だよ、最強の」

研究員「榊博士!?!なぜここに？」

榊「新型神機に興味が、あってね」

彼は、そういつて少しニヤリとした表情で部屋から出て行った。

真の第巻話「適合試験」(後書き)

次回、コウタ登場！あのやりとりを粉碎してみたいと思います。

コウタ「ってより俺の出番おそくね!？」

タクミ「すまん、コウタ、俺を睡魔が襲ってるんだ」

コウタ「わかったよ、でも次回はちゃんと活躍させるよ」

タクミ「頑張ってみるさ」

それでは次回お楽しみに！

第5話「メデイカルチェック」(前書き)

ストーリーのチェックをしていたらこんなに更新が遅れました。o

r z

これからが大切なのにすいません

しかし、落ち込んでいられないので頑張ってg d g d進めて行きたいです

この話から急に話が長くなります

ご注意ください

第弐話「メデイカルチェック」

それは、試験場から出たときだった。

タクミ「ん？あんな遠くが見えるぞ！？」

それは、窓から見えたヴァジュラだった。

タクミ「にしても今ならビルでも壊せそうだな」

今度やってみるか　そう心に決めた

タクミ「とにかくエントランスに行かなきゃな」

そういつてエレベーターを呼び戻した

タクミ「そっぴや俺つてFSDでもここにこなかったからつくりが
わかんねーや」

エレベーターが止まった。エントランスの階らしい。

「あの人可愛いなあ」

俺は受付嬢らしい女性を見て思わずそう呟いていた。

「???」あんたも適合者なの？」

タクミ「そっぴやあんたは？」

俺は反射的に、ニット帽をかぶった少年に聞いた。

「???」俺は藤木コウタ、コウタでいいぜ」

「俺はタクミ、神崎タクミだ、よろしく、コウタ」

コウタ「そうだ、タクミ、ガムいる？」

タクミ「ガム？ 今はいらないよ」

タクミ「ってよりガム持ってたんの？」

タクミ「こんなご時世に、よく手に入ったな」

コウタ「ああ、このガムは入隊の時に貰ったんだ」

「いいなー 俺なんかこの制服だけだぜ」

コウタ「まあ、一瞬とはいえ俺の方が先輩だから仕方ないよ」

タクミ「ってことはコウタも新型なの？」

コウタ「新型？なにそれ？」

タクミ「え？ってことは同期だな！」

「????」

コウタ「なんかわかんねえけどずりーって!!」

「????」

タクミ「ん？」

コウタ「まあ、同期としてがんばろーぜ」

????「立て！」

コウタ「え？」

コウタ（美人だな　なあタクミ）

タクミ（ああしかもセクシーだ）

ゴッドイーターの生き残るための技能の1つアイコンタクトを二人は使いこなしていた、いやテレパシーレベルだ。しかしなぜ今？

????「立てといっている！立たんか！！」

俺・コウタ「はい！」

タクミ（怖い）

コウタ（怖いな）

「もしかしてあなたは雨宮ツバキ教官ですか？」

ツバキ「そうだ、私がゴッドイーターの教練担当の雨宮ツバキだ！」

タクミ（やべえ、胸ばかり見ちまう）

コウタ（ああ、でもこの人もこんな服をよく着れるよな）

タクミ（ってより制服作ってるやつは誰なんだよ！！）

コウタ（だよな、タクミも思うか！）

タクミ（ああ女の子の制服はやばすぎる）

コウタ（そうだよな、思わず見惚れちまうよな）

これでは完璧なテレパシーである

俺・コウタ（男でよかった　　ここはパラダイスだ！）

作者「それでは話を進めよう、ツバキ君、たのんだよ」

ツバキ「それでは、神崎タクミ」

タクミ「はい！」

ツバキ「いまからラボラトリにある神博士の研究室へ行ってもらおう」

タクミ「」

ツバキ「死にたくなければ、私の命令には全て“イエス”で答えろ」

俺・コウタ「はい！」

タクミ（メデイカルチェックなのか聞こうと思ったただけなのに）

タクミ「それでは神崎タクミ、行ってきます！」

コウタ（タクミ、いいように逃げやがった）

そして、俺は逃げるようにエレベーターに乗り込んだ。

(コウタ、ごめん!!)
エレベーターは動きだした。

タクミ「ん？なんだこの気配　この階から感じる!!」

タクミ「あの女の子から？」(俺と同じ雰囲気だ)

(まあとにかく)タクミ「こんにちは、先輩」

???「あ、こんにちは」(初めて先輩って呼ばれた)

タクミ(なんだかうれしそうだなあ、先輩って初めてよばれたのかな?)

タクミ「俺は、神崎タクミっていいます、タクミって呼んでください」

???「私の名前は台場カノンです、呼び捨てでいいですよ」

タクミ「それじゃあ　カノン、榊博士の研究所ってどこかな？」

カノン「ここを真っ直ぐ行ったところですよ」

タクミ「ありがとう、カノン」

そういつて手を振った。

タクミ(すげー可愛かった！ああいう可愛くて性格もいい娘が恋人だといいな)

カノン(今の人優しかったなあ、でも一緒にミッションに行ったら嫌われちゃうのかな)

タクミ「失礼します、神崎です」

榊「やあ、よくきたね」

タクミ「あれ？ 支部長もいたんですか？」

シッケザール「新型には、興味があつてね、それに、君にはゴッド
イーターとしての義務や任務を伝えなくてはいけないしね」

榊「それにしてもさすが新型だね、予想よりも728秒も早い」

タクミ（本当に728秒なのか？ ってより ）

榊「うん、728秒が嘘じゃないのか、って顔してるねえ」

タクミ「え、ま、まさか」

榊「それにしても、外では楽しくお話していたねえ」

タクミ「ま、まあ」

榊「その思いが届くことを祈っているよ」

シッケザール「私も応援するよ」

タクミ「あ、ありがとございますー！」

作者「しかし、物語とは残酷である　カノンに想いがとどいたとしても、ロシアの少女が許すかどうか　しかしそれも、また先のことである」

タクミ「今のはなんだ？」

榊（今のはメデイカルチェックの際に忘れさせよう）

榊「それじゃあ準備をするよ、ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

シクザール「無論、そうしよう」

シクザール「それでは、ゴッドイーターとしての義務を説明しよう」

タクミ「はい！」

ここからシクザールタイムです。たまに「おおっ！」とか「うほっ、いいry」とか聞こえたりするのは空耳です

「ゴッドイーターとはここ、フェンリル極東支部を守り、アラガミの素材を集めることが義務だ」

「それと、（おおっ！）様々な権限を（うほっ！自主規制です）もっている（

「そして、給料は歩合制だからね（すごい、この数値はっ！）」

タクミ「　　終了ですか？」

シクザール「ペイラー、そろそろ公私のけじめというものを覚えて頂きたい」

榊「すまない、ヨハン、タクミ君」

榊「予想なんか飛び抜けた数値で尋常じゃないほど舞い上がっちゃたんだよ」

シツクザール「でも、うほっ！ いい自主規制はなんだ」

榊「すまない、予想以上のデータがあつて興奮しちゃったんだよ」

シツクザール「まあいい、あとで私のところにデータを送ってくれ」

榊「彼も元技術屋でね」

シツクザール「君がいるから、技術屋を廃業することになったんだよ、自覚したまえ」

榊「本当に、廃業しちゃったのかい？」

シツクザール「ふっ ではまた会おう。」

そういつてシツクザールは部屋から出て行った

榊「そのベッドに横になってくれ、少し眠くなるが、気にしないでくれ、戦士の束の間の休まってやつだよ」

タクミ（カノンもこんな思ひしたのかな 女の子は怖いだろうな）

タクミ（男でよかったー！）

榊「予定では10800秒だ、次に眼を覚ますときは自分の部屋だよ、ゆっくりお休み。」

タクミ「おやすみなさい」

そのとき榊の眼鏡が輝いた

約三時間後 -。

タクミ「ふ、ふあーあ」俺は起きた

タクミ「また見知らぬ天井かよ」

そして物語は進みだす、この一歩で。

作者「かつこいいラストにはさせん!!」

作者「ゆけ!コウタ!」

コウタ「よう、タクミ!」

コウタ「寝起き?」

タクミ「他になにがあるの ZZZ」

コウタ「寝るなよお、親友もとい戦友がきてやったんだぜ！」

タクミ「　　！戦友！そして親友！！いい響きだ！」

コウタ「だろー」

「バガラリー見ようぜ！」

コウタ「タクミ、わかってるなあ」

タクミ「俺とコウタは、イサムとジョニー以上の親友になれるぜ！」
コウタ「ああ！」

そして　　物語は始まる　　このバガラリーの2087話が終わった
頃に。

第弐話「メデイカルチェック」（後書き）

タクミ「今回のゲストは藤木コウタさんです」

コウタ「よろしく！」

タクミ「いきなりだけど、俺って存在を消されるのかな？」

コウタ「ホント、いきなりどうした!？」

タクミ「ゴットイーター2GE2の主人公って知ってる？」

コウタ「え？タクミだろ？」

タクミ「本部の、奴等だよ」

コウタ「えええ!？ 本部の連中が!？」

タクミ「榊博士が、メデイカルチェックの時に小声で誰かと話してたんだよ!！」

コウタ「まさか、作者に!？」

タクミ「しかも、三年後の設定らしいし」

コウタ「まさか また新しい神機が出来てしまっって俺は旧々型神機使いになっちまうのか!？」

タクミ「ついでに俺も消すらしい」

コウタ「な、な、なんとか、しないと!！」

タクミ「もしかしたら コウタも死亡フラグ乱立の反動で死、もしくは存在を」

コウタ「いやだいやだいやだ !！」

タクミ「やるしかねえ」

コウタ「そうだな」

タクミ「世界を守るために!」 コウタ「母ちゃんとノゾミを守るために!！」

俺・コウタ「本部の奴等を、ぶっ潰せ!！」

タクミ「アラガミより厄介なのかもな 本部って」

コウタ「つーか俺達、まだ、アラガミと戦ってねえな」

タクミ「そうだった! 次回予告だ!！」

次回、初任務だ！！ お楽しみに

P S ・生きていねば万事どつにでもなるさ。 b y 雨宮リンドウ

主人公のデータ(前書き)

この話は、番外編のようで本編のようないわば説明の回です。
俺のデータか、まあプロフィールっぽい感じになってるっぽいな
ではございぞ！

主人公のデータ

バガラリー、2087話を見終わった時だった。

コウタ「あ、俺のメデイカルチェックの時間だ」

「えー、行つちまうのかよ、ここからがいいとこじゃんか」

コウタ「ゴメンゴメン戻ったら任務くるだろうしまた明日な」

「わかったよ、じゃあまた明日！」

コウタ「おう、また明日！」

そういつてコウタはタクミの部屋を出て行つた。

「えーっとターミナルのチェックをしる、か」

「腕輪のついた腕をこっちにいれつつと」

キユイインという起動音を出してターミナルは動きだした

「まずは、メールだな」

メールは二通あつた

「コウタと、これは？」

「神崎タクミの詳細情報」

「俺のメデイカルチェックの結果だな」

ファイルをそう言つて開いた

神崎タクミ(15)

身長 - 176cm

体重 - 56kg

神機の適合率 - 開けません -

戦闘能力 - 現在のデータから算出した戦闘力は旧型神機使い6人分

をほこる

剣形態の状態の神機で弾丸を発射したり、バレットが無い状態のその場でチップが無くてもバレットを自由に創っていることを確認。現在の気分や、性格で瞳の色が変わることも確認されている。

紅・サドステイックな性格になり、尋常じゃない程の力を振るう。そして超巨大な捕食形態を出すことが出来る

蒼・冷静沈着でやはりサドステイックである、そしてスナイプ能力が遠距離型の旧型を遥かに超えている。そして、バレットの限界を超えた未知の弾道を使用できる。

(異次元より弾丸を飛ばしたり)

漆黑・素手でアラガミを殺すことが出来る

性格は破壊衝動に駆られてしまうがなるべく徒手空拳で仕留める漢

主人公に似合わない性格だが最強かも知れない(最強はそのときどきによって変わる)

現在、強力な偏食場によってアラガミの結合を緩くしていることを確認

黄金・剣形態で、銃を扱うときに見られる。非常に強力な力を持ち、銃の威力で蒼の時より戦闘能力は上かもしれない。

それに、銃の抵抗をなくすこともでき、ノックバックなしで連射ができる。

黄金になると5分くらいその状態が続くがしかし、体への反動も無いわけではない。

(紅や蒼では体力の低下どころか、回復している)

瞳が黒の時は基本的に優しい(台場カノンと交際していることは本人と一部の人々の機密である)

感情が高ぶると破壊衝動に駆られるらしい。
現に試験場が一部破損状態にある

最近、アルコールの摂取（雨宮リンドウ少尉が飲ませた）した際に紫になることを確認

紫・戦闘力は高い（ほぼ最強）のだが、記憶がなくなるらしい
そして、酔いが覚めると漆黒に変わる模様

しかし、全ての力を凌駕する力をもっている

能力 - 紅以上の捕食形態を出すことが出来、

黄金以上の銃の威力でも蒼以上の制動力を持っている

極めつけはコアバーストと呼ばれる状態になることが出来る

それは通常のバーストモードよりも強力でありながら時間も長い

漆黒と紫だけが制御出来るのだが、漆黒はコアを回収する性格なのでそうはいかないらしい

残りの情報は後々更新する 送信者 ヨハネス・フォン・シッケザ
ール

主人公のデータ（後書き）

段々投稿にも慣れてきた気がする作者です

いやぁ詳細をかるく書くつもりだったんですけど主人公の力を書いていくうちに作者の厨二な力の方が

異次元より弾丸・というのはようするにテスカトポリトカみたいなものと考えてください。

あと、全ての力を平均的にするために黄金と紫にハンデをつけてみました

（のちのち変わるかもしれない）

次回こそ初任務です、おたのしみに

第参話「上司と荒神と初任務」(前書き)

俺、神崎タクミはターミナルで仮面ライダーオーズを見ていた。
そういうことはおいといて、っと。

いよいよ初任務！

新入り、神崎タクミの戦いの序章が今、始まる。

第参話「上司と荒神と初任務」

タクミ「俺って、こんなことしたっけ？」

俺が俺のデータを見た後のことである。

タクミ「まあ、いいや、賠償金とかとられてないし」

そのとき、支給された携帯電話が震えだした。

タクミ「はい、こちら、神崎タクミです」

ツバキ「エントランスに来い、お前の初任務だ」

タクミ「はい！」

ツバキ「うむ、いい返事だ」

そういつて通信は切られた。

タクミ「せつかちだなあ、怒られないうちにさっさと行くか。」

そうして、ターミナルをシャットダウンして自室を出た。

タクミ「それにしても、オーズってすごいなあ」

タクミ「俺も、必殺技でも作るのかなあ」

エントランスに着いてヒバリさんに、ミッションを受けてからベンチに座りこんだ時だった。

よろず屋「よう、新入り」

タクミ「こんにちは」

よろず屋「これから任務かい？」

タクミ「そうだけど、どうしたんです？」

よろず屋「任務に行く前には、いろいろと兵装をそろえた方がいい
ぜ」

タクミ「俺、金ねえし」

よろず屋「じゃあ仕方ねえな」

タクミ「任務が終わったら、レーションをかうからキープして
くれよ」

よろず屋「あいよ、しっかりキープしてやるぜ 最高級品を」

タクミ「高いのは勘弁してくれよ」

よろず屋「高いといっても、この景気じゃあんまり変わんないぜ」

タクミ「ははははは」

この時代、笑うことは大切である。

????「よう、新入り」

よろず屋「よお、アナグラ一番の稼ぎ頭、リンドウ」

リンドウ「そういつなって、おっさん」

よろず屋「おっさんっていつなよ」

リンドウ「まあいいや、新入り、お前の名前は？」

タクミ「俺は神崎タクミっていいいます」

リンドウ「タクミ、か どこかで聞いた気がする名前だな」

タクミ「この狭い世界じゃ、同じ名前の奴なんていっぱい、いますよ」

リンドウ「そうだな、まあ今日はよろしくな」

タクミ「よろしくお願いします！」

リンドウ「かしこまんなって、調子狂っちゃまう」

タクミ「は、はい」

????「あれ？ 新入りの人？」

リンドウ「おいおい、これから任務の説明しようって、いつとぎに入ってくるなよ、サクヤ」

サクヤ「了解です、上官殿」

リンドウ「もういい、詳しいことは現地で話す」

サクヤ「君の名前は？」

タクミ「俺の名前はタクミっていいいます、よろしくお願いします」

サクヤ「これから、よろしくね」

リンドウ「時間だ、さあ行くぞ、タクミ」

タクミ「はい！！！！」

贖罪の街

リンドウ「ここも、随分荒れ果てちまったなあ」

タクミ「そうだな」

リンドウ（アナグラのときと雰囲気少し違うな）

タクミ「今回のターゲットは、何だ？」

リンドウ「そう、力を入れるなって」

タクミ「ああ」

リンドウ「命令は三つ、死ぬな、死にそうになったら逃げろ、そんなで隠れる、

運がよかつたら不意をついてぶつ殺せ！」

タクミ「ああ、分かった、俺は生きることから逃げない！」

俺は、空に向かって一発撃った。

リンドウ（どうしたんだ？ 上にはなんにもねえのに）

次の瞬間、光の柱が七本立って、血飛沫をあげた！！

リンドウ「な、なんなんだ！？ いったい、なにが起こったんだ！？」

タクミ「俺の必殺技、完成！！ ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

リンドウ「これは、凄いな」

タクミ「でも、楽に逝かせちゃったから、可哀想だな」

リンドウ「とにかく、帰ろう な？」

タクミ「はい」

リンドウ（蒼から黒に戻った）

俺達は、アナグラに戻ってきた。

ヒバリ「ミッション、お疲れ様です」

タクミ「なんだか、疲れた気がする」

ヒバリ「初任務ですから、仕方ありませんよ」

タクミ「そうかな」

タクミ（必殺技はさすがに疲れるけど、仕方ないか）

タクミ「医務室って、ラボラトリだったけ？」

ヒバリ「そうですね、怪我でもしたんですか？」

タクミ「特に何も無いよ」

ヒバリ「????？」

タクミ「よろず屋のおっちゃん、買いに来たよ」

よろず屋「まいど、リンドウが疲れた顔してたぞ、なにかしたのか？」

タクミ「ちょっとね、腹、減っちゃった」

グルルルと丁度腹が鳴り出した。

よろず屋「よっぽど疲れたんだな、よし！」

タクミ「なに？」

よろず屋「初任務成功祝いだ！レーション好きなの選べ、ただし、

一個だぞ」

タクミ「ありがとう」

俺は、ステーキ味という物をとってみた

よろず屋「一番高いのを選んだな」

タクミ「だって、好きなの選んでいいんだろ？」

よろず屋「まあ、いいけどな」

タクミ「さっすが、よろず屋、心が広い！」

よろず屋「よっしゃ、もう一個もってけ」

タクミ「ありがとう、おっちゃん」

俺は、手を振りながら、エントランスを後にした。

時は、ラボラトリーのエリアに着いた頃だ。

・ リンドウの部屋 ・

リンドウ「ふう、疲れたあ」

サクヤ「どうしたの？ リンドウ」

リンドウ「いやあ、タクミのことだよ」

サクヤ「ああ、新人君ね」

リンドウ「タクミって、相当強いぜ」

サクヤ「そうなの？ 優しそうだけど？」

リンドウ「まあ、カノンと同じタイプだ」

サクヤ「カノンちゃんど？」

リンドウ「性格が変わるんだよ」

サクヤ「そりゃ、疲れたでしょうね」

リンドウ「まあ、タクミの方がましだけどな」

サクヤ「で、彼の戦績は？」

リンドウ「全部、タクミが殺っちまったんだけどな」

サクヤ「じゃあリンドウは給料泥棒？」

そういって、サクヤは笑う

リンドウ「そんなところだな」

サクヤ「冗談のつもりだったのに、リンドウったら」

リンドウ「あいつと組んだら分かるって」

リンドウは苦笑を浮かべた

サクヤ「そうね、そのうちね」

場面は戻る。

タクミ「へっくしょん」

タクミ「風邪かなあ？」

カノン「大丈夫ですか？タクミさん」

タクミ「ああ、でも風邪だったら困るし、薬ももらっていい」

カノン「体は大切にしてくださいね」

「うん、頑張るよ」

「ってより薬どこかな？」

カノン「風邪薬ですか？」

タクミ「ああ、探すの手伝ってくれない、かな？」

カノン「はい、もちろんです」

タクミ「ありがとう、カノン」

カノンが少し顔を赤くしたようだ

タクミ「少し顔が赤いぞ、カノンも風邪？」

カノン「い、いえ、ち、違います」

タクミ「ゴメンゴメン」

二人の顔が赤くなっている

タクミ（このままじゃまずい　バレる）

カノン（このままだったたらまずいなあ　でも、このままでもいいかも　）

カノン（なに、考えてるんだろう私　）

「と、とにかくまずは医務室に　」

カノン「そうですね、タクミさん」

二人は赤面していることを隠すために下を向いたまま医務室に入った

カノン「どこにあるのかな？」

タクミ「ないですね　」

俺・カノン「あつた！」

案の定二人の手は重なった

俺は動けない、いや動きたくないタクミ（これはチャンス）

カノン（これって、さまざま恋愛パターンの一つ）

二人はガチで動けない

タクミ（これって下手なことだったら嫌われるのかなあ）

タクミ（たとえば「どけ！」とかは禁句だな）

カノン（ここで、「す、すみません」とかいったらなんか言われるのかな）

タクミ（カノンが動かないってことはまさか）

思わず赤面してしまう俺

カノン（タクミさんの顔が赤い　風邪の赤さじゃないなあ
まさかですよ）

俺・カノン（誰か来ないかな）

タクミ（自分でなんとかしないといけないか）

そう思った時、ドアが開いた

タクミ「うわっと！」

俺・カノン（助かった）

コウタ「お前らなにやってんの？まさか
コウタはニヤニヤしている」

タクミ「そ、そんなんじゃないぞ！」

カノン「そうですよ！」

二人は興奮の余り顔を紅潮させる

コウタ「顔赤くして俺には分かったぞ！」

タクミ「くっ」

コウタ「忘れたのか？タクミ」

俺とお前はテレパシーレベルのアイコンタクトが使えることを！

タクミ「コウタ、絶対に言うなよ」

カノン「なんですか？」

コウタ「こいつはな　ふがっ！」

「言うなって、人に言われるんだったら自分で言うさ」

コウタ「よし！もし違ったら俺が言っただけや！」

タクミ「ああ、構わない！」

カノン「な、なんですか？」（もしかして　）

第参話「上司と荒神と初任務」（後書き）

タクミ「次回、遂にこくは　　っておい！作者！」

作者「なんだよ、相棒」

タクミ「もう一人の僕う、じゃない！」

作者「急ピッチで恋愛が進んでることか？いいことじゃないか？」

タクミ「ふざけんじゃねえ！どうせコウタを仕向けたのもてめえだ
る！？」

作者「カモン、コウタ」

作者「今回のゲストもコウタさんです」

コウタ「ちーっす、藤木コウタです」

タクミ「コウタがチャラくなった！？」

タクミ「作者、てめえ！」

コウタ「なんてな」

作者「彼は私のマインド」

タクミ「やっぱり、お前なんだな」

作者「まあまあ、コウタ君の話聞きなよ」

そういつて指パッチンをしてみた

コウタ「あれ？ここはどこ？あ、タクミ、よう！」

タクミ「どうした？コウタ」

コウタ「俺はメデイカルチェックでおきたときになんか神のお告げ
みたいなものが聞こえて医務室にいっただけだぜ？」

タクミ「そうか、神のお告げか　それは素晴らしいな　なあ、神
様？」

神？「そうじゃ、いかにも私が神である」

タクミ・コウタ「作者じゃねえか！？」

さくしゃのいくえをしるものはこのふたりだけとなった
タクミ「ふう、やっかいなものを残して逝きやがった」

コウタ「自分の気持ちに正直になればいいんじゃない？」

タクミ「くそっ、嬉しいんだけど早すぎる」

コウタ「作者のスキルを考えてやれ」

タクミ「そうだな、恋愛どころかこの小説もままならない状態だもんな」

コウタ「そうそう、誤字も多いしな」

タクミ「そうだよな、恥ずかしい思いをするのはこっちだってことを考えてほしいぜ」

コウタ「将来に期待だな」

作者「」

タクミ「うわあああああああ！！！！！！！」

コウタ「生き返った！？」

作者「とにかく、次回予告をしよう、そのために生き返ったんだ」

タクミ・コウタ「そうだな」

作者「じゃあ俺は俺に戻ろうか」

タクミ「ああ」

コウタ「そうか、作者とタクミって同じだったのか」

俺「それでは次回、告白と」

コウタ「成功と！？ネタバレしてんじゃねえか」

タクミ「気にすんな、体に障るぞ」

タクミ「共同任務」

作者「もういい、次回予告は俺がする」

タクミ・コウタ「頼む」

作者「告白と成功と共同任務、神崎タクミの運命はどうなる！？では次回！お楽しみに！！！！」

第肆話「告白と成功と共同任務」（前書き）

俺、神崎タクミは作者の罨によって全然フラグの土台が出来ていないところにフラグを立てるという羽目になってしまった。

コウタはマインドコントロールにあうし

どうやってこの状況を切り抜けるのか！？

そして、成功とは告白なのか、それとも

前書きと後書きは掠り傷程度にストーリーに関係するかもです

作者が絡むものは関係がほとんどありません

さあ、俺の運命はどうなる！？

タクミとコウタが後書きのMCに正式決定しました

第肆話「告白と成功と共同任務」

「お、おれはカノンの ことが 「 っていえねーよ!!--
超無理矢理フラグ建設、じゃねーか
作者のバーカ!!--

by 神崎タクミ

コウタ「さつさと言えよ、待ってるんだぜ」

コウタ「俺が暴露しちまうぞ」

タクミ「わかったよ!!-- 言うよ、俺の気持ちを!!--」

タクミ「俺は、俺は、カノンが、カノンが好きだ!!--」

カノン「え?」 (どうしよう 告白されちゃった)

一気にカノンのテンションがMAXに!!--

コウタ「よく言った、タクミ、尊敬するぜ」

カノン「すいません、いきなりなので、少し 時間を くれま
せんか?」

タクミ「ああ、いつまでも待ってる」

カノン「でも、友達から なら 」

タクミ「友達 うん、そこから始めよう!!--」

カノン（軽い女と思われたら嫌われるかもなあ、でもこの人がいな
きゃ私はいって言えてたのに）

そう思って、コウタを少し睨んだ

そのときだった、タクミに連絡が入ったのは
ツバキ「私だ、支部長室に来い」

そういつて通信は切られた

タクミ「せっかちだな」

コウタ「せっかちだ」

カノン「せっかちですね」

タクミ「じゃあ行くわ」

コウタ「俺もついて行くよ」

タクミ「なんで？」

コウタ「怒られる瞬間を見たいからさ」

俺・カノン「陰険だ」

コウタ「さっそく、仲いいねえ」

俺・カノン「もう、バカにしないで下さいー！」

コウタ「やっぱり、仲いいなあ、言ってることが同じだ」

俺・カノン「そうですね」

コウタ「お似合いだねえ」

タクミ「とにかく、俺は支部長室に行く！」

カノン「さよなら」(もう行っちゃうのか)

タクミ「すぐ会えるさ、すぐに」

そういつて医務室を後にした

- 支部長室 -

シッケザール「諸君、来たか」

シッケザール「成功したようだね、コウタ君」

タクミ「え？あいつの仕業じゃなかったのか？」

詳しくは3話の後書きを

コウタ「支部長の依頼さ、タクミとカノンを引き合わせろってさ」

タクミ「そういえば、応援させてもらって言っていましたね」

シッケザール「これから君と、カノン君で任務についてもらう」

タクミ「カノンと?」

シックザール「コウタ君の説明の方が分かりやすいだろう」

コウタ「つまり、デートだよ」

シックザール「君がカノン君を守ってあげるんだ」

タクミ「つまり、デートでカツコイところを見せるんですね」

コウタ「そういうこと」

タクミ「では、行って来ます」

シックザール「彼女をさそってから行きたまえ、君がさそったほうがいいだろう」

タクミ「はい!」(絶対に成功させる!)

・エントランス・

カノン「シックザール支部長は何言ってたの?」

タクミ「任務だってさ、カノンも一緒に行かないか?」

カノン「は、はい!がんばります」

タクミ「力を抜いたほうがいいよ、そっちの方が可愛い」

カノンの顔が超赤い

タクミ「ごめんな、かえって緊張させちゃったか」

カノン「う、ううん　気にしないで、ね」

タクミ「それじゃ、行こう!」

カノン「うん!」

「オウガテイルだってよ」

すでに眼は紅に染まっている

カノン「どうしたの?その目?」

タクミ「これは俺の特徴みたいなもんさ、性格も変わるらしいぜ」

カノン(もう変わってる　)

カノン「私も性格変わるらしいけど、いい?」

タクミ「ああ、構わないよ」

カノン「じゃあ　」

神機に神経接続を行った二人(俺は持つただでこつなる)

タクミ「行こう、あいつらを血祭りに上げてやるっぜ」

カノン「うん、私の射線上には立たないでね」

タクミ「ああ、それにカノンは俺がしっかり守ってやるから心配せずにごんごん撃ちまくれ！」

カノン「言われずともそうするつもりよ」

オウガテイルだ

タクミ「ジェノサイドカーニバル虐殺祭！」

そう叫び引き金を引くとオウガテイル二匹が一瞬で消えた

カノン「いい景気づけねえ」

タクミ「さあ ゲームスタートだ」

トリガーの男じゃありません

俺は走るとすぐに目の前にいたオウガテイルに斬りつけた

そして俺が斬り抜けたオウガテイルをカノンが爆砕系のバレットで吹き飛ばす

タクミ「さっすが、カノン！」

カノン「タクミもやるじゃない」

俺は即座に銃形態に神機を変形させて、オウガテイルの頭に銃口をあわせて撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃ちまくる

その瞳は黄金だ（なぜかというとかノンに褒められた？から）

血塗れの神機ほど今のカノンを興奮させるものは少ない（俺も興奮させるもの）

カノン「すごい」

タクミ「ぼーっとすんな！」

その瞬間、カノンに喰らいつこうとしていたオウガテイルの体は吹き飛んだ

そして残りのオウガテイルも次々とただの肉片や神機の力となってゆく

タクミ「大丈夫か？カノン」

「う、うん」

タクミ「なら、よかった」

俺は、カノンの体温を感じるように軽く、抱きしめた

タクミ「守れてよかった」

カノン「あ、ありがとう」

カノン「本当に、ありがとう」

そういつて抱き返してくる

タクミ「カノン」

タクミ「ん？ここは？オウガテイルはやったんだよな？」

そう、神機を地面に置いたのだ

記憶は曖昧だが、今は分かる

タクミ「カノン？」

カノン「え？」（目がいつもの色だ）

タクミ「紅の時って俺、サドだからさ、ごめんよ」

タクミ「記憶はあるんだけど状況把握が難しくなるのが俺の欠点なんだ

「じゃあ、戻ろうか」

「戻ってからだ」

第肆話「告白と成功と共同任務」(後書き)

MCタクミとコウタでおおくりする後書きですが

コウタ「作者が寝るう？」

タクミ「そんなバカな」

作者「作者だつて人間だ」

コウタ「でもさ、現在22:12だぜ」

タクミ「本当だ、お前子供か？」

作者「違つよ、昨日はストーリーを見たり台詞を覚えようとしたりと頑張つたんだぜ」

タクミ「結局覚えられなかったのがこのバカだけだな」

コウタ「ほんと、誤字は勘弁な」

作者「俺が睡眠不足で弱つてるからバカにしゃがつて」

作者「ドラ もくん、寝ながら小説を作れる機械だして」

タクミ・コウタ「無理だな」

作者「というわけで、お休みなさい」

タクミ「作者に代わりまして次回予告、ってまだ教えてもらつてねえ！」

コウタ「どうする？」

タクミ「今度の更新までだな」

コウタ「しかたないな」

コウタ「あゝあせつかくゲスト呼んでたのに」

タクミ「ごめんな、カノン」

カノン「別にいいですよ、私なんか」

タクミ「作者の野郎」

コウタ「目が漆黒じゃん!？」

カノン「ネタバレしちゃいましたね」

タクミ「すまん、次回の後書きはスペシャル枠で行こう！」

作者「俺が許すかなWWW」

作者「お気に入り登録して頂いた方々ありがとうございます！これからも頑張っていけます」

第五話「強さと愛とダディヤーナザアーン」前編（前書き）

昨日、投稿しようと思ったたらPCの不調により完成の一步手前、
そう 後書きで事件が起こった

PC「だが私は謝らない」

作者「オデノジョウゼツハボドボダ！」

タクミ「ウソダドンドコドーン！」

コウタ「昨日の俺のかっこよさを皆にも見せたかったぜ」

作者「お前、出番あったか？」

コウタ「くそつ、全部作者のせいなんだぜ」

シクザール「私の台詞はそのまま頼むよ」

作者「ああ、もちろん、あれほど感動的な台詞はできない」（俺の
センス的に）

作者「ダディ登場！」

伝説の銃使い？橘サクヤだ

橘朔也と橘サクヤは関係ありません（たぶん）

後書きが進化した！

作者とサクヤは紙一重の打ち方なんだよな

sakusyaとsakuyaね

たまに、サクヤが作者になっちゃうかもです
ご了承ください

第五話「強さと愛とタディヤーナザアーン」前編

俺と、カノンは、アナグラへと戻ってきた。

エントランスに着いて、いきなり通信が入った。

シククザール「私だ、至急、支部長室に来たまえ」

タクミ（今回の成果を聞かせる、ってわけか）

カノン「呼び出し、ですか？」

タクミ「ああ、任務の報告してきてくれない、かな？」

カノン「うん、任せて」

俺は、笑顔で、手を振りながら、エレベーターに乗り込んだ。

エレベーターが丁度着いてたら、なんか嬉しいよね？

・支部長室・

シククザール「よく来たね、タクミ君」

タクミ「こんにちは、支部長」

シククザール「それで、結果は？」

タクミ「どっちなんですか？」

シクザール「どちらもだよ」

タクミ「片方は、曖昧な感じですよ」

シクザール「そうか」

タクミ「けど、なぜここまで協力してくれるんですか？」

シクザール「君は、あの頃の私に似ている」

シクザールは、続けて話す。

シクザール「私も、アイーシャ いや、妻に一目惚れをしたんだ」

タクミ「一目惚れ、ですか」

シクザール「そうだ、私は二日くらいで告白したよ、しかし、フラれたんだ」

タクミ「そうなんですか」

シクザール「しかし、彼女は私の仕事の心配をしてくれていたんだ」

タクミ「いい人ですね」

シクザール「それから、色々あって、上司もいつしか応援してく

れるようになったんだよ」

シックザール「そして、一番大きかったのは同じ研究チームにしてくれたことだよ」

タクミ「それが、技術屋時代、ですか」

シックザール「ああ、そうして苦楽を共にすることによってさらに惹きあっていったんだよ」

シックザール「そうして、二度目の告白で成功したんだよ」

タクミ「で、僕にも応援を　ですか」

シックザール「いや、ただ同じ任務を与えただけだよ、私は」

シックザールは、自分はいくまでも支部長として、ということをお話した。

タクミ「ありがとうございます」

シックザール「それに、私は君の恋を楽しんでいるだけだよ」

シックザール「怒ってくれても、構わない」

シックザール「だが私は謝らない」

タクミは怒るにも怒れない、だって、シックザールのおかげでここまで進んでくれたから

シクザール「そろそろ、行ったほうがいいんじゃないか？」

タクミ「どこにですか？」

シクザール「決まっているだろう、彼女のところにだよ」

シクザール「そうだ、ボーナスを振り込んでおくから、なにかおごってはどうかね」

タクミ「ありがとございます」（支部長つて、こんなことまで出来るのか）

タクミ「それでは、失礼します」

そういつて、俺は、支部長室から出て行った。

シクザール「しかし、いつの時代でも愛とは美しいものだな、アイーシャ」

シクザール「君を失ってから、このことを忘れかけていたよ」

シクザール「どうしても、この計画を成功させて、あの若者達を救わなくてはな」

小休止というところですが、ダディはいつ出るんでしょうね？

- エントランス -

タクミ「カノン、戻ったよ」

カノン「どんな呼び出しだったんですか？」

タクミ「任務の報告を支部長にもしなきゃいけないらしいんだ」

カノン「そうなんですか」

カノン「私、呼び出し、って言葉を聞くだけで、怖いんです」

タクミ「なんで？」

カノン「私、誤射が多いから補習も多いんです」

タクミ「だからか　じゃあ、俺が補習を手伝ってやるよ」

カノン「本当ですか!？」

タクミ「ああ、本当だ」

カノン「うれしい!」

そういって、カノンは抱きついてきた。

タクミ「ちょっと、まって」

カノン「え?」

タクミ「ここじゃ、恥ずかしい　()できれば別のところで、続

きを
（

カノンも、赤面する。

タクミ（無意識だったか
）

カノン「す、すみません！」

タクミ「ここじゃなけりゃ、いいよ
」

カノン「そうですか」（ここじゃなけりゃいい、か
）

タクミ「そうだ、落ち着くところにもいいところ」

カノン「はい！」（落ち着くところなら
）

- 新人区画 -

タクミ「ここなら いいかな？」

カノン「うん！」（続きを
）

タクミ「ジュース、買ってやるよ」

カノン「え？本当!？」

タクミ「ああ、何でもいいよ」

カノンは、俺にとって今まで不思議に思っていた物を買った

タクミ「ひ、冷やしカレードリンク？」

カノン「うん、結構、おいしいんだよ」

タクミ「じゃあ、俺も、買ってみよう」 (調子を合わせよう

)

タクミ「ほんとだ、おいしいね」棒読みである

カノン「そうでしょ」

タクミ「それにしても、さっきは、誤射なんてなかったのにな」

カノン「え？」

タクミ「さっきの任務の間に、1度も誤射はなかったよ」

それは、主人公の驚異的な身体能力による弾丸回避で誤射がなかっただけであることを、僕達はまだ知らない。

タクミ「まあ、誤射があっても、カノンは、カノンだよ」

俺は続ける。

タクミ「誤射があるなら、俺がフォローする、だから、あんまり、考えるなよ」

カノン「タクミ ありがとう」

- 1、頭を撫でる
 - 2、抱きしめる
 - 3、抱きしめて頭をなでる
 - 4、抱き寄せて頭を撫でながら優しい言葉をかける
- タクミ（4しかねえ！俺は漢だ！）

そして、俺は、カノンを軽く抱き寄せ、頭を撫でた。

タクミ「誤射なんて、どうでもいいんだよ、それも、君の魅力さ」

カノン「あ、ありがとう」

タクミ「それに、誤射は直せばいいだけだよ」

カノンは、泣きそうな顔をしている。

タクミ「まあ、俺は誤射ぐらいにはやられないさ」

カノン「うん」

タクミ（やべえ、泣かした　俺まで泣きそう　）

カノン「タクミって　優しいね　」

俺の方が優しい言葉をかけられている。

逆に、カノンの方も抱きしめてきた。

さすがに動けねえ

そのとき コウタの部屋のドアが

作者「そうはさせん！引き下がれ、コウター!!」

開きかけたドアは閉まり、コウタは、派手にドアにぶつかって、気絶した。

作者「ふん、しばらく寝てな!!」

つまり、気絶は作者がやった。

タクミ「誰かが、来ている」

カノン「え?」

彼女の温もりが、俺から離れる

タクミ「気のせいかな?」

カノン「ここじゃなんですから私の部屋にきませんか?」

タクミ「ああ、行く!!」(俺のテンションが100になった!!)
神崎タクミはスーパーハイテンションになった!!!

そういつて、二人は歩きだした。

第五話「強さと愛とタディヤーナザアーン」前編（後書き）

作者「ども、作者です」

タクミ「神崎です」

タクミ「MCの藤木コウタさんは急病によって今回お休みします」

作者「今回は戦闘なしです、いや前編ということにしましょう！」

タクミ「前編はすごいな」（俺的に最高）

作者「今回のゲスト兼MCの台場カノンさんです」

カノン「よ、よろしくお願いします」

タクミ「今回は進展がありすぎだな」

作者「前回の後書きで悪いことしちゃったからね」

作者「コウタは散々だけだな」

カノン「あれ？もう一人ゲストがいますよ？」

タクミ「お入りください！」

シツクザール「やあ、ここが、後書きのコーナーかね？」

作者「ゲストはフェンリル極東支部支部長のヨハネス・フォン・シ

ツクザールさんです」

タクミ「今回は大活躍だったですね！」

シツクザール「ああ、橘君には悪いがね」

作者「いやいや、後半で活躍させますから心配いりませんよ」

タクミ「そういや橘さんって、ギャレンの人と名前が一緒だよな」

カノン「そうですね、銃使いつてところも」

作者「ちよつと待ってくれ、そろそろ時間が」

タクミ「次回の後書きで続きだな、作者」

シツクザール「それでは、私は職務の方に」

カノン「じゃあ、タクミ、私の部屋に行きましょう」

タクミ「ああ、それからだな」

作者「それでは、次回予告です」

タクミ「次回の神崎タクミの戦いは」

カノン「次々と惹かれていく私達」

タクミ「それを邪魔するダディ」

シクザール「いつたい次回はどうなるのだろうね」

作者「それでは次回、強さと愛とダディヤザーン、お楽しみに！」

作者「タイトルが、最初は

「MASKD EATER ダディヤザーン GAREN」

だったんですけどオーズスタイルでいくから無理なんですよね」

作者「なんか、いいサブタイトルあつたら教えてください！」

現在、サブタイトルを募集中です。

作者「あと、神崎タクミのデータは更新していききたいと思います」

作者「タイトルを間違えてました、だが私は（ry」タクミ「もう
言わせん！」

第陸話「口付けと邪魔とダディヤーナザアーン」 後編（前書き）

作者「えー、タイトルを変えてしまった作者です、だが私は謝らない」

タクミ「だが私は謝らないって結構使えるものなんだな」

作者「それにしても二人だけでオープニングとは懐かしいな」

タクミ「それもそうだな」

作者「えっと、支部長はエンディングしかアポとってないしな」

タクミ「カノンは準備中だしな」

作者「コウタは俺がやっちまったからな」

タクミ「やっぱりお前か!!」

作者「しまった バレた!？」

タクミ「理由を述べよ、被告」

作者「私は情報操作により、藤木コウタさんを気絶にまで追い込みました」

タクミ「謝罪をしなさい、早急に」

作者「だが 私は謝らない」

現在、藤木コウタ新兵が神崎タクミのリンクエイドによって復活しましたので作者を肅清中です

作者「やめて、止めて、辞めて病めて已めてヤメテヤメテヤメテやめてくれ!」

グロテスクな表現がありますのでご注意ください

コウタ「これってグロOKじゃね？」

タクミ「ああ、キスとかまでならOKな恋愛もあるぞ」

作者「ちよつとやめる！！！！」

現在、作者の力により時間をとめております

作者「落ち着いたか？」

タクミ「ああ、ところで表現はどこまでやるつもりなんだ？」

コウタ「たとえば「内臓が見え、見るに耐えない状況だ」とかどうなの？」

作者「見ている人次第だ」

タクミ「じゃあじゃあ！おれおれ！」

作者「なんだ？」

タクミ「俺得で悪いんだけどさ」

作者「まさかタイトルが気になっっているのか？」

タクミ「あつたりめーだろ！！」

作者「それは、聞いちゃいけねえなあ」

コウタ「タイトル？なにそれ？食えんの？」

作者「タイトルに異常はないぞ」

タクミ「くつ、貴様ら　おのれ」

コウタ「見る人次第じゃね？」

作者「俺じゃどんな判断を下していいか分からぬ」

タクミ「もういい！さっさと本編いくぞ！！」

タクミ「あんた達なんかがいるから世界がつ！！」

作者「とにかく本編だろ　行くぞ」

第陸話「口付けと邪魔とダディヤーナザアーン」 後編

- カノンの部屋 -

俺は部屋に入っつてすぐに深呼吸をした。
テンションが高すぎるからだ

R G<ラツシユゲージ>みたいなものだ、安心してくれ

カノン「そこに座ってください」

俺の自室にもあるソファである

カノン「今、お茶を入れますね」

色々な物が置いてある女の子らしい部屋だ
かといって散らかっている訳でもない

タクミ「いい部屋だね、しかもいいにおいがする」

カノン「それはハーブのおいですよ」

タクミ「さすが衛生兵、いろいろなことを知ってるね」

カノン「そ、そんなことないですよ」

タクミ「謙遜しないでいいよ、むしろ甘えてくれてもいいんだよ」
ここで、爆弾投下です

カノンは見事に赤くなった

タクミ「やばい、調子に乗ってしまった」

カノン「ど どうぞ、お茶です」

タクミ「引かれてしまった」

タクミ「ここで方向を変える！」

「お、おいしいよ！このお茶！」

少なからずこの気持ちはある

カノンは横になぜか座ってきた

カノン「あの 少し、目を閉じてくれませんか？」

タクミ「え？」（な、なんだ？）

カノン「お願いします」

すごく緊張した顔だ

俺も緊張が伝って赤くなる

タクミ「ちょ、ちょっと待ってくれ」

クールチャージだ！

タクミはTORにはまっている

タクミ「よし、いいぞ」（いよいよか）

タクミは目を閉じた　その目は興奮により紅だ

カノンの顔が近づくと心配がする

唇が触れそうになったときである

俺の呼び出しである

俺は目を開けてしまった、がすでにカノンは離れていた

ヒバリ「タクミさんに任務が来ましたので報告します」

タクミ「に、任務う？嘘だろ？嘘だと言ってくれ！！」

カノンはすごく、残念そうな顔をしている

タクミ「で？すぐ行かなきゃなんなの？」

ヒバリ「至急エントランスに、とのことですよ」

タクミ「支部長じゃないよな？」

ヒバリ「はい、橘サクヤさんですよ」

タクミ「ダディヤーナザアーンオンドウルラギッタンディスクカ

！」

ヒバリ「今のはなんですか？」

カノン「今のはなんなの？タクミ？」

タクミ「す、すまん　取り乱した　カノン」

カノン「別に構わないよ、でもどんな用件なの？」

タクミ「任務だったよ、しかも実地演習　」

カノン「そう　なの　」

タクミ「戻ってきたら、な？」

カノン「約束だよ」

タクミ「急いで行けばすぐ戻れる、それじゃあ　行くよ　」

作者「未練がましい奴だ！さっさと行け！」

作者の力でエレベーターのところまでに時間は進む

俺はエレベーターに乗り込む

作者「カノン？カノンは自分の部屋にいるさ、たぶんお菓子を作ってまってるんじゃないかな？」

俺は完全にDQNモードだ（DQNモードとは瞳が完全な漆黒に染まったものである）

裏タクミ「おい、さっさと任務の説明をしろ」

（DQNモードは漆黒と呼ぼつ）

そして神機を振り上げて、一気に振り下ろす！

コクーンメイデンは二つに裂けて大地も砕けた！

そしてその勢いで次の目標を砕きに向かう

裏タクミ「お前はアイツよりも酷く殺つてやる！」

そして、次のアラガミを

神機を使わなくては殺せないはずのアラガミを素手で圧倒していた
コクーンメイデンも反撃して内蔵していた針をタクミに向けるが
タクミは全ての針を叩き折った！

しかし、アラガミの再生能力は半端ではない

一瞬で針を再生して俺に向ける！

それを避けて後ろから神機を投げて、刺さったところに渾身の力を
込め

そして、コクーンメイデンの頭部に一撃を喰らわす

コクーンメイデンは黒い塵となって神機に吸い込まれていった
いや、喰われたのだろう。

俺は地面に落ちた神機を拾い上げ、こう言った

裏タクミ「フン、さっさと帰るぞカノンが待っている」

まだ出発もしていないサクヤに向けてそう言い放った

サクヤ「どう？落ち着いた？」

タクミ「はい、もう大丈夫です」

その瞳には光が宿っていた

・エントランス・

タクミ「ミッション完了です」

ヒバリ「ミッション、お疲れ様でした」

ヒバリ「それにしても、任務が早かったですね」

タクミ「ああ、すぐ終わらないといけないからな」

ヒバリ「カノンさん　ですか？」

タクミ「なぜ、それを知っているんだ！」

タクミ「ナズエミテルンデイス！！」

ヒバリ「み、見てませんよ！抱きつかれているところなんて！！」

タクミ「派手に自白したねえ、ヒバリ君」

タクミ「このことは」内密に　　」

タクミ「なんたって他の職員はいなかったからね」

ヒバリ「わかりました」

タクミ「じゃあ、カノンはどこにいるんだ!？」

なぜか気迫を足したタクミ

これじゃ、アリサはどうなるんでしょうね？

ヒバリ「た、たぶん自室だと思いますよ」

裏タクミ「たぶんじゃねーだろ!」

ヒバリ「ひっ!」

裏タクミ「オペレーターだろ!？ちゃんとチェックしろよ!」

ヒバリ「は、はい!」

ヒバリ「カノンさん、現在どこにいますか？」

カノン「呼び出し!？」

裏タクミ「いきなり話かけんじゃねえよ!」

裏のタクミは暴走を続ける

作者「ヒバリちゃんをいじめんじゃねえよ!」

裏タクミ「カノンは呼び出しを怖がってんだ！！いきなり話（ry

作者「だめだこいつ　早く　なんとかしないと　」

作者「TOLのセネルよりたちが悪い　狂犬ってより狂った猛獣
じゃないか」

作者「仕方ない！現在より神崎タクミを後書きルームに転送だ！！」

コウタ？「おっしゃー！調教だな！」

作者「調教っていうなよ！教育と呼べ！」

第陸話「口付けと邪魔とダディヤーナザアーン」 後編（後書き）

タクミ「ん？ここは？」

作者「後書きルームだ、屑が！」

タクミ「屑ってなんだよ屑って！」

作者「ダディどころかヒバリちゃんまでいじめやがって 屑以外
になにがある！！」

タクミ「くっ」

コウタ？「このことをカノンさんが知ったらどうなるかな？クツク
ツクツクツク」

作者「そうだ！カノンはどうなる！DQNの恋人だなんて悲しむぞ
！」

コウタ？「そんな根性は矯正してやる！」

作者「そんなタクミは修正してやる！」（さすがに無理か）

作者「次回から、裏、DQNの二つを出したらすぐに後書きルーム
だからな！」

タクミ「わかりました！！」

コウタ？「本当に分かったのか？体に教え（ry）」

作者「お前は手を下すな、コウタのイメージが悪くなる」

作者「俺が楽しく教えてやるよ！ヒヤハハハハハハハ！！！」

現在、調 いや、教育をしています

作者「これで 調 教育完了だ！」

- 結果 -

戦闘以外で漆黒が出なくなりました
力がその分上がった！！

コウタ? 「やったな作者! 強くなったぞ!」

作者「戦闘限定だから結構、力を増やしたZ E!」

タクミ「なんだか気分がすっきりしたよ、ありがとう!」

コウタ? 「でも、あいつ全然傷とかねえぞ?」

作者「これを見てどう思う?」

コウタ? 「すごく、(傷が) 大きいです」

作者「タクミに手刀でやられたんだ」

タクミ「普段の力の強くなった気がする」

作者「じゃあ、一話で言ってた「ビルでも壊せそうな気がする」

を実践してはどうだい?」

タクミ「いいな、やろうやろう」

コウタ? 「じゃあ 始め!」

言うまでもない

ビルは完全に倒壊した

回し蹴り一発だけでだ。

作者「まるでモビルスーツみたいだな」

コウタ? 「確かに、MSも回し蹴りでビル壊す奴がいた気がする

」

タクミ「俺が ガンダムだ!!!」

作者「次回。」

タクミ「おいおい」

コウタ? 「矯正されたタクミ!」

タクミ「ちょwwおまwww」

作者「タイトル決めてないんだけど」

タクミ・コウタ? 「お前の方が屑だ!」

現在、いろいろと感想を募集しております

ユーザでなくとも感想ができますのでよろしくお願いします!

では次回!

最近、作者はテイルズやガンダムなどのバンナムのゲームにはまっております

ゴッドイーターは言わずしても分かりますよね

T O R Ⅱ テイルズオブリバーズ（現在 6 週目クリア）

T O L Ⅱ テイルズオブレジェンティア（現在 2 週目の途中）

補足は要りませんでしたかね

だが私は謝らない

作者「タイトルが決まりましたがすでに俺だけ」

作者「お菓子とエリックと頭上に注意」

お楽しみに！

作者「最近、やけにgdgdな事件が多いです」

「PCが急にインターネットエクスプローラーを閉じますとかをやってくれちゃうんだよな」

誰か！俺に知恵を！分けてくれ！

あと小説の才能も 無理かww

作者「ついに ついにっ！！エリックさんではありませんか!？」

エリック「おや？新入り君かい？」

タクミ「俺、あなたに憧れているんです！」

エリック「そりゃ僕は華麗だからねえ」

作者「あなたには生きてもらいたいのには山々なんです」

カノン「死んでください」

タクミ「なに言ってるんのカノン!？」

カノン「だって プラストでかぶってるし」

タクミ「まてよ」

神崎脳内データベース

検索中

タクミ「プラストってなんなんだよ！」

カノン「私が持つてる神機の銃パーツですよ」

タクミ「そうかそうか なるほど」

タクミ「おい！作者!！」

作者「わかつたけど エリックさんが空気に」

エリック「僕の華麗なステルス能力さ！空気じゃない！」

タクミ「さっさと神機決めようぜ」

作者「じゃあプラストとショートorバスターとタワーね」

カノン「それが作者さんの基本装備なの？」

作者「俺であつて俺でない、神崎タクミだよ」

タクミ「向こうの記憶が薄いからな作者は」

作者「どうせ俺なんて台詞を覚えられなかったバカですよ」(第四

話参照)

タクミ「お前は、執念深いな」

作者「もういい　本編の方に行こう」

PC「だが断る！」

作者「なに！？」

タクミ「彼は現在機嫌が悪いんだ」

作者「とにかく、いけるところまで行ってやる！」

第漆話「お菓子とエリックと頭上に注意」(ディレクターズカット版)

現在捜索中です

作者「たぶん、自分の部屋にいるんじゃないかな?」

作者(ここだけのところですが漆黒はヤンデレです)

作者「だが戦闘中だから矛先はアラガミさんだな」

俺は見事なまでに迷子になった

タクミ「俺は迷子になったのか?」

タクミ「やばすぎる」

作者「俺が道を示してやろう」

そのとき、エレベーターが今居るフロアに降りてきた

タクミ「エレベーター?そうか!新人区域まで行けばいいんだ!」

俺は早速エレベーターに乗り込んだ、ここが何処かも知らずに

????「あいつは誰なんだ?気付いていないようだから放っておくか」

エレベーターは新人区域まで作者の力で勝手に動いた

作者「作者の力と、だが私は謝らないって使いようだな」

エレベーターは新人区域に着いた

- 新人区域 -

タクミ「見慣れた場所だ　今度、カノンにアラグラの中を迷わないように教えてもらおう」

しかし、カノンも迷うことになるのであった

タクミ「ん？いいにおいがする　こっちか」

タクミ（カノンの部屋か　入ってみるか？）

トントン、とノックをする

タクミ（あ　敵戦力を調べていない　いったい何人いるんだ）

聞き慣れた声で返事が来た

カノン「どなたですか？」

タクミ「俺だよ俺お」　神崎です」（オレオレ詐欺になるところだった）

カノン「タクミさん？入っていいですよ」

タクミ（さん付けの時は他の人が居る場合だ　いったい誰が）

疑問をはらみつつもドアを開ける俺

「????「あなたが新型の人ね、名前は？」

タクミ「そうです、俺の名前はタクミ、神崎タクミです」

「????「タクミね、私の名前はジーナ・ディキンソンよ、ジーナでいいわ」

カノン「ジーナさんってとっても狙撃が得意なんだよ、私とても尊敬してるんだ」

タクミ「そうなんですか、これからよろしくお願いします」

ジーナ「私こそ、よろしく」

タクミ（それにしてもこの服はいい　狙撃は男もか　）

カノン「クッキー作っただですよ、その　食べてくれませんか？」

タクミ「ああ、もちろん頂くよ」

そう言っただけ俺は皿からクッキーを取って食べた

ふわぁ〜とくると思ったら爆発するような甘みが炸裂する

タクミ「うん！すっごくおいしいよ！ー！」

カノン「よかったあ、おいしいって言うてくれて」

俺はちゃんと味わいつつも皿に手を伸ばす

案の定、すぐにクッキーは無くなった

タクミ「すごく美味しかったよ」（幸せや〜）

すごく幸せそうな顔である

この時代に幸せそうな顔をしたのはこいつくらいなもんだ

カノン「タクミさんったらほっぺたにクッキーの屑つけちゃって」

カノンは俺の頬に付いていたクッキーの屑をとって　ね

ジーナ「私、お邪魔かしら？」

俺・カノン「い、いえいえ全然！」

ジーナ「息びつたりね　」

少し残念そうな表情を浮かべる

ジーナ「じゃあ私は自分の部屋に戻るわ」

俺・カノン「ちょ、ちょっと、待ってくださいよ!」

二人は残された

タクミは以前と同じく深呼吸をする

カノンも深呼吸をしている

タクミ（今度は俺からだ!）

カノン「あろう」

俺は舌を噛みそうになった

俺は、超取り乱しそうになったところをなんとか抑えてこついった
タクミ「なんだい？」

カノン「また 目を閉じてくれませんか？」

タクミ「ああ、やってやる」

今度は手を使っってきている

俺の背中に手が伸びる

俺も手を伸ばす

通信だ

俺・カノン（勢いです！）

作者「俺じゃ表せない DCって奴です、すみません」

そして、通信に答える

タクミ「なんですか？」

ツバキ「これより任務だ、早急にエントランスまで来い」

作者「もう漆黑にはならないぞ！念願のことはやらせてやったから
な」

タクミ「はい！」

カノン「もう行っちゃうの？」

タクミ「ああ、帰ったらもう寝るよ さすがに一日に仕事が多すぎる」

カノン「確かに タクミって仕事が多いよね」

タクミ「明日は、射撃練習を手伝うよ」

カノン「うん！」

タクミ「エレベーターまで一緒に来てくれないか？」

カノン「いいよ、でも 手をつないで」

タクミ「ああ、いいよ」

そういつて手をつないだ（手をつないだって俺から！？）

作者「くそっ、俺的に（メンタル的に）書きづらい」

DCです、ご勘弁を 申し訳ありません

エレベーターに乗り込んだ神崎さん

タクミ「じゃあ、また今度」

カノン「また明日！」

タクミ（明るくしてくれてるな）

タクミ「ああ、明日だ！」

作者「さつさと行け！あとは頼んだ、ツバキ君」

通信が入り、怒声が響く　ツバキ「はやくこんか！」

俺が謝るのは当然だが、カノンも何故か謝っている

ツバキ「誰か居るのか？そいつが遅らせているのではないのか？」

タクミ「いいえ、誰もいません」

俺はカノンの口を手でふさいだうえに落ち着きはらって答えた

ツバキ「さつさとこい」

せっかちである

タクミ「それじゃあ、また明日な」

カノン「うん！」

・エントランス・

ヒバリ「あ、来ましたね」

タクミ「ああ、今日は気分もいいぞ」

ヒバリ「ではミッションの説明をします」

以下省略

タクミ「死神、か」

ヒバリ「では、気をつけてくださいね」

タクミ「ああ、帰ったらさっさと寝るよ」

- 鉄塔の森 -

神機使いが二人いるようだ

赤い服の赤い髪の人がこつちにくる

赤い人「やあ、君が例の新人君かい？」

タクミ「ああ」

赤い人「僕の名前はエリック、エリック・デア^①フォーゲルヴァイ
デ^②」

タクミ「俺の名前はタクミ、神崎タクミだ、よろしく」

エリック「よろしく頼むよ、タクミ君」

エリック「君も僕みたいにry」

死神さん「エリック、う」

俺はその台詞を言い終わる前に上に跳び、オウガテイルを一閃した。

こうしてエリックは助かった

作者「そうはさせん！」

オウガテイルが四匹も飛び降りてきた

俺は銃形態ガンフォームに切り替え極太レーザー（ディステイニーみたいな感じ）に撃ち出した

タクミ「堕ちろ！」

作者「エリック、貴様は生かさん！」

タクミ「ってより働けよお前！」

死神さん「俺はソーマだ」

タクミ「ソーマだかニートだか知らねえけどな、手伝え！」

以下省略

エリック「う、うわあああつああああー……!……!」

タクミ「マモレナカタ」

ソーマ「言っておくがここではこんなことは日常茶飯事だ」

タクミ「よく、そんな台詞が吐けるなクソ野郎がっ！」

ソーマ「てめえも死にたくなかったら俺に関わるな」

ソーマは神機を俺に向けようとする

タクミ「なにしゃがんだ！俺に神機をむけるなんて！！」

俺はソーマの神機を蹴りで弾き飛ばした

タクミ「お前は最低な奴だな！」

ソーマは豆鉄砲を喰らったような顔をしている

あれはただの覚悟を聞くだけなのにな（作者は本編の記憶が薄いです）

ソーマは壁まで飛んで刀身パーツが少し痛んだ神機を拾い上げた

ソーマ「さっさと行くぞ」

俺は神機を地面に刺して深呼吸をした

ソーマの神機は装甲が俺の蹴りで壊れかけていることに反省した

オウガテイルとコクーンメイデンが二匹ずついる

タクミ「おもしろい組み合わせだなあ、なあソーマ君？」

ソーマ「ちっ、くそが」

俺はオウガテイルにさっきの報復のように高く跳んで上空から神機を兜割りの要領で突き刺した！

タクミ「俺ってコアの回収が上手な気がする」

ソーマ「くっ、雑魚の癖に！」

作者「NPCがオウガテイルに1分くらいかかったりしたのは無印のいい思い出」

(俺TUEEE的に)

ズシャアアアア！！

オウガテイルがソーマの前で二つになった。

タクミ「大丈夫かい？ソーマ君」

ソーマ「俺はお前より年上だ！」

そういつてコクーンメイデンを斬り伏せた

タクミ「じゃあ、エリックさんを救ってやればよかった！！」

俺はコクーンメイデンの砲身(頭部)に拳を喰らわす！

レーザーが内部で弾ける

なんともグロテスクな光景である

そして、捕食形態に変形して喰らう！

あかきひとみのつりよぐ
捕食形態なので強い強い

タクミ「コアを全て回収！ボーナスでも出るのかな？」

ソーマ「さっさと帰るぞ 疲れた」
（なんなんだよアイツは！）

・エントランス・

ヒバリ「エリックさんがKIAですか」

タクミ「ソーマの奴は助けようとしなかった」

ヒバリ「気を落とさないください」

タクミ「ああ、分かった」

ヒバリは笑顔を努めてつくり、「任務、お疲れ様でした」

タクミ「そうだそうだ、明日は射撃練習をするようにスケジュールを合わせてくれ」

ヒバリ「それでは、10:00に射撃練習です、それにしても練習熱心なんですね」

タクミ「いや、教えるほじや」

ヒバリ「カノンさん　　ですよね　　」

タクミ「ああ、そうだよ」

ヒバリ（私も神機があったらよかったのに　　）

タクミ「飯でも食いに行こうかな」

作者「そうそう、反省を元にカノンの電話番号を聞きだしておいたんだよ」

（メールアドレスは標準装備です）

電話をかけようとしたところにリンドウが

リンドウ「ようタクミ、探したぜ」

タクミ「え？なんですか？」

リンドウ「お前達の入隊祝いに一杯　　いやいや二人とも15だったな　　」

リンドウ「まあいい、食堂までこいよ、俺のおごりだ」

タクミ「ありがとうございます！！」

リンドウ「そうだ、コウタつてのがまだ見つかってないから探してこい、これは上官命令だ」

リンドウはわざとらしく慣れない言葉を使ってみせた

タクミ「はい、分かりました上官殿」

俺はダイヤザーンの言葉を使う

リンドウ「なるべく早くな」

俺には見当がある「俺の力で気絶させました」と自白した奴がいるから

・コウタの部屋・

タクミ「起きろ、コウタ！」

コウタ「もう たべれないよ かあちゃん」

タクミ「手荒な事はしたくないが仕方ない!!」

タクミはエルボードロップを腹に喰らわす!

コウタ「くはっ、ノゾミ いつからそんなに暴力的につ!!」

タクミ「俺だよオレオレ」

コウタ「タクミ タクミなのか?」

タクミ「そっだよ、神崎タクミだ」

コウタは表情を変えて、「で、なに?」

タクミ「リンドウさんが飯おごってくれるっつてよ」

コウタ「やったー！」

タクミ「俺的にはカノンをさそって二人で飯を」

コウタ「そのために支部長にボーナスもらったんだもんな」

タクミ「そうだよな、飯をおごってもらったあとにカノンにおごるか」

コウタ「ゴッドイーターって腹が減るのが早いよな」

タクミ「じゃあコウタは食堂に行ってる、俺はカノンをエスコートするー！」

コウタ「意気込みがすごいな」

・カノンの部屋の前・

俺はさっそくカノンに電話をかける

タクミ「カノン、今どこに居るの？」

カノン『今は自室に居ますよ、どうしたんですか？』

タクミ「ご飯でもどうかなって」

カノン『本当ですか？』

タクミ「ああ、20:00くらいにどうかな？ちょっと遅いけど」

カノン『いいですよ、でもなんでそんな時間なんですか？』

タクミ「これから、リンドウさん達とご飯を食べるんだけど、二人だけで、ね」

カノン『うん、でも今からでもいいよ』

タクミ「じゃあ、リンドウさん達とご飯を食べて、そのあとに二人だけでね」

カノン『じゃあ、今から行くね』

タクミ「君の部屋の前に今、いるんだよ」

リアルだと怖いよね

トントン、っとノックをする

タクミ「合図でも作るか」

カノン「そうですね、三回ノックするのはどうですか？」

タクミ「最初はそのくらいでいいかな」

カノン「それじゃあ行こっ」

そうカノンが言って、二人で歩きだした

第漆話「お菓子とエリックと頭上に注意」(ディレクターズカット版)(後書き

ggdgd事件って起こると連鎖するよね

DCが非常に多い回となっておりまして

いつか そういつか

要望がありましたらノーディレクターカット版を投稿するかもしれない
ません

いま、後書きを書くにも書いたときから結構時間が経っているので
無理かもしれませんが

それでは次回、お楽しみに！

第捌話「食事と狂気と虐殺と」（前書き）

作者「サブタイトルが昨日からは考えられないものになっている

」

コウタ「虐殺はなんでついたんだ？」

タクミ「お前は食堂へ行け！」

コウタ「ちえっ、なんだよタクミ」最初のタイトルは「

リンドウ「それは俺が言う」

タクミ・コウタ「リンドウさん!？」

作者「ごめんごめん、呼んでたのにMCが働かなくてな」

タクミ「でもゲストはいないってお前が言ってたじゃねえか」

作者「ごめんってば、特大のネタバレするからさ」

作者「食事と後半の文字は関係ありません」

タクミ「それだけ？」

作者「結構なネタバレだぜ」

コウタ「あんたって人は「

タクミ「あんたは一体なんなんだー！」

リンドウ「ハイテンションなところですが、本編に行くか、

俺に台詞をくれ！」

作者「じゃあ、これ！」

リンドウ「えーっと、自分のけつは自分で拭くさ」

リンドウ「この台詞はなんなんだよ！介護されてんじゃないのか！

？」

作者「感動的な台詞じゃないか！」

タクミ「その台詞だけ聞いたら 作者ってDS？」

コウタ「Mじゃね？前々回の教育の時なんて」

作者「黙れ ブチ殺すぞ」

リンドウ「それじゃあ適当に見てってくれ」

タクミ「適当じゃ駄目だつてば！」

作者「次回はカノンを出すか」

リンドウ「俺の出費を聞いたらお前達は俺を尊敬するぞ！」

コウタ「今度はそのお金で 綺麗な娘を」

タクミ「あんた達なんかがいるから世界がつ！」（アラガミのせい
です）

リンドウ「なあ、もう本編いつていいか？ビールが飲みたいんだが」

作者・タクミ・コウタ「どうぞどうぞ、俺達なんかに構わなくて結
構ですから、すいません」

リンドウ「それじゃあ、俺はお先に まってる〜ビール〜」

タクミ「俺達は飲めないな」

コウタ「ああ、そうだな」

作者「俺なんか設定間違えただけで昔じゃ学生とか呼ばれた年齢だ
ぜ」

タクミ「俺達なんか受験だぜ」

コウタ「時間だ、行こう」

作者「コウタがカツコよくなっている！」

タクミ「カノンが待っている さっさと行くぞ」

作者「カノンって言わなかったらカツコよかったのにな」

タクミ「能書きはいい、行くぞ！お前ら！！」

作者「カツコイイよータクミくん」（棒読み）

第捌話「食事と狂気と虐殺と」

俺は、カノンをつれて食堂のフロアへ移動している
この時代だ食堂と言っても配給される物資とf.cフェンリルクレジットで買う物しかないが
f.cではとても物価が高いのでそうそう買えることはない
しかし、新人が入ったときなどは支部長によって色々物資が歓迎用
に用意されるのである

作者「支部長万能すぎるな」

フデコート
食堂

タクミ「けっこう人がいるね」

カノン「本当だね、いつもはこんなに人がいないのに」

タクミ「支部長が言ってたけど新人が入った時だけだったね」

カノン「私の後輩はあなただけよ」

タクミ「コウタもいるぜ」

カノン「あなただけでいいの」

タクミ（けっこう、俺とコウタの差ってあるのか）

作者「実質、神薙コウ君の活躍フミゲでわかるよね」

タクミ「俺、誰が誰だかわからないから教えてよ」

カノン「いいよ、えーっと、はしっここにかたまってるのが小川シュンさんとカレル・シュナイダーさんで、第三班の人です」

タクミ「ジーナさんと同じ班なんだね」

カノン「悪口ばかり言ってきたりするんですよ」

タクミ「あいつらとは関わりたくないな」

カノン「うん、関わらなくていいよ」

カノン「で、第一班の近くにいるのが大森タツミさんといって第二班の班長です」

タクミ「なかなかのイケメンくんではないか」

カノン「そんなことないよ」(あなたの前では)

カノン「そして、話に加われないのがブレンダン・バーデルさん」

タクミ「扱いがひどいな」

カノン「じゃあ、第一班の人達の横に座ろうよ」

タクミ「ああ、でもその前に」

カノン「その前に？」

タクミ「この会の主役らしい登場をする!...」

カノン「それがいいよ！！なにか手伝おうか？」

タクミ「ああ、でも自分でやりたいんだ」

タクミ「神崎タクミさん」

コウタ「よう、タクミ来たのか」

タクミ「きさまあああああー！！俺の登場がああああー！！」

カノン「や、やめてください、タクミさん！」

タクミ「ああ、すまんカノン、コウタ」

カノン「タクミの手を人の血で汚さないで　その手で世界と私を守ってくれるんですよ」

俺は下を見て考える

他の神機使いには聞こえていないようだ

タクミ「ああ、この手はアラガミを断ち、カノンを守る手だと誓った」

コウタ「シリアスに登場してくれたね」（うまくやったな、タクミ）

俺とコウタは握手をした

俺はコウタの隣に座って、カノンはサクヤの隣に座った

リンドウはすでにアルコールが入っている

リンドウ「よぉ〜し、主役が揃ったなあ」

リンドウ「そんじゃあ乾杯だ!」

肉などといった物はまず手に入らないが肉の形をした鳥肉味レーシ
ョンといった名前の面倒くさい物を食べることになった

タクミ「まあまあいけるな」

コウタ「たしかにまあまあだね」

タクミやブレンダンは酒を飲まない方なので実質酒を飲んでいるの
はリンドウだけである

タクミ「どうして、お前はそっち側なんだ?」

カノン「え?なんでですか?」

ブレンダン「別にいいじゃないかタクミ」

- 時間は流れる -

タクミ「そろそろ部屋に戻るよ、リンドウさん、ありがとうごさいます
ました!」

いろいろ貰った俺、（俺得すぎる）

カノン（場所変更ですね）

リンドウ「もう行っちゃうのか？これからが楽しいところじゃねえか」

タクミ（コウタ、残れ）

コウタ「それじゃあこれから俺が盛り上げますよー！」

カノン「それじゃあ私も行きますね、明日は射撃練習もありますし」

リンドウ「一気に二人も抜けちゃった　お開きにするか？」

サクヤ「ええ、ってよりリンドウ、お金払えるの？」

リンドウ「オカネ　？おかね　お金　金」

酔いが覚めたようだ

リンドウ「おわりだ！これ以上おこねえー！！」

コウタ「えー、リンドウさん、そりゃないよー」

リンドウ「それじゃあお前がはらうか？」

コウタ「む、無理です　」

リンドウはレジに行って苦笑いしている

リンドウ「またデートしてやらないとな」

一方、俺とカノンは俺の部屋にいた

飯の続きである

タクミ「俺が食べさせてあげるよ」(恋人の決まり!)

カノン「私がまずやりたい」

タクミ(グイグイきてるねえ)

カノン「あーん」

タクミ「おいしいようん、うまい」

タクミ「じゃあ、いくよ」

カノン「とってもおいしいよ」

作者「爆せる者と滅せる者の称号をタクミは手に入れた!」

作者にとって好ましくない状況を壊す人間が来た!!

作者「ひゃっほう! 兄貴!!」

リンドウ「よう、タクミ、一杯やらないか?」

タクミ「いやいや、俺未成年余裕だし」

リンドウ「硬いこと言うなよ、ん？カノンもいたのか？ここはタクミの部屋だよな？」

雨宮リンドウは混乱した

タクミ「リンドウさんだっていつつもサクヤさんを連れ込んでるじゃないですか」

リンドウ「それを言うなよ、罰として二人とも一杯な」

俺・カノン「え？なんでですか？」

リンドウ「上官命令だ、とでも言えばいいか？」

この時代は上官が法律を作りそうな時代だからいいんだよ

タクミ「じゃあ、一杯だけですよ」

カノン「お酒、飲まなきゃいけないのかな？」

俺とカノンは乾杯を小さくして飲んだ

タクミ（冷やしカレードリンクよりましだな）

カノン「意外といけますね」

タクミ「ああ、たしかにな」

・ここでもしばらく時間が流れる・

俺は酔ってしまった カノンも例外ではない

リンドウ「それじゃあ俺は部屋に戻るわ、明日はデートだからな」

タクミ「リンドウ！がんばれよぉ〜」

カノン「リンドウ、がんばりなさい」

カノンは酔っても人格変わるんだね、よくわかります

酔った二人は大胆に

タクミ「カノンもそろそろ戻ったら？明日は早いよ」

カノン「うん、そうする、おやすみ」

普段ならすごく溜めるキスさえも酔った二人の前ではなんの壁もないも当然だった
つてより記憶も残らないけどね

作者「酔いすぎだな」

タクミ「おやすみ、カノン」

そういつて手をベットから振る

タクミ「それにしても俺の部屋が改造されている」

広い部屋になってしまって家具もたくさん置けそうな気がするスペースがある

そして浴室に広くなったベッド
支部長の仕業だな

「うっ
」

なにかが俺の底から来る

コワシタイ

「ぐっ
」

チヲミタイ

「
」

コロシタイ

「静まれ
落ち着け
」

タバタイ
ハラヘッタ

俺の意識ではない

「博士の所へ行けばなんとかなるかな
？」

- サカキ博士の研究室 -

タクミ「博士 助けてくれ」

榊「どうしたんだい!？」

タクミ「なにかを壊したい、血を見たい、殺したいっていう気持ちがあるんだ」

榊「それではアラガミの集会パーティーへ行ったらどうだい？」

タクミ「ああ、どんなやつがいてもいい さっさと行かせる」

その瞳は紫だ

榊「自分でポイントまで行ってもらうけどいいかな？」

タクミ「いいぜ!じゃアナビゲーターは任せた!！」

榊「たしかに ヒバリ君ならキミを止めるかも知れないね」

タクミ「それじゃあいくぜ!！」

榊「聞こえるかい?」

タクミ「ああ、通信感度良好だぜ」

タクミ「この殺したいとかいう意識は神機あいはつのものだったぜ」

榊「やはりそうか」

タクミはつつこまない、そう、道にアラガミがいるから

オウガテイル二匹とシユウだ

タクミは動いた？

次の瞬間、アラガミは一刀のもとに崩れ去った

コアを取られたのだ当たり前だ

榊『キミはそういう特殊技能でもあるのかい？』

タクミ「あるんじゃないでしょうか？」

そう言い終わったタクミの目の前には大勢の客がいた

榊『新種もいるようだね』

タクミ「わかってますってコアは全部回収でしょ？」

榊『まあ、そうなるかな』

タクミは巨大な戦車のようなアラガミ『クアトリガ』や鉄で出来たサソリのような、そして騎士にも見える『ボルグ・カムラン』他にもヴァジュラのようなアラガミ『プリティヴィ・マータ』そしてそこに集まる小型のアラガミ達もいる

タクミ「ゲルメレースだなあ、おい」

榊「ああ、早く喰わないと喰われてしまうねえ」

俺は獣の咆哮のような叫びと共に剣を振るっ

クアトリガの感知できる範囲に入ったのか
クアトリガ「グオオオオオオ！」

他のアラガミに機械的な獣の咆哮を轟かせ、ミサイルを俺に向けて
発射する！

俺はミサイルを軽く蹴って弾道をそらして後ろのコクーンメイデン
に命中させる

コクーンメイデンは絶命したようだ

俺はすぐさま紅眼も顔負けな捕食形態をグロテスクな音と共に出し
てクアトリガを一口で喰らった

タクミ「コア摘出成功！」

タクミ「一匹ぐらいコアバーストに使っていいよな？いいに決まっ
てるさ！

自問自答しながらもプリティヴィ・マータに狂気を向ける

さすがのマータさんも怯えたのか氷の壁を生成して攻撃の準備をし
ている

タクミ「」のビビリがあ！」

すこし溜めて、一閃！

氷の壁は碎けて地面に崩れる

マータは動けないように足を切り崩されて、頭部を切断されてから

タクミ「コアは貰う」

どこかの仮面ライダーのような台詞を言ってからコアを喰らった

タクミ「オラクルキターーーーーー!!!」

コアバーストとは、アラガミの体を形成しているコアを神機がとりこむことにより

適合率を極少量上げて、その上コアバーストの恩恵としてオラクル細胞を神機で生成できるようになり

銃形態の撃てるのも無制限となり、剣形態のオラクル結合も強くなつて

結果、無双モードが小一時間続く(つまり、ミッション時間いっぱいまで)

タクミ「シエノサイド虐殺だーーーーー!!」

そういつてガンフォーム銃形態に変形して撃ちまくる

コア以外だけを崩壊させるといったコアを集める天才といったところだ

タクミ「これもボーナスのためなんぞな」

理由はわかるよね?わからなかったらあの娘のためだと思ってくれ(あつてるけどな)

とても人間とは思えないほどの力で地を裂き、カムランさんの盾を素手で碎き、そして喰らった

クアトリガを素手で瀕死まで追い込むのは最強の証拠あかし

そして、俺はどんどん加速^{バースト}していった！

そして三分後

榊「おおっ！これが
カップラーメンか！！」

シツクザール「終わったようだよ、ペイラー」

榊「ああ、すまない、ヨハン」

シツクザールは情報をほぼ把握している

シツクザール「ものすごい戦闘だったな、クアトリガのミサイルを
蹴って弾道をそらすなど」

榊「落ち着いたかい？タクミ君」

タクミ「こちら神崎タクミ、コアを一つを除き全て摘出成功です」

シツクザール「迎えをよこす、ご苦労様。」

そういつて通信は切られてしまった。これからが大変だというのに

五分後

タクミ「な、なんなんだよっ！お前！」

神機^{プレデターフォーム}の捕食形態のような腕、そして紫の髪のようなもの、神々しい
オーラを放ち、

スサノオが、タクミの前に現れた！

しかし、恐怖による「アレ」が目覚めてしまった

裏タクミ「ちっ、こんな奴で俺に渡すなっつーの！」

漆黒くろきびこみが目覚めたのだ

第捌話「食事と狂気と虐殺と」(後書き)

次回、神機喰らいの異名をもつスサノオと対決！

そして射撃練習という名のデート

今回はシリアスってよりふざけられない終わり方だからな

次回、漆黒と激戦とコアと

次回はお見逃しなく！

第玖話「漆黒と激戦とコアと」(前書き)

前回、俺はなにかの取引をしているところを目撃して、夢中になっているときにつしろからきた上司に気付かず怪しい薬を飲まされて体が(ry

作者「そんな展開では、ありません！」

前回、俺は上司リンドウさんに食事にさそわれた

そこで待っていたものとは

作者「だからそんな展開は無いつて、次は本気ガチでやれよ」

前回、俺は上司リンドウさんにさそわれて食事に行った

そこではいろいろあったのだが何者かの陰謀によって大半がカットされてしまった

作者「どうせ、俺が悪いんですよ、わかります」

前回、俺(ry

作者「一度俺がツッコミ入れることに前回、まで戻るのはやめようぜ」

そして俺は自室で二回戦を真剣にしているときに、乱入は起こった

リンドウさんの、乱入だ

俺は、酒を飲まされて、そして誰もいなくなったときに

俺は、なにかに目覚めた

激戦はなぜか始まった　そして、今、強大な敵が前に、現れた。

第玖話「漆黒と激戦とコアと」

それは、俺の目の前にいる。

巨大な化け物、しかし、神々しい姿でもある。

堅固なる漆黒の鎧を纏った化け物。

鬼の仮面を付けた巨人のような神。

帯電しているかのような紫の髪。

そして、太く、長く、強靱な尻尾。

その尻尾の先には剣、その剣には、光り輝くコアが見える。

そして、それは今にも俺に襲い掛かりそうな重圧プレッシャーを放っている。

そのの名前は『スサノオ』

神機を好んで捕食し、ゴッドイーターキラーと呼ばれる。

しかし、それ以前に、偏食場と呼ばれるものが、通常のアラガミよりも強力なため、第一種接触禁忌と指定されている。

俺に対して、威嚇であろうか？ 奴は、咆哮した。

俺も負けずに叫ぶ、そして、俺はスサノオに挑む、この咆哮と共に。

しかし、それは尻尾によって阻まれた。

剣は、俺に向かって、飛んでくる。

俺は仕方なく後ろに下がる

地面に刺さった剣は光を増す　　そう、爆発したのだ

俺は吹き飛び、旧居住区の瓦礫に突っ込んだ

「くそつ、爆発するのかよ！」

その台詞を言い終わった頃、すでに、スサノオは次の行動に移っていた。

両腕を前に構えて、剣を、こちらに向ける

俺は走り出した、スサノオの方へ。

スサノオは、俺を捕捉したらしく、剣から光を放つ、いや、それは弾丸だった。

俺は、さっきの反省を生かして、弾丸には着弾するまえに、離れることにした。

その判断は正解だった。

今さっきまで俺が居た瓦礫の山は、一瞬で塵と化した

「ふう、死ぬかと思ったぜ」

そう言いながら俺は、スサノオへ近づいていく！

そして、一閃！

足が一本切れたが、スサノオの足はボルグ・カムランとは違う

まだ、平気らしい。

「さすがアラガミ、これぐらいじゃ大丈夫か」

しかし、ダメージを受けたらしく、少しふらついている

「今だ！！右腕はもろう！！！！」

スサノオの右腕は切り落とされた

しかし、その右腕のオラクル細胞は、なくなった足に変わった

「このままじゃ、負ける」

そして、俺は、荷物を漁る

俺が取り出したものは

コアだ、それもオウガテイルのコアだ

「これでいいか」

傷の付いたものなので、ボーナスは少ない。

それを、神機に食らわせる。

「オラクル、キター　　！！」（お決まりね）

コアバーストをすることにより、俺はバーストモードよりも、凄まじい力を手に入れることが出来る

コアなので、動いているアラガミから喰らうのとは勝手が違う。

後々コアバレットとかできるからね

俺は、こちらに向かって走ってくるスサノオに正面から、突っ込んだ！！

凄まじい力と力のぶつかり合い

神機と、スサノオの左腕の接戦　　しかし。

「甘いんだよ！！」

俺は、自分の左手でスサノオを殴りつける！！

スサノオの漆黒の鎧には、亀裂が入っていく。

スサノオは仰け反る

そこに、渾身の蹴りを入れる！！

スサノオは、仰け反っていた為か、裏返った。

俺は、そこに、神機を構えて斬りかかろうとした時だった

地面が爆発したのだ

しかし、コアバーストモードの俺には、通用しない。

「甘すぎると言っている……！」

そこを、跳んで避ける、そして、装甲を展開して、爆風で翔び上がる！！

20メートルは飛び上がっただろう。

そのとき、スサノオは逃げ始めた

しかし、蒼眼あおまきこめの射撃で、それは叶逃わなかった。

「狙い撃つぜ！」

どこかのガンダムマイスターである。

その弾丸は、スサノオを囲む弾幕となり、圧倒した。

俺は紅眼あかまきこめの尋常じんじょうじゃない程の力で神機を振るい、こう叫んだ。

「天空翔裂撃！！！」これで厨二な技の完成！

ちなみに二度と使いません

俺は、神機を背負うように構えて、弾幕に悶えるスサノオに、一撃を喰らわす！！！！

スサノオの体は、尻尾を除いて一刀両断された

そして爆発する！！

「ふっ、きまつたぜ」

そして、コアのついた尻尾は、あとで美味しくいただきました。

作者「なぜ、爆発したのかというと」

- 1、弾丸 S
- 2、制御 M
- 3、爆発 L

作者「これくらいの説明でいいかな？」

そのとき、タクミは膝をつく

「くっ、はあ はあ コアバーストは きついか」

無理もない、決め技とか言っあかきひとみて、あおきひとみ紅眼と、蒼眼を調子に乗って
コアバーストモードで使うからである。

スサノオが、塵と化す 少しの素材を残して。

俺は目を閉じた ヘリコプターの音が聞こえた気がするが、気に
しない

俺は意識の奥に沈む

家族

友達

そして家

様々なものが、意識の中に現れて、消えてゆく
そう、アラガミに喰われていく

俺は、また失った
意識 いや、記憶の中でも

力がないことに、憤りさえも感じる

今なら力がある、神機あいはつが

そして、仲間もいる

しかし、死んだ者は帰ってこない

父親 親父はゴツドイターだった しかし、父親もアラガミ
に殺された

そのときも、俺がアラガミに、怒りを覚えた。
しかし、力がなかった

今なら力があるのだが、その力が俺を苦しめる。

作者「現在、スサノオの偏食場の影響によって苦しんでいます」

作者「ここらへんで主人公の謎すぎる謎を暴いていきましようか」

作者「ん？そんな時間じゃない？は、はいわかりましたー」

????「立てよ」

タクミ「だれだ？ こんなところに」

周りは闇 見えるのは赤い二つの光
そして、聞こえるのはその赤い光の声だ

「????」「立てつつつてんだろ!」

タクミ「は、はい!」

俺は立ち上がる　そして見えたものは

タクミ「俺　?」

そこにいたのは俺だった、しかし　その瞳は赤かった

紅「ようやく周りが見えたか　」

タクミ「ここは?」

紅「ここは、お前　いや俺達の意識だ」

紅「お前は、あの怪物と戦っているうちに、精神をやられたんだよ」

紫「よう、紅、黒を連れてきたか」

タクミ「どうして、俺がこんなにいるんだ?」

蒼「それは俺が、説明してやる」

蒼「あのアラガミが放っていた偏食場で、お前は精神を侵食されかけたんだ」

紅「漆黒のままだったら負けてたのも必然だったけどな」

漆黒「コアバーストなんかして、他の奴に代わったら体が耐えられなくなっちまって、そこに、あいつの偏食場がきたからお前は精神汚染なんか喰らうんだよ」

タクミ「そうなのか」

紫「まあ、彼女が空腹じゃなけりゃ、こんなことにもならなかったけどな」

タクミ「彼女？誰だ？」

漆黒「黒と、紅と、蒼は知らないよな」

紅「いったい誰なんだよ！」

蒼「落ち着け紅、あいつが起きるぞ」

タクミ「あいつに彼女　いったいなんなんだよ!!」

紫「あいつつてのは黄金のことで」

漆黒「彼女つてのは、神機あいはうのこと」

紅「彼女？なんで神機が女なんだよ!!」

蒼「落ち着けつて、いつてるだろ、紅」

タクミ「彼女つてことは、人格でもあんのか？」

紫「ああ、可愛い声だ」

漆黒「言ってることはえげつないけどな」

蒼「それが殺意と食欲の根源ってわけか」

タクミ「だれか、攻略してあげるよ」

漆黒「それが、姿は見えないんでな」

紫「まあ、お姫様ってところか」

紅「とんだお姫様なこと」

蒼「でも彼女が俺達の親かもよ」

漆黒「そうだ、黒は元々だけどな」

タクミ「俺は俺ってことか　ならいい」

紅「それなら、俺は黒を守もんなきゃな」

蒼「そうだな、俺達が、だな」

タクミ「どづいうことだ？」

漆黒「黒がいなくなったら、俺達も消えるってこと」

タクミ「そうなのか」

紫「お前は、俺達の存在意義、つてもものさ」

タクミ「ああ、わかった　俺は、お前達のために頑張るよ」

紅「お前が卑屈根性がなくてよかったぜ」

タクミ「どこかの主人公じゃねーよ」

蒼「俺に隠すような根性は矯正してやるよ」

漆黒「どこの使用人だよ」

タクミは笑っている

紫「わらったな、つらいことがあったりしても、笑えばいいんだよ」

紅「でも、我慢はすんなよ」

蒼「泣きたいときに泣けばいい　ってより、そんな暇はなかったな　」

漆黒「今、泣けよ　家族が喰われるのを目の前にして平気な奴はすくねーよ」

タクミ「ああ、俺は過去に囚われない!!」

紫「これで、乗り越えられたな　」

漆黒「さあ、お前は行け！仲間がいる」

紅「俺達は任務の時に活躍するからよ」

蒼「明日は俺の活躍かもな」

漆黒「射撃演習か」

タクミ「その時はカノンに優しくしてやれよ」

蒼「ああ、それじゃあな」

そう、背中を押されて、俺は歩き出した。

第玖話「漆黒と激戦とコアと」(後書き)

タクミ「俺って謎が多すぎだな」

作者「ごめん」

タクミ「俺のわかっていることって」

神崎タクミ(15)

身長176cm

体重56kg

作者「こんな時代だから痩せてんのね」

タクミ「これぐらいしかないよな？」

作者「すまん、主人公なのに」

タクミ「ここで足そうぜ！そうしたら許す」

作者「そうだな、そうしよう」

黒髪で目の色は黒、結構変わる(カラーコンタクトじゃないぜ)
目鼻の整った顔(通称イケメン)

外郭居住区ではそれなりにモテていた模様
子供受けがよくて、結構なイケメンである

家族は三人、(タクミを入れて四人)
両親と妹である

名前はまだない(これからもない)

家族ではタクミだけが生き残ったってより父親はKIA(戦死)ね

すっごくトラウマになってる

タクミ「ヒドイよ！後書きだからって！！」

作者「イケメンにしてやっただけでも感謝しろ！土下座しろ！！許しを乞え！！！」

作者「そして俺の奴隷になりやがれ！！！！！！」

作者は肅清を受けています

作者「えーっと、なにかと文句つけてすみません」

次回、演習と誤射と戦友と

作者「演習が次回になった！その分長くしてみせますよタクミさん！！」

タクミ「自分だってタクミのくせに」

作者「俺はお前、お前は俺、だけど違う人生を送っている　だから違うんだ！」

タクミ「どっかのレプリカの台詞を言うな！屑が！」

作者「俺とお前、どっちが本当の神崎タクミか　勝負だ！！」

タクミ「だが断る」

作者「この一言に、俺は勝てない」

作者「そうそう、そろそろ十話も超えるからオーズスタイルを卒業しようと思っています」

タクミ「いいんじゃない？」

作者「Wスタイルで」

タクミ「そんなタイトル、修正してやる！」

作者は二度目の粛清中です

タクミ「次回の俺の戦いは」

タクミ「誤射？これから直せばいい」

タクミ「戦友、コウタだな」

作者「まあ次回ですね」

タクミ「次回からの投稿は三日に一回のペースですよ？作者さん？」

作者「そうだな 風邪とか宿題とかがなきゃできるペースだな」

タクミ「とにかく次回だ！」

作者「皆さんも体にはお気をつけてくださいね」

タクミ「感想があつたら更新が早くなるかもね」

コウタ「俺の出番、まだ？」

作者「ゴメンゴメン、忘れてたよ」

コウタ「誤字、脱字、アドバイス、要望があつたら俺が作者の方に伝えるんで任せてよ！」

作者「俺が俺で見るって、台詞が、出番が少ないからって勝手に喋るんじゃない！」

コウタ「じゃあ、次回の戦友の文字分働かせるよ！！」

作者「タイトルの重さがわかってんのかわかってないのか」

タクミ「俺に休憩をくれ！！漆黑開放するぞ！！！！」

作者「次回は最初寝てるから安心だぜ」

コウタ「もう寝てんじゃねーの？」

作者「意識の奥にいるんだもんな」

コウタ「メーデーを聞けよ！」

作者「とにかく次回だ！」

タクミ「次回だ、次回！！長々としてんじゃねー！」

第十話「演習と誤射と戦友と」(ディレクターズカット版)(前書き)

作者「祝、十話目です!!」

タクミ「わーわー」

コウタ「ふーふー」

作者「なんかテキストだな」

タクミ「作者こそ適当テキトーってしろよな」

コウタ「十話とか普通じゃね?」

作者「十話ぐらいで喜ぶな、と?」

コウタ「そうじゃないけど やっぱり」

タクミ(つまり五十話ぐらいまでは喜ぶな、か)

作者「やっぱりバカにしてんだろ!」

この前書きと後書きではコウタは頭が悪くありません

タクミ「つまり、作者の方がバカ、だな」

作者「もう、いやだ!せつかくコウタにフラグを立てる権利をやる
うと思っただのに」

コウタ「本当マジ!?」

作者「カノンさんとサクヤさん以外です」

コウタ「なっ、ロシアっ娘は!?」

作者「けれどお前はその権利を棒に振ったんだよ」

タクミ「残念でしたねコウタさん」

コウタ「もう 俺は仙人になる!なっでやる!!」

作者「頑張ってくださいーい」

タクミ「頑張ったら権利をやるってのはどうだ?」

作者「そうだな、このままじゃかわいそうだ」

コウタ「もう俺にはノゾミと母さんしか」

作者「えーっと、コウタさん？」

コウタ「なんなんだよ！憐れみにきたのか！？陰険だな！！」

作者「いやいや、キミの活躍しただいで権利を上げようと思ってね」

コウタ「マジか！？やったぜ！！」

コウタ「これからの俺の本編とMCの活躍を楽しみにしてるよ」

タクミ「やっぱり やめようか」

第十話「演習と誤射と戦友と」（ディレクターズカット版）

- 医務室 -

俺は目を覚ました

タクミ「この天井は知ってるぞ!!」

リンドウ「おおっ、起きたのか」

タクミ「ここは医務室だな」

リンドウ「いきなりだが　なんであんなところにいたんだ?」

タクミ「彼女　いや、神機が空腹だつてな」

リンドウ「彼女? 神機が空腹?」

タクミ「とにかく、神機がアラガミを喰いたいってよ」

リンドウ「だからってスサノオは無いだろ」

タクミ「スサノオ? あの黒い化け物か?」

リンドウ「とにかく、生き残っただけでも褒めてやるか」

タクミ「それにしても今は何時ですか?」

リンドウ「今か? 今は5時だが、なんなんだ?」

タクミ「10時に射撃演習の予定があるんですよ」

リンドウ「射撃演習ねえ　どっちにしても俺には関係ないな」

リンドウ「それにしても新型って剣と銃のどっちも把握しておかないといけないから面倒だな」

タクミ「そこは仕方ないですよ」

リンドウ「とにかく、起きたら支部長室に行けっつよ」

タクミ「そうですか」

リンドウ「他のアラガミもコアが無傷だから支部長直々に褒めるっつてさ」

俺はベッドから抜け出て医務室をあとにする

・支部長室・

シクザール「よく来たね、今日は大活躍だったね」

タクミ「いえ、そんなことはないですよ」

シクザール「とにかく、疲れただろう？自分の部屋で休みたまえ」

タクミ（なら呼ぶなよ）

そう思いながらも支部長室を出た

タクミ「とにかく部屋に戻るか」

作者「その後、事件は起こる」

「ここらへんは超事件発生です」

・自室・

タクミ「この薄暗さ　　コーヒーでも飲んだらハードボイルドだな」

「

俺はハードボイルドにもコーヒーをコップに注ぐ

もちろん分量などわからない

作者「それにしても自室にはいつもコーヒーがあるよな」

リンドウさんの部屋にもコーヒーがあってそれを飲まないのは結構な不思議

タクミ「ん〜うまい」(嘘です)

砂糖を入れていないというかブラックである

作者「コーヒー豆をコーヒーにするのは結構な技術である」

飲み終わったあとにソファに腰を卸す

そして新聞でも読んでいるところに依頼者が飛び込んでくるのもハードボイルドだ

タクミ「そりゃないか 探偵じゃないからな」

タクミ「ベッドに逃げ込むってのもハードボイルドだな」

そう言っつてベッドに横になった

タクミ「ん？」

ベッドが暖かい 地味にホラーだ

俺は布団を一気に剥がす！

暗いが、誰かいる

いや、寝ている

俺はその誰かが起きてはならないと思っつて照明は点けずに顔を近づける

俺はハードボイルドに布団を掛けなおす

これが男の優しさ

そして頭を右手でおさえる

ハードボイルドな悩み方だ

タクミ「カノン なぜここに」

作者「これは、私が説明しましょう」

作者「カノンは前回のリンドウ乱入により 泥酔という結果に陥る」

作者「そしてエレベーターに乗れなくなってタクミの部屋に戻ってきたというわけである」

タクミ「ソファで寝るか」

俺はハードボイルドにいくことにする（この部屋だけ）

タクミ「おやすみ、カノン」

そして俺は眠りについた

4時間後 -。

カノンは起きたようだ 以上に緊張している
当然か

カノン「ここは タクミの部屋」

周りを見渡すとソファの方にタクミが寝ている

カノン「 どうしよう」

一応タクミに布団を掛けるカノン

作者「すごい優しいねえ」

そしてカノンは逃げるように部屋を出ようとした

ドアの開く音で俺は起きた

タクミ「待つてよ　待つてくれ」

カノンは立ち止まる

俺はソファァーから立ち上がる

タクミ「せつかく来たんだからコーヒーでも飲んでいつてよ」

とっさの一言はこれだった

カノン「う、うん」

俺はハードボイルドにコーヒーをいれた

ハードボイルドな力でコーヒーは美味しく出来上がった！！

作者「ハードボイルドな力ってなんなんだよ!？」

カノンは普通に飲んでくれた、もちろん砂糖入りだぜ

ハードボイルドな男は臨機応変なんだぜ

ハードボイルドな男は心配をかけさせないためにも自分のコーヒーにも砂糖を二、三個入れる

俺はあえて語らない　それがハードボイルドだ

ハーフボイルドじゃない!!

カノン「すごくおいしいです!」

カノン「私ってコーヒー苦手なんですけどこれは飲めます」

タクミ「よかった 不味いとか言われなくて」

言葉は続かない

作者「ここは面倒だな カットだな」

作者「いや タクミを信じるか」

タクミ(そういえばカノンって四歳上なんだよな)

タクミ(可愛いからいいけどね)

タクミ「カノンってどんな感じに誤射があるの?」

カノン「私の誤射ですか?」

言っているのか悪いのかを考えているようだ

タクミ「一応把握しておいた方が蒼あいつにいいかな、と思って」

カノン「あいつって?」

タクミ「演習の時にすぐわかる」

カノン「わかったよ」

カノン「私の誤射は完全な誤射だって」

タクミ「完全な誤射？」

カノン「タクミさんが言うのだと」

「俺を狙ってるだろ！」

タクミ「そこまでいくか」

タクミ「これから直せばいいって言うてるだろ？」

「俺が手伝う、まあ俺は誤射なんて気にしないけどな」

そういつて抱きしめてやる

カノンはすごく赤い

しかし、物欲しそうにこちらを見ている

俺はこう言う

「目を閉じて」

俺のターン！！

カノンは目を閉じる

作者「すごくく表現しづらいんですけど」

作者のターン！

「トランプカード発動！！」

そこで通信が入る

ヒバリ「射撃演習の用意が早めに出来ましたので訓練場までお越しください」

俺・カノン「はい」

タクミ「それじゃあ行こうか」

カノン「うん」

- 神機整備場 -

タクミ「神機かのじよはメンテ済みなのな」

カノン「なに言ってるの?」

タクミ「なんでもないよ、さあ行こう!」

その瞳は紅ではなかった

突然、幼女の声が響いた

タクミ(いまのが神機かのじよの声か)

カノン「どうしたの?行くよ?」

タクミ「ああ、行くよ」

- 訓練場 -

俺の瞳は蒼だ

蒼で仕事になるんだろうか？

タクミ「カノン、まずは^{ターゲット}的を狙うんだ」

カノン「う、うん」

カノンは冷静を保つのにふんばっている

タクミ「そして引き金を引く」

作者「本当に引き金つてあるのか？つて思った人は近くの書店かアマゾンで救世主^{メシア}の帰還をお買い上げください」
作者「PS、アメリカ支部つてあるのかな？」

タクミ「いいじゃないか！」

カノン「やった！」

タクミ「一回^{ターゲット}目的に当ててるつてすじがいいよ！」

カノン「でもまだまだだよ」

タクミ「謙遜すんなくて、言っただろっ」

カノン「うん！」

タクミ「次は俺も手伝つよ」

そういつて俺はカノンの手をにぎる

タクミ「さあ、次をやるうか」

どんどんあてていくよ〜

タクミ「次は擬似戦闘用のターゲットだ」

これはゲームの最初らへんに出会うオウガテイル？である

タクミ「俺がやる」

そういうと神機を構えてオウガテイル？に狙いも定めずに撃つ！

銃口からはレーザーが放たれてそして消えた

と思ったらオウガテイル？の後ろから全て命中する！

そして爆発して吹き飛ぶ！！

カノン「こんなの無理だよ〜」

タクミ「へ？ごめん！自分のペースでやってたよ」

カノン「いいけど自信がなくなってきた」

タクミ「本当に申し訳ございません！許してください！〜！」

タクミ「なんでも俺の出来る限りのことはしますから！〜！」

現在のカノンは小悪魔的である、いや神機に神経接続をしています

カノン「じゃあ、キスしてくれる？」

タクミ「ああ、いいとも！」

黒や紅や蒼などでは対処が難しいので漆黒だ

俺はがつつりいく！なんたって漆黒だから

DCじゃない 表現上の問題だ

がつつりいったあと-。

蒼「俺はいつたい？」

そのあと練習は続く

- 結果 -

俺は「がまん」を覚えた

漆黒は爆発する権利を得た

カノンの射撃能力が上がった！（タクミがいるときだけね）

- 新人区域 -

俺とカノンはジュースを買った

ジュースの名前？いつものあれだよ

タクミ「疲れたなあ」

カノン「そうだね、でも私、結構射撃が上手になったかな」

タクミ「ああ、少なくともこの疲れの分ぐらいはな、まあもつと上達してるだろうけどね」

そういう感じで話している二人のところに戦友コウタの姿が

コウタ「よう！お二人さん」

タクミ「　　なんだよ」

コウタ「いやいや仲がいいなって思ったただけだぜ」

コウタ「これから新人だけで任務だったよ」

タクミ「新人だけで？」

コウタ「タクミが強いからだったよ」

カノン「タクミって信用があるんだね」

タクミ「そういつてくれるとうれしいよ、カノン」

コウタ「俺が空気になってしまっ」

コウタ「とにかく、エントランスで待ってるからな」

タクミ「え？待ってなくてもいいじゃないか！」

カノン「早くいったほうがいいんじゃない？教官怖いし」

タクミ「たしかにせっかちだし、短気っぽいし、厳しいし、急いだ方がいいな」

そういつて俺はエレベーターに乗り込む

ちなみにコウタは先にいっちゃったんだよ

第十話「演習と誤射と戦友と」（ディレクターズカット版）（後書き）

この作品でのディレクターズカットとは？

- 1、作者の模写できない内容
- 2、作者的にまずいもの
- 3、見てくれている人の気分を害すると考えられる内容
- 4、面倒くさいもの（作者的に）

作者「ちなみに4は微妙に使います」

タクミ「いままでのDCの矛先って全部俺」

作者「仕方無いだろ、全部お前の仕業だろ！」

タクミ「でもこの話じゃ、カノ（ry）」

作者「人のせいにするんじゃない！！」

現在、いままでの復讐をさせていただいております

作者「おらおらおらおら〜どうした以前までの威勢は〜」

そついいながら蹴り飛ばす！

タクミ「うぐっ」

作者「逝けやボケ！」

ここらへんがDCです

作者「H A N A S E !」

DCを出した場合作者はこの世のものとは思えないほどの恐怖を味わい、死にそうになるが死なない

作者「くっ」

タクミ「神崎タクミプロトタイプ、沈黙！」

ここで言わせてもらいますが作者はプロトタイプです（オールドタイプでもいいぜ）

というか作者の考えを全て主人公にしてしまえ！にすると

察してください　　お願いします

タクミ「私はニュータイプのはずだ！」

作者「新型神機だからニュータイプでも構わないけどな」

次回予告、コウタとの任務

そして来日

迫り来る猿の影

タクミとコウタはこの中型アラガミを討伐することが出来るのか!?

次回、第十一話「新人二人、そして来日」

タクミ「オーズスタイル卒業な」

第十一話「新人二人と新型来日」（前書き）

作者「サブタイトルを少し変えてみました、神崎です」

タクミ「総合司会の神崎タクミです」

コウタ「前書きの時はバカではない藤木コウタです」

作者「ついに新型のあの娘が来日！」

タクミ「俺は神薙とは違う！」

コウタ「確かに鈍感じゃないな」

作者「しかも自分からグイグイいつてるね」

タクミ「そういうこつた、俺は加賀美君など敵と見ていない！」

作者「あんな奴敵じゃないぜ！」

コウタ「でもさ、タクミって捕食なしでバーストがきんの？」

タクミ「楽勝楽勝　だよな？」

作者「たぶんできるさ！たぶん」

タクミ「まずは神機に名前でも付けるか」

コウタ「ぱくぱくゴツ君ってのどう？」

タクミ「うわ、どつかの人がつけそうな名前だな」

作者「ネーミングセンスが新型なコウタ」

コウタ「でも神機に相応しい名前だろ？惚れんなよ」

タクミ「惚れないって、とういか神機は女の子だし」

コウタ「そういう設定にしてやがったのか、タクミ」

作者「まあまあ、そういう人格の神機ですから」

タクミ「まあ、時間も少ないですし、ネーミング大会は中止ということだ」

コウタ「つまんね」

作者「そろそろ本編にいくか」

タクミ「本編に入ったらすぐ任務だろ？」

コウタ「だりー、お前やれよ作者」

作者「前回の約束はどうしたのかな？」

コウタ「前回？」

コウタは回想中です

コウタ「フラグをどこにでも立てることができる権利はもらっ！」

作者「カノンとサクヤ以外だけだな」

コウタ「別に構わない、俺の目標は別にある」

作者「そのフラグを立てるときはタクミ君にも手伝ってもらおう」

タクミ「なんで俺がっ!？」（まてよ　　）

コウタ「最初、俺が手伝わなかったら大変だっただろ？」

タクミ「サーセン」

作者「さっさと本編いくぞ！」

タクミ・コウタ「おー!!行こうぜ!!！」

ロシアの娘「あの、私の出番はいつなんでしょうっか？」

第十一話「新人二人と新型来日」

エントランス

コウタ「おつ、早いなタクミ」

タクミ「ところでどんな任務なんだ？」

コウタ「猿だっけ？猿の惑星？コンゴウだ！」

タクミ「コンゴウか、しらねーな」

タクミ「ジェネシスー！！」（俺は鈴村健一さんをご希望です）

コウタ「ノルンに猿の惑星 ジェネシス 創世記っていう動画があったな」

タクミ「どんな動画なんだ？」

コウタ「覚えてねーけどサルがそつとう怖かったぜ」

タクミ「シーザーー！！」

コウタ「お前見たことあるだろー！！」

タクミ「気にするな、体に障るぞ」

コウタ「ところで、サクヤさんって知ってる？」

タクミ「ああ、知ってるけど、なに？」

コウタ「あの人っていいよな〜感じもいいし綺麗だし強いしさ」

タクミ「そうか？スナイプは下手だし誤射がカノンに次いで高いし
(ゲームの感想)

タクミ「しかも、カノンは最近頑張ってるからサクヤさんが一番になるのは目に見えてるぜ」

タクミ「それにカノンの方が綺麗だ!!」

タクミ「それにこの前の任務じゃ全部俺が殺ったんだぜ」

コウタ「とにかく、さっさと現地に行こうぜ」

タクミ「話を変えんなよ!それより現地はどこなんだよ……
!!」

現在、神崎さんは叫びまくりです

鎮魂の廃寺

タクミ「寒い 凍死するかも」

コウタ「俺なんか半袖だぜ、お前体悪いの?」

タクミ「お前は異常だ」

タクミ(今度、服を作ろう)

コウタ「とにかく行くこうぜ」

タクミ「ああ、行くか！」

階段を上る、こんな時代でなければ観光ができるほどに美しい情景だ

タクミ「綺麗だな　雪　」

コウタ「そうだね、ノゾミにも見せてやりたいな」

タクミ「カノンと一緒にきたら　」

コウタ「悪かったな、カノンじゃなくて」

タクミ「ああ、謝れ」

コウタ「だが私は謝らない」

タクミ「冗談だつてば　俺は言葉の途中でなにかを発見した

タクミ「木像じゃん！やつたぜ！！」

しかし、その木像は小さい

コウタ「小さいから技術がつまってるんじゃないかね？」

タクミ「そうだよな、小さくて部屋に飾れる」

コウタ「飾るのかよ！！まあいいけど」

タクミ「売る人多いって聞いたぞ」（ゲームではそれぐらいしか役割がないけどね）

作者「年代物を100個集めて神崎君に託した俺」

作者「神崎君は全部売っちゃったけどね」

タクミ「オウガテイルがいるぞ」

コウタ「おっしゃー、やってやる!」

コウタが構えたときにはオウガテイルは塵になっていた

タクミ「一匹目もらい!」

上のやりとりにはありませんがどちらが何匹倒せるという賭けがあったのは言うまでもない

コウタ「何っ!?!」

タクミ「コアはボーナス一匹分な」

コウタ「ずりーじゃねーか」

タクミ「くるぞ!」

オウガテイルが二匹一緒に突っ込んでくる
それをコウタが銃撃で応戦する

タクミ「もらったー!」

コウタに気を取られているオウガテイルの後ろに廻り込み、そして喰らう！

コウタ「しまった！？喰われちゃった」

タクミ「コアはもちろんもらったぜ！」

コウタ「コンゴウで勝負だ！前座なんて興味ないんだよ！」
オウガテイル「」

タクミ「コンゴウももらって完全勝利だ！」
パーフェクト

作者「お気づきだろうか？神崎君の目は黒なのだよ」

作者「黒でも強いんだね、神崎君」

コウタ「タクミ！うえうえ！」

タクミ「えっ？」

コウタ「だから、上だつてば！」

タクミ「上？」

「う、うわあああああああー！？」

俺の上にコンゴウが飛び乗ってきた

骨が軋む　重い

もちろんゴッドイーターでなかったら死んでいた

コンゴウが腕を振り上げる！

コウタ「させるかっ！！」

コウタは俺を殴り殺そうとしたコンゴウの腕と弱点の顔を弾丸で弾き飛ばす！！

コンゴウは痛いのかはわからないが俺の上から飛び退いた

タクミ「お返しだ！これでもくらえ！！」

コンゴウのダメージを受けた顔を殴りつける！！！！

面は弾け飛ぶ、そして

コウタ「もらったー！！！！」

コウタは言葉と共に銃撃を浴びせる！

タクミ「そうはさせん！俺が喰らう！！」

俺・コウタ「俺が、俺たちがゴッドイーターだ！！」

コウタの銃撃によりコンゴウを足止めして、俺が捕食形態プレデターフォームを用意していた

鮮血があたりに飛び散る

タクミ「あゝあ汚れちゃった」

タクミの顔や服は血だらけでまるで怪我をしているように見えたが

コウタ「こわっ タクミ怖すぎ 」

狂気なものを感じる表情とそれをひきたてる血が恐怖に変わる

しかし、顔の血を拭うといつもの笑顔を見せた

タクミ「俺の勝ちだな！あとでおごれよ〜」

作者「別に狂気的な表情じゃなくて苦笑してるんだけどコウタの勘違いです、たぶん」

アナグラ

コウタ「あれ？メールだ」

タクミ「なにになに？」

コウタ「えーっと、ツバキさんだな」

コウタ「第一斑にロシアより新型が入隊、エントランスに至急集合するよつに」

タクミ「新型？俺だけで十分だっつーの」(極東支部唯一の新型が)

コウタ「まじかよ　　」（タクミみたいなやつが二人もいたらアラガミ全滅するだろ　　）

タクミ「とにかくいくか　　」

コウタ「ああ、行こう」

神機を整備士に渡す

エントランス

コウタ「至急っていったくせにまだいないのかよ」

タクミ「ソーマは来てないのかよ」

そのときエレベーターが上がってきた

コウタ「あの娘こかな」

タクミ「いかにもロシアって娘だね」

ローズグレイの髪、外国人でしょうね
カノンは　カノンだ

タクミ「　　」

コウタ「なに？それ？」

????「日本語で結構です」

タクミ「そ、そうなの？」

コウタ「今のなんなのさー！」

ツバキ「ロシア語でこんにちはだ」

リンドウ「タクミ、お前ロシア語使えんのか？」

タクミ「全部の言語が使用できるけどやりませんよ」

コウタ「じゃあ、アフリ（ry）」

タクミ「やらないってば」

作者「アフリカの言葉とかグーグルで調べるのめんどい」

作者の不平不満は放っておいて、会話に戻ります

ツバキ「アリサ、自己紹介だ」

アリサ「わかりました」

これよりタクミの言葉はアフリカの言葉だと思ってください

アリサ「私はアリサ・イリーニチナ・アミエーラです、よろしくお
願います」

タクミ「よろしくー！」

周りの人「?????」

タクミ「よろしくだってば！よろしく！！」

ツバキ「よろしく、と言っているんだ」

タクミ「さっすがツバキさん！アフリカの言葉も理解してくれた！」

ツバキ「これは通訳しなくてもいいな、それより日本語でいい」

タクミ「すみませんね」

タクミ（教官には通用しないか）

コウタ「キミみたいな綺麗な娘は大歓迎だよ！」

アリサ「よくそんな浮ついた考えでここまで生き永らえられましたね」

タクミ「そんな　　そんな言い方ってないだろ！！！」

アリサ「なんなんですか！？私は有りのままのことを言っただけです！」

コウタ「まあまあ、落ち着いてよ」

タクミ「確かにコウタは浮ついているが、それはその場を和ませるための芝居なんだ！」（多分）

タクミ「それに、俺を助けてくれるほど強いんだ！」（詳しくは戦闘を参照です）

アリサ「」

言葉を失ったようだ

コウタ「ゴメンな、こんな空気にしちゃって」

アリサ「いえ　　すいません」

コウタ「謝らなくていいって、仲良くやるっぜ」

アリサ「　　はい」

タクミ（いいように利用された気がする　　）

ツバキ「とにかく、これからアリサはいろいろ予定が入っているの
で解散だ」

ツバキ「アリサはリンドウについて行動するよつに、いいな?」

アリサ「はい」

ツバキ「あと、新人三名は翌日より合同訓練なので覚悟することだ
な」

そういうことで解散になった

タクミ「俺、完璧に嫌われたな　　」

コウタ「アリサって可愛いな」

エレベーターが下がるまでずっとアリサの方に見とれていたコウタ

タクミ「今度は俺が手伝おうか？」

コウタ「ん？ああ、そうしてくれると嬉しいよ」

タクミ「明日は訓練がはいつてるからさっさと寝るか」

コウタ「確かに明日から厳しくなるってな」

そういつて自室に戻った

アリサ「あの人　あの人が新型なんでしょうか」

第十一話「新人二人と新型来日」（後書き）

「コウタ、大活躍！」

作者「やったな、コウタ！」

タクミ「コウタがいなきゃ死んでたよ」

作者「よし、約束のフラグを立てる権利だ」

コウタ「よっしゃー！！」

タクミ「でもメインキャラ同士がくつくとストーリーがやばくなるから保留しろよ」

コウタ「そういえばゲームじゃ空気になりがちな主人公だからな」

タクミ「メイン中のメインであり、空気なのが主人公だよ」

作者「とにかく、地味に今回は土台を作っていきましたよ」

コウタ「主人公に責められるアリサ、そしてそれを庇う俺！」

タクミ「俺はどうなる!？」

タクミ「アリサに嫌われるどころかファンの皆様にバッシングされる」

作者「これからだ、これから」

作者「つーか初期のアリサはツンの塊だからここまでできれば上出来っしょ」

タクミ「つまり、デレ期が勝負ってか」

コウタ「デレ期は俺か　タクミか」

タクミ「俺にはカノンがいるんだ、浮気など出来ない」

作者「つまり、コウタに傾けば万事OKなんだがな」

コウタ「タクミにデレたら悲しい片思いつてわけか」

作者「とにかく、仙人になるんじゃないぞ、コウタ」

タクミ「やる気があつたら自分の妹すらも権利の及ぶところだぞ」

コウタ「それはない」
作者「話がそれてきたし次回予告だな」

次回の神崎タクミの戦いは
どうもゴッドイーターバーストのPSP壁紙のカノンだけを見る
方のタクミです

次回は 未定？

作者「すまない、タクミ」

作者「そして見てくれている人々、すいません」

次回、未定のその先へ

第十二話「師匠ってシユウなの？シユウなの？どっちなんだよー！！」

(前書き)

作者「VSシユウですね、わかります」

タクミ「シユウってあのシユウ？」

コウタ「シユウじゃねーの？」

作者「師匠だろ？」

師匠「俺ってシユウなの？シユウなの？どっちなんだよー！！」

作者「榊博士の発明ってすごいな」

タクミ「師匠と話ができたぜ」

コウタ「師匠でいいんじゃない？」

師匠「シユウにしてくれ」

作者「師匠のスーパーサイヤ人4って女だよな」

コウタ「師匠スーパーサイヤ人4の戦闘能力は」

タクミ「硬い、攻撃の範囲がちょっととした脅威」

作者「っーか邪魔」

コウタ「スーパーサイヤ人2のほうが硬い気がするけど」

タクミ「あれって発熱ナイフ真でも全然斬れない不思議」

コウタ「スタン無効にするとちょっととした雑魚」

師匠「スーパーサイヤ人4じゃなくて界王拳」

タクミ「うっせー！だまれ！雑魚風情が！！」

師匠「助けて、ヴァジユにゃん」

ヴァジユにゃん「ヴァジユにゃんっていうにゃよ！僕にはヴァジユ

ラっていう立派なカツコイイ名前があるんだにゃ！！」

コウタ「俺、神機もってくるわ」

タクミ「俺もつれてくるよ」

作者「本編どうぞ」

「

師匠とヴァジユにゃんは彼女の食べ物になったことはいつまでもないね

第十二話「師匠ってシユウなの？シユウなの？どっちなんだよー！！」

前回、新型神機使いのアリサ・イリーニチナ・アミエーラが極東支部に配属された

アリサの成績は優秀と聞いているが、どこまで優秀かはわからないとにかく、アリサはコウタよりもさきに入隊しているので俺やコウタに成績で負けていたらおかしいのである

タクミ「プライドの塊みたいな娘だったな」

コウタ「確かにね、でも可愛いな」

コウタは気が抜けてしまった

タクミ「とにかく、今日は早く寝るかな」

コウタ「まってよ」

タクミ「なに？」

コウタ「もう一回くらい任務に行かないか？」

タクミ「うん 確かに、もう一回くらい任務に行けるかもな」

そういうことでエントランスに戻った俺たち

エントランス

ヒバリ「あ、タクミさん、それにコウタさんも」

コウタ「それについてなんなんだよ」

タクミ「声をかけたってことはなにかあるんだろう?」

ヒバリ「そうです、話が早くて助かりますタクミさん」

コウタ「俺、無視されてる」

ヒバリ「メンバーはサクヤさんとソーマさんとその人です」

コウタ「名前すらも呼んでくれないのかよ!」

タクミ「まあいいじゃないか、それじゃあ行ってくるよ」

ヒバリ「気をつけてくださいね」

コウタが手を振ってみるが

いつもは軽くあしらうタクミと楽しく話している

タクミ「コウタってなんでさけられてるんだ?」

コウタ「全然思い当たることはないけどな」

作者「コウタが気付いていないだけである」

タクミ「まさに世紀末なロケーションでございますーす」

コウタ「皆様の左側にはマグマの海が臨めます」

タクミ「そして右側には電車の残骸とマグマの部屋へ繋がる穴があります」

俺・コウタ「シユウ師匠せんせい！！」

ソーマ「ヤマシロ博士じゃないのか」

ソーマはアクセルの活躍をご覧になつてる模様です

サクヤ「とにかく、いきましょ」

タクミ「久しぶりに紅あかを使うか」

自分会議

紅「俺の出番か？」

蒼「俺は訓練のとき頑張ったから休憩な」

漆黒「ここは俺とか どう？」

黒「紅がいいだろ」

紅「そうそう、このロケーションには俺だろ！」

蒼「燃え盛る闘志ってか、俺には似合わないな」

黄金「ここは俺に久しぶりに登場してもらおうのどつ?」

タクミ「上目線だから却下ね」

???「私がやりたいな」

タクミ「女の子?」

漆黒「この声は」

紅「この女の子が神機かのみだな」

神機「私にやらせてくれないかな?」

すごい可愛い幼女である

髪の色は黒だ、服はなんというか　ゴスロリだ

赤のドレスに黒のフリルといった感じだが赤が血をイメージさせる

タクミ「キミの名前は?」

神機「アルテミス!」

蒼「アルテミスか　ギリシャ神話にでてきたな」

紅はなにが興奮している

紅「ロリ　　しかもゴスロリ　　」

黄金「最近の街中じゃあロリじゃないのにゴスロリファッションする奴がいるので萎えていたが助かった!!」

タクミ「紅と黄金は極度のロリコンだな」

紅「ロリコンじゃない!幼女が好きなだけだ!!」

黄金「俺は危ない人じゃないぞ!!」

紅・黄金(ぺろぺろしたい　　)

蒼「この変態どもはまかせろ!!」

漆黒「カノン以外を愛するなど、修正してやる!!」

紫「このロリコンどもめ!!」

粛清中です、あと二行くらいで普通に帰ります

紅「俺は、カノンだけを愛する!!」

黄金「漆黒さん!気がつきました、カノンが一番大切なんだ」

紅・黄金(でも、ぺろぺろしたい　　)

あかとおつごんのいくえおしるものはいない

アルテミス「じゃあ私がやっていいよね?」

タクミ「まあ、キミに言われたからにはそうするよ」

紅「アルテミスにやらせろー」

黄金「そうだそうだー」

蒼「しかし」「紅・黄金「アルテミスは可愛いからいいんだよ！」」

紫「仕方ないか」
紅と黄金は矯正するがな

タクミ「俺の中にロリコンが」

アルテミス「じゃあ、またね」

紅と黄金は涙目で手を振っている

自分会議の会場はアナグラに似せてます

煉獄の地下街

コウタ「それじゃあ行こうか」

アルテミス「こっちだね」

声帯とかはチート能力で少女に
ならせてください

コウタ「タクミ？声が違う気がするんだけど」

アルテミス「私はアルテミスなの！ア・ル・テ・ミ・ス！！」

コウタ「うん　アルテミスね、うんうん」

サクヤ「アルテミス？」

ソーマ「お前、頭が狂ったのか？」

アルテミスはソーマに一瞬で間をつめて、自分を突きつける！

アルテミス「キミから食べちゃおうかな」

アルテミス「アラガミより美味しいんだろうな」

ソーマ「くっ、俺は食っても美味くない！」

コウタ「アルテミス、やめてあげてよ」

アルテミス「キミのお願いだったら黒のためにやめてあげる」

ソーマ「助かった」

アルテミス「次に黒や私の悪口言ったら食べてあげるね」

アルテミス「黒は優しいから許してるけど紅はキミのことを殺した
がってるからね」

そうアルテミスはソーマに言い放った

コウタ「黒？紅？それってなんなの？」

アルテミス「黒は私の 言えないよ」

アルテミス「紅は私の分身みたいなものなの」

コウタ「黒っていったい？」（もしかして普段のタクミかな？）

アルテミス「サクヤって人はもう行ってるみたいだね、行こうよ」

コウタ「あれがシユウか」

アルテミスはすでに突っ込んでいる

アルテミス「全部もらっね、シユウ君」

そういつて適合率がシンクロ率400パーセント以上なアルテミスの捕食形態

アルテミス「私ってこんな姿なの？もっとカッコよかったらよかったのに」

不満を言いながらもシユウを喰らった

サクヤ「凄まじいわね」

コウタ「すごいな、アルテミス」

アルテミス「そろそろ黒に返さなきゃね」

コウタ「だから黒ってなんなんだよー!!」

タクミ「なに叫んでるんだ?」コウタ「

コウタ「黒ってお前なのか!」?

タクミ「黒?ああ、俺のことね」

コウタ「目の色のことなのか」

タクミ「なんで黒のことを?さては、アルテミスだな」

コウタ「アルテミスってなんなんだ?」

タクミ「強くて可愛い娘だよ」

コウタ「見えてるのはタクミだけみたいだな、いいな、俺も見えてみたいな」

タクミ「お前が新型だったら見えてたかもな」

コウタ「新型といえばアリサだけだな」

ソーマ「そろそろ帰還するぞ」

タクミ「わかってますって」

作者「リッカさんには会ってませんが会っていることにしましょう
！」

タクミ「リッカさん、この娘をよろしくね」

リッカ「ホント、キミって神機に優しいね」

リッカ「少しは自分にも気をつけなきゃいけないよ」

タクミ「ははは、自分のことは俺がよくわかってるよ」

リッカ「それにしても神機にはいつも傷が少ないけど本当に大丈夫なの？」

タクミ「ああ、気になるなら見てみる？」

リッカ「いや、いいよ」

タクミ「そう　そうとう残念なんだけど」

リッカ「ここには人が多いから　」

タクミ「サーセン」

リッカ「今日はもうメンテナンスしていいの？」

タクミ「ああ、この娘も疲れただろうしな」

リッカ「この子？疲れた？」

タクミ「とにかく、頼んだよ」

リツカ「任せといて！」

そういったやりとりをして俺はエントランスに向かった

エントランス 新人区画 自室 寝る

エントランス

タクミ「よう！おっちゃん」

よろず屋「よお、タクミ」

タクミ「いつものレーション二つな」

よろず屋「アイヨー」

よろず屋「プリン味レーションと牛肉味レーションを一緒に買うやつなんて全支那がしてもお前だけだとよろず屋コーポレーションのネットワークだと出てるぞ」

タクミ「よろず屋コーポレーションってなんだよ」

よろず屋「まあ、いわゆる非合法商法の最先端って奴かな」

タクミ「マジかよ！？」

よろず屋「冗談だつて」

タクミ「びつくりしたな」もう」

よろず屋「よろず屋コーポレーションってのは本部から派遣される
ゴッドイーター専用物資販売部隊ってところだな」

タクミ「でも、おっちゃんは普通の人にも売ってたじゃないか」

よろず屋「俺のところは金さえあれば誰でもいいって支部長がな」

タクミ「ここでも資金を集めていたのか」

タクミ「新聞もくれないか？」

よろず屋「新聞ね、購買部じゃないんだぞ」

タクミ「でも、そこにおいでるじゃん」

よろず屋「これは俺のだが、わかった売ってやる」タクミ「じゃあ、
俺は部屋に戻るか」

よろず屋「まいどありー」

俺は手を振りつつエレベーターに乗り込む

自室には例の空気があふれていることを俺はまだ知らない

第十二話「師匠ってシユウなの？シユウなの？どっちなんだよー！！」

（後書き

作者「本日のテーマは第二回自分会議開催！！！」

タクミ「紅と黄金が 知りたくなかった」

コウタ「アルテミスってどういう風にな名前をつけたんだ？」

作者「アルテミスってのはギリシヤ神話の中で登場する女神です」

タクミ「ゲストに呼ぶか？」

作者「残念だったなゲストは俺が決めるんだよ」

コウタ「今日のゲストは カノンさんです」

タクミ「やばっ」

カノン「神崎タクミさんはここですかー？」

タクミ「逃げなきゃ！」

カノン「そこかなー」

タクミ「まで、カノン！落ち着け！！話せばわかる！！！！」

カノン「浮気なんて死亡フラグ建てたんじゃ回収しなきゃね〜」

現在、フラグをきっちり回収しています

コウタ「リンクエイドしてやるよ」

タクミ「ふっかーっ！」

タクミ「コウタ、サンキュー」

カノン「また回収してあげるね〜」

タクミ「ちょwwおまwww」

作者「エンドレスじゃ困るんだよー！！」

タクミ「おちついてくれ、カノン」

そういつて抱きしめる

カノン「うん」

タクミ「あれは紅と黄金とアルテミスの暴走なんだ」

カノン「え？」

コウタ「確かにな」

タクミ「紅と黄金は筋金入りのロリコンで、アルテミスは悪ふざけなんだよ」

アルテミス「悪ふざけで悪かったな、くろ」

カノン「この娘がアルテミス？」

タクミ「本編と同じ服装だね」

アルテミス「作者さんがこの服を着る！って言ってきたから」

作者「少なからずプロトタイプの性格が混ざっていることを忘れるな」

タクミ「つまりあんたがロリコンだと認めるんだな」

作者「俺はロリコンじゃない、幼女を愛するだけだ」

コウタ「ノゾミは渡さない！」

カノン「コトミはもう幼女じゃないから大丈夫だよな？」

タクミ「俺がカノンとカノンの家族を守るよ！」

カノン「ありがとう、タクミ」

タクミ「愛する者とその者の守りたい者を守るだけだよ」

カノン「私もタクミのことを守るよ」

タクミ「ありがとう、それに身内の不祥事は俺が片付けないとな」

コウタ「俺もノゾミを守るために戦うよ」

タクミ「行くぞ！」

次回、「またネタ切れ」

作者「またネタ切れですので今度更新いたします」

次回の更新は中間テストが中学のほうでありますので10月13日ほどになりそうです

第十三話「中学の中間テストってなんか点取りづらいんだ」(前書き)

タクミ「ガチでこのタイトルにしゃがった」

コウタ「自分の身勝手な判断でどれだけの人を!!」

作者「ソーリーソーリー」

タクミ「きたよ英語の点数が高いぜアピール」

コウタ「英語ってなに? 食えんの?」

作者「点数は テストはまだ戻ってきてないんだぞ」

コウタ「じゃあ、どうして!?!」

タクミ「タイトルの変更をただちに命ずる!!」

作者「お前にそんな権限はない!!!!」

コウタ「誰か止めてくれ」

作者「次回は普通にするから許してください」

タクミ「己の力量を見誤らんことだな」

作者「とにかく、今回は新コーナーだ」

コウタ「新コーナー?」

タクミ「さー、始めました! 新コーナーです」

作者「ひゅーひゅー」

コウタ「ピーピー」(指笛です)

コウタ「俺は総合司会なんだぞ! それなのに俺をないがしろにしやがって!!」

作者「どっかの親善大使の言葉を使うなよ」

タクミ「さっさとコーナーいくぞー」

コウタ「仕方ないか」

作者「では、メールを読んでいきましょう」

タクミ「ペンネーム、P・Sさんです」

コウタ「PS?プレイステーションか？」
作者「そこを詮索するな！」
タクミ「とにかく読むぞ」

「最近、困り事があるんだよ」

作者「フレンドリーだな、イライラするんだよ」
タクミ「黙れ！えーっと、なにに困ってるんでしょうか」

「最近入隊した新人二名が私の講義に顔を出さないんだ」

作者「愚痴はやめて」

タクミ「いいかげんにしろよ!!」

「あなたの決めたことだろ!？」

コウタ「そうだそうだ」

タクミ「落ちろっ!!!!」

コウタ「目標を駆逐するっ」

作者は死んでしまった

「その新人君の名前は神崎タクミと藤木コウタなんだけどこのオープニングでメールを募集していると聞いたのでね」
作者「お前らさぼってたのか!？」

タクミ「あんたって人は!!」

コウタ「作者のせいじゃん」

作者「バレた!？」

作者「しかし、私は負けん!!」

「いでよ、本編への扉っ!!」

タクミ「くそっ、ミラーワールドに生身で放り込んでやる!!」
いつか)

作者「それでは、本編へどうぞ
コウタ「道連れだっ！！」

その後、作者の消息を知るものは（ry

作者「まだ生きてるんだZE」

第十三話「中学の中間テストってなんか点取りづらいんだ」

自室

俺は部屋に入るとすぐにコーヒーを入れる

そして新聞を読む

ハードボイルドな英語の新聞なんだぜ（よろず屋すげーな）

そしてコーヒーカップを左手に、そして口元へ運ぶ

そのときだった、奴^{コウタ}が来たのは

コウタ「タクミっ！大変だ！！」

俺は豪快にコーヒーを新聞に吹いてしまった

タクミ「熱っ！！このバカ！！」

コウタ「ギャハハハハハハ、ヒーヒー、ハーハー、超ウケるっ」

タクミ「笑いすぎだバカあゝ」

コウタ「ゴメンゴメン」

タクミ「で？用件はなんなんだよ！」

コウタ「あ、そうだった」

タクミ「そうだったじゃないだろ」

コウタ「とにかく話すけど」

コウタ「榊博士が講義に一度も来ないから憤りを感じてるらしいぜ」

タクミ「でも、報告はなかったぞ」

コウタ「ところが、メールで送ったって言ってたぞ」

タクミ「メールう？」（確認してないな）

コウタ「ま、とにかくいいこうぜ」

タクミ「あ、ああ」

サカキ博士の研究室

榊「やあ、よく来てくれたねえ」

タクミ（アリサがいるな）

アリサ「それでは、博士、講義のほうを」

榊「それでは、講義を始めよう」

榊「前に言った通り　いや、前の講義にはいなかったね」

タクミ「すいません」

アリサ「まったくです！講義を放棄するなんて神機使用の自覚はあるんですか！？」

ツン期はこんなもんだよね

タクミ「まったくもってその通りです」

コウタ「ごめんなさい」

コウタは頭を下げてそのまま顔を上げなかった

榊「コウタ君は深く反省してしまったようだねえ」

タクミ（寝ているだけだと思うが）

榊「それでは講義に戻ろうか」

榊「アラガミを構成しているオラクル細胞はなんでも食べるんだ」

タクミ「そんなこと知ってるよ」

アリサ「まじめに聞いてください！！」

タクミ「すいません、博士」

榊「では、再開しようか」

「動物や植物のような生物に限らず、鉱物やプラスチックのような合成樹脂

「拳句には通常の生物には危険な核廃棄物だって食べてしまう」

タクミ「凄いな」

榊「そうだろうか？」

榊「まあ、それだけじゃないんだけどね」

そういつて話直す

榊「建造物や大地だって、ほらこの通りだ」

そう榊が話すと後ろの画面が喰い散らかされた建造物の映像となった

榊「結果、『食べ残し』である従来の環境は減少の一途を辿っている」

榊「この辺りには、春には桜を、秋には紅葉を見に行くなんて習慣があっただけど」

タクミ（春に桜、秋に紅葉、か）

榊「今となつては、望むべくもないね」

榊「その一方で、アラガミは食べたものの性質を取り込むことがある」

「最近では『光合成』を行うアラガミすら発見されているんだよ」

「窒素71%、酸素21%」

「世界中の植物が三割弱に減ってしまった今でも、地球の気候は保たれている」

「これらが全て、アラガミの『光合成』のおかげとは実に皮肉な話だとは思わないかね」

タクミ「確かに、でもなぜアラガミは窒素を保つんだ？」

榊「それは多分大気の変化で自分達アラガミの餌がなくなること懸念しているのがもつともだと思うけどね」

アリサ「こんな世界なら朽ちてしまえばいいのに」

タクミ（危険思想はスルーに限るぜ）

少なくともタクミのほうが残酷なシーンを見たのはいうまでもないね

そのとき、榊はコウタのほうへ歩み寄り、頭をつついた

コウタ「うーん かあちゃん、もう食べれないよ」

タクミ「幸せそうな夢だな」

アリサ「ホント、自覚の足りない人ですね」

榊は話題を変えるように講義を進める

きみたち、『ノヴァの終末捕食』って言葉、聞いたことあるかい？

タクミ「はい、アラガミ同士が食い合いを続けた先に、地球全体を飲み込むほどに成長した存在『ノヴァ』が引き起こすとされる『人類の終末』ですね？」

『人類の終末』と言ったときにコウタが起き上がった

タクミ「確か、博士が言い出したと父から聞いていますが」

榊はいつもの冷静さを欠いて、こう言った

榊「僕はそんなこと言っていないよ！」

榊「それに、ただの風説かもしれないじゃないか!？」

タクミ「でも、誰かがノヴァの母体の育成をしているっていう説も巷じゃあるんですけど」

コウタ「エイジス計画が完成すれば、それから守れるんだろ」

タクミ「でも、そのエイジス島でノヴァを育ててるかも知れないぞ」「それに、俺達が集めているアラガミの素材もノヴァの餌になるかも知れないぞ」

榊博士の研究室は外部に情報が漏れないことをご存知な神崎君

榊「確かにその説は有力だねえ」

榊は空気がやばいので話題を無理矢理チェンジした

榊「犬という動物を知っているかな？」

コウタ「え？」

タクミ（犬 か ）

榊「もう大分数は少なくなってしまったが、今も稀に外部居住区などで見かけるはずだ」

俺は外部居住区の事を思い出そうとしたがやはり人が死ぬ場面しか
思い浮かばない

喰われる人、逃げる人、目の前で喰われた母親
あれ？妹は？

同じ服、違う顔

タクミ（そういえばあの服流行ったな　　）

ははっ、他人の空似か　　生きてる　　？

タクミ（そういえばE26に行くとかなんとか）

榊「犬は賢く　　言葉こそ話せないが我々人間とコミュニケーション
をとることができる」

「犬のような性質を引き継いだアラガミがいれば、あるいは共生で
きるのかもしれないね」

アリサ「共生？」

榊「コミュニケーションという観点から見れば、もちろん犬に限っ
た話じゃない」

「昔はサーカスと呼ばれる見世物小屋で猛獣を繰る猛獣使いすらい
たのだからね」

タクミ「俺、ヴァジュラがいいな」

コウタ「オウガテイルもすてたもんじゃないぜ」

アリサ「ふざけないでください！！！！」

俺・コウタ「すいませんでした、もうしません」

アリサは不服そうにそっぽをむいた

アリサ「アラガミと仲良くなんて、出来るわけないじゃない

」

榊「暗い空気にまたなってしまったねえ」

榊「仕方ない、これで講義を終了しよう」

俺・コウタ・アリサ「ありがとうございました」

ラボラトリ（廊下）

コウタ「俺、眠たくなっただし部屋に戻るよ」

タクミ「なあ、コウタ」

コウタ「ん？何？」

タクミ「E26って知ってる？」

コウタ「知ってるもなにも俺の家族が住んでるところじゃん」

タクミ「じゃあ、神崎ユキって知ってるか？」

コウタ「そういえばノゾミの友達にいた気がするなあ」

タクミ「そうか　ありがとう」

コウタ「じゃあな、タクミ」

タクミ「ああ、明日は頑張ろうぜ」

アリサ「明日は足を引っ張らないでくださいよ」

タクミ「そうになったら、ごめんな」

アリサ「だから、そうならないように気をつけてくださいって言うてるんです!」

タクミ「そういうキミは大丈夫なの?」

アリサ「実戦こそ少ないですけど演習の評価じゃ誰にも負けません」

タクミ(プライドが高いな)

タクミ「ところでヴァジュラの戦闘データはどうだった?」

アリサ「え?ヴァジュラの戦闘データですか?」

タクミ「そうそう、ヴァジュラの戦闘データだよ」

アリサ「ら、楽勝でしたよあんなもの!」

タクミ「楽勝か　俺なんかギリギリ勝てたくらいだからなあ」

作者「あのヴァジュラは特別です」（強さ的にチート）

アリサ（ヴァジュラの戦闘データってなんなの？）

タクミ「明日はよろしくお願いします」

アリサはヴァジュラの戦闘データに疑問を抱きつつも自室へ戻る

タクミ「ノヴァの終末捕食か」

タクミ「くだらねえ」

俺はそう吐き捨てて自室へ戻った

第十三話「中学の中間テストってなんか点取りづらいんだ」(後書き)

今回のテーマ

『今回の訓練』

作者「今回は訓練だからオリジナルでいこう！」

タクミ「オリジナルに慣れやがった、こいつ」

コウタ「今回のゲストをさっさと呼ぼうぜ」

作者「今回のゲストがシタチt(ry)」

タクミ「アリサ・イリーニチナ・アミエーラさんです」

アリサ「どうも、アリサ・イリーニチナ・アミエーラです」

作者「今回は原作をクリアした神崎タクミMk-?だったな」

タクミ「確かにな」

コウタ「実はな」

作者「なるほど〜そういうわけか」

アリサ「本編への扉で入れ替わったんですね、わかります」

タクミ「アリサってこういう真面目な台詞が似合うよね」

アリサ「そ、そんなことありませんよ」

コウタ「後半のアリサなのか？」

作者「だってデレ期の方が長いから把握しやすいんだよ」

タクミ「作者って学校で朝読書の時にノッキンオブヘブンスドアを

よく読んでるよな」

作者「今は種の運命を読んでるよ」

アリサ「ドン引きです」

コウタ「PS装甲とATフィールドって(ry)」

タクミ「エヴァのほうが早いぜ」

アリサ「バッテリーで動くガンダムってガンダムじゃない　ドン引きです　」

作者「どんな作品だろうと、どんなガンダムだろうと、ガンダムは人それぞれだろ!？」

General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

作者「このアルファベットの頭文字でGUNDAMになるんだよね」

タクミ「AGEは認めたくないんだが」

コウタ「一話で決めんな、絵師が変わるかもしれないだろ？」

アリサ「それ、ありえませんか」

作者「もう次回予告にしようよ」

アリサ「これを全部言うんですか？」

タクミ「だめだ!いやいやだめだめ」

コウタ「大幅カットするんですね、わかります」

作者「似合わないね、コウタ君」

タクミ「次回予告まいるーす」

タクミ「俺に迫る訓練の危機」

コウタ「激戦、熱戦、大激突!」

アリサ「これが　アラガミかつ」

作者「ゴッドイーターバースト(ミッション)のほっね(より厳しい戦い!!)」

タクミ「最後に一言だな」

コウタ「ユキって原作のほうでも一回名前がたよね？」

タクミ「ユキは可愛いぜ！」

アリサ「このシスコンどもめ！」

作者「全員シスコンだったけどな」

作者「詳しくはお近くの書店かアマゾンなどのインターネットショッピングなどでアリサインアンダーワールドをお買い上げ下さい」

タクミ「なんで宣伝しちゃうかな」

アリサ「オレーシャ」

コウタ「ウィキペディアで十分じゃね？」

作者「しかし、小説のほうが伝わりやすいと」

タクミ「とにかく、次回の更新は今週中を目指します！」

コウタ「なぜ、タクミが作者の代わりを？」

作者「いろいろ編集を昨日したので今日投稿になりました」

作者「だが私は（ry」

タクミ「こんなときこそ謝れ！」

アリサ「文字に性格はですよ」

コウタ「とにかく次回なんでしょ？じゃーねー」

タクミ「バカッ！さようならだろうが！！」

作者「明日は最初らへんを編集しようと思います」

作者「なにか誤字があったら教えてください、お願いします」

あと、表現が下手なところがあったら教えてくれると嬉しいです

第十四話「訓練ってこんなに厳しいんだね、知らなかったよ」(前書き)

コウタ「もう、帰るう」

作者「いきなりどうした!？」

タクミ「あれが、訓練なのか」

作者「なるほど、腕立て千回とか言われたんだろ」

コウタ「母ちゃん、ノゾミ、兄ちゃんはもうダメだ」

作者「この軟弱者は放っておいて、お便りコーナーです」(ゴッドイーター的に)

タクミ「Y・Kさんからのお便りが一通届いております」

「私は、無理矢理生存フラグを立てられた被害者Yの母親です」

「私はすでに死んでいますですがせめてこの子は助けてほしかったのですがこの助け方はないと思いました」

作者「ちよつとしたクレームだったね」

タクミ「適当な生存フラグの建て方で兄もちよつと怒ってるぞ」

コウタ「俺は生きてるだけで十分だと思っぞ」

作者「きました!余裕者の一言!」

タクミ「いっぺん死んでみつか!」

コウタ「文字にすると変な言葉を使うな!」

タクミ「逝っけえ!」

作者「コウタさんがログアウトしました」

タクミ「二通目いこうぜ」

「えーつと、はじめまして」

タクミ「ここはこんにちはだな」

「このコーナーっていろいろやってるんだよね」

作者「そうだね、なんでもやってるよ」

「お兄ちゃんが無事かどうか知りたいです」

タクミ「俺は無事だ！心配すんな！！」

作者「おい、プライバシーの侵害ってやつだぞ！」

「私は無事だからお兄ちゃんも心配しないでね」

作者「なんて兄思いの妹なんだ」

タクミ「でも心配になるのは仕方ないんだよ！」

作者「でも、安否の確認と呼びかけもするなんて」

タクミ「十歳だからな、いいんだよ」

作者「年齢は五歳も離れてるんだね」

タクミ「本編いくか！」

作者「な、なんだよいきなり」

タクミ「強いお兄ちゃんの姿を見せ付けてやんだよ！」

作者「多分、見てないと思うぞ」

タクミ「このオープニングがフィクションなんですか？」

作者「すいませんね、フィクションで」

タクミ「この怒りを訓練にっ」

作者「さっさと行け！」

そういつて本編への扉へタクミを蹴って通した

タクミ「本当にミラーワールドにぶちこんでやる！」

作者「やれるもんならやってみな！神崎君」

タクミ「くそがっ！神崎つながりのネタかよ！！」

タクミ「神崎とは違うんだよ神崎とはあつ！」

作者「神崎じゃんか」

第十四話「訓練ってこんなに厳しいんだね、知らなかったよ」

自室

すっかり乾いた茶色の新聞を開いてコーヒーを飲む

タクミ「今回は美味しいなあ、コーヒー」

砂糖だけでなくミルクもいれることで味に変化ができた

タクミ「物騒な世の中ですなあ」

デモ行進とかがあったらしい

タクミ「ゴッドイーターも出動したのか　すごいなあ」

そう言ってコーヒーカップを口へ運ぶ
そのときだった、通信が入ったのは

見事にコーヒーをこぼして新聞を、
破った

タクミ「もうやだあ」

ヒバリ「タクミさん？どうしたんですか？」

俺は気持ちを切り替えて話す

タクミ「大丈夫だよ、気にしないでよ」

ヒバリ「そうですか？」

タクミ「大丈夫だって言ってるだろ」

ヒバリ「あ、はい、すみません」

タクミ「なんで謝るんだよ」

ヒバリ「は、はい、すみませ　　いいえ、用件を伝えますね」

俺は通信越しに苦笑する

ヒバリ「本日の訓練の用意が完了しましたので至急集合するように、
とのことですよ」

俺はきつちりした口調で話されるとちよつと困るタイプなんだよね

タクミ「あ、はい、わかりました」

ヒバリ「それでは、頑張ってください」

俺は不意打ちの応援に困ったように答える

タクミ「うーん、まあ頑張れるだけ頑張るよ」

そういうことで通信は切れた

タクミ「コウタを呼んで行くか」

訓練場の手前のなんかよくわからない準備室かなんか

アリサはすでに神機を持っている

コウタ「なんで俺呼ばれないの！」

タクミ「まあまあ、落ち着いてよ」

アリサ「新型じゃないからじゃありませんか？」

挑発的な一言を言い放つ、もちろんコウタは

コウタ「なんだよ！いい気になりやがって！見返してやる！！！」

俺はもちろん二人をなだめる

タクミ「アリサも挑発しないでくれよ、コウタは気が立ってんだから」

アリサ「ですが私は謝りませんから」

タクミ（亜種が来たな）

タクミ「コウタ、落ち着いてくれ、頼む」

コウタ「タクミも新型だから余裕なんだろう！」

タクミ「余裕なもんか！」

こう言ったけど余裕がないのかわからない俺

そこで教官殿の登場です

ツバキ「いきなり喧嘩か？」

コウタ「つつ、ツバキさん！」

タクミ「喧嘩じゃありませんよ」

ツバキ「余計なことはいいい、火種はこいつコウタだろう？」

コウタ「だってアリサが」

ツバキ「他の者に責任転嫁する根性などたたきなおしてやるう」

コウタ「やゝめゝてゝ」

そう言って立ち入り禁止と張り紙が張られた部屋に引つ張られていた

タクミ「で？キミは行かなくていいの？」

アリサ「私ですか？」

タクミ「ああ、新型だからって調子に乗ってるとすぐに成績は右肩下がりだよ」

俺は忠告というか挑発というかなという一言を話す

アリサ「大きなお世話です!!」

タクミ「弱い新型で、すいませんね」

アリサは「そうですねよ」「っていうような顔でこっちを見ている

それから険悪ムードのまま雑談を開始する

作者「これから人の表記がない雑談タイムがコウタが戻るまで続きます」

作者「腕立て千回の説教付きですからね」

「ねえ、アリサって日本語うまいね」

「え？あ、はい」

「誰に教わったの？」

「オオグルマ先生が教えてくれたんです」

「オオグルマ先生が、すごい人なんだね」

「そういうあなたこそ誰にロシア語を習ったんですか？」

「ああ、そこを聞かれるか」

「私、なにか悪いこと聞きましたか？」

「いや、別に悪くないんだけどあいつのことを説明するのは」

「あいつ?」

「近所に住んでたやつでよく勉強教えてもらってただけどころあつてね」

「どっかの支部の役員になったらいいんだけどどこに行ったかわからないんだよね」

「それで世界各国の言語を話せるようにしてたんですね」

「まあ、そうなところだね」

そのとき、コウタとツバキのいる部屋から鈍い音が

「アリサ、場所を変えよう」

「そうですね、そうしましょう」

「ところで、ロシアってどんなところなの?」

「昔は寒かったらしいんですけど現在は」

「最近の異常気象だね」

「そうですね」

「ロシア支部はどうだったの?」

「このことあまり変わりませんよ」

「へー、そうなんだ」

「ってことは全部の支部はここと変わらないってことかな」

「新型は異動が多いですからね」

「そう」ry

コウタ「うっ、ぐはぁっ」

タクミ「おいつ、大丈夫かよ!？」

コウタの腕は見るにたえないほど赤くなっている

ツバキ「腕立て千回程度でこうなったんでな、説教は終らせた」

タクミ「せ、千回!？」

コウタ「帰りたい」

ツバキはその声を聞き逃さなかった

ツバキ「そんなことを言うのか、いいだろう、お前専用の訓練を明日にでも用意してやるっ」

タクミ「ご愁傷様です」

コウタ「見捨てんのかよ!助けてくれよ」

タクミ「離せ!アリサに頼めよ!」

アリサ「私は絶対に参加しませんから！」

コウタ「タクミ！こうなるのがわかんなかったのかよ！」

タクミ「もういい、ツバキさん、お願いします」

ツバキ「これより、訓練を開始するのだが」

タクミ「するのだが？」

ツバキ「内容を伝えてしまふといろいろ面倒なのでな」

タクミ「そんな訓練、あるんですか！？」

ツバキ「つべこべ言うな！！！」

タクミ「わかりました、皆、行くぞ」

アリサ「なんであなたが仕切ってるんですか！？」

コウタ「そうだそうだー！」

タクミ「じゃあ、アリサが仕切ってくれるのかな？」

アリサ「わかりました！行きますよー！」

コウタ（なあ、タクミ）

タクミ（アリサに主導権を譲ったことだろ？）

コウタ（もちろん、なんでなんだ？）

タクミ（仕切るのは面倒くさいからだぜ）

コウタ（俺にやらせなかったのは褒めてやるぜ）

タクミ（じゃあ、明日は参加しなくていいな）

コウタ（そこは参加してくれよ）

タクミ（だが断る）

訓練場

ツバキの声が拡声器で聞こえる

ツバキ<これより戦闘データによる戦闘を開始する>

タクミ「そういうことかよ!?!」

コウタ「どうしたんだ?」

タクミ「世の中には知って良いことと悪いことがあるんだ」

コウタ「それがどうしたんだよ!?!」

タクミ「とにかく高台に上がってな」

コウタ「紅か」

アリサ「紅？」

タクミ「さつさと敵を出しな！」

アラガミキでい

ツバキくわかった、お前用のを特別にだしてやるっ>

アリサ「タクミ用の？」

コウタ「いつたいなんだ？」

タクミ「ミスター・ブシドーの乗機だろ？」

予想通りにスサノオもどきですね、わかります

コウタ「なんだよ、あれ」

ツバキく性能はオリジナルより格段上だが思考は変わらないので頑張れ>

タクミ「やってやります、どこまでも」

アリサ「あんなのに勝てるわけない」

ボルグさんに苦戦する人だから仕方ないね
まあシユウはカモンカモンだけどね

ツバキくそれでは戦闘を開始する>

タクミ「どんと来い！」

スサノオもどきから突き出された、いや俺を喰おうとした右腕を

タクミ「シンプルだねえ、単純すぎるぐらいに」

切り落とす！！

あのとぎとは違うのはデータということだけだった

切り落とされた右腕はデータ処理についていけずに消失した

タクミ「再生できないんじゃ雑魚だな！」

そして神機^{アルテミス}を横に一閃！

流星にここを失うと戦いにならないためデータ処理がおいついている

とはいえ再生のためのダウン状態に陥ることは予測済み！

タクミ「ここだあっ！」

神機^{アルテミス}を胴体に突き刺して

スサノオもどきの胴体を蹴って飛び上がる

そこから神機^{アルテミス}を銃形態に素早く空中で変形させて

タクミ「狙い撃つ！」

蒼眼^{あおきりこみ}の力で一発も外さずにスサノオもどきに弾丸をぶち込んだ

タクミ「どうだ、俺の攻撃はっ！」

スサノオもどきの脆くなった胴体は射撃に耐えられずに結合崩壊を起す

一方、外野の皆さんは

一瞬のことだったので話題すら起こらない

タクミ「まだ動くのか！？こいつっ！！！」

タクミ「さっさと消えやがれ！！！」

振り下ろされた剣はスサノオもどきの存在を断ち切った

タクミ「ドヤ！」

ツバキくさすが新型だ>

コウタ「すごいじゃん！タクミ！！！」

タクミ「どうでしょう！俺の華麗な戦い！！！」

アリサは言葉をなくしているようだね

ツバキ「連戦でもするか？」

タクミ「連戦は勘弁ですよ」

コウタ「さっさとやれよ〜タクミ〜」

タクミ「いえいえ、コウタさん、無理ですよ」

ツバキくそんな口がたたけるなら連戦もいけるな>

タクミ「ちょっと休憩を下さいよお」

ツバキく仕方のないやつだ>

タクミ「やった、やったー」

小一時間後

タクミ「今度はどいつだ？」

ツバキく敵は複数の大型アラガミの設定だ>

<敵は複数なので三人で戦うように>

俺・コウタ「はい！」

タクミ「おい、アリサ、どうした？気分でも悪いのか？」

アリサ「え？いえ、全然」

タクミ「これから何をしますか？」

アリサ「戦闘ですよ、そのくらいわかりますよー！」

タクミ「では、どんな戦闘でしょうか」

アリサ「複数の小型アラガミを私が戦うんですよね」

タクミ「はぁ 一人で戦おうか 【小型アラガミ】と」

皮肉を込めてそう言った

タクミ「やばくなったら助けるからな」

アリサ「雑魚程度にやられませんかよ!」

アリサ（私は負けてない!）

できたのは

作者「出でよ!神の雷」ディアウス・ピター」（もどき）

作者「絶氷の女王」プリティヴィ・マータ」（もどき）

作者「そしてスター的なアラガミ!」ヴァジュラ」（もどき）

コウタ「これなんて無理な訓練?」

タクミ「アリサにとっちゃ雑魚なんでしょう」

作者「錯乱状態にはならないんだと思う そう思う」

アリサ「?」

いろいろな感情が浮き上がる

自分の家族の命を奪ったアラガミの同型のアラガミがいる、それも三匹だ

それらのうちの二匹は今も記憶に深い傷跡を残す忘れもしない咆哮をあげた

タクミ「悪趣味なもんだしてくるなあ」

俺のすんでいたエリアを襲ったのはヴァジュラ型と小型でほとんどだった

タクミ（そういえばあれと同じアラガミは全部いたよな）

記憶を探るとそのアラガミの無惨に散った姿しか浮かばない

タクミ（そういうことしか考えられなくなったのか？）

作者「そういうことじゃないけどね」

コウタ「悪趣味ってなんだよ」

タクミ「え？」

コウタ「ヴァジュラカツコイイーとか言ってたじゃんか」

タクミ「あの変な顔がついたヴァジュラみたいなやつだよ」

コウタ「顔？あ、本当だ、キモっ」

アラガミのデザインは人間に恐怖を与えるためとかなんとからしい

タクミ「でも本物は強いよ」

コウタ「戦ったことあんのかよ!?!」

タクミ「まあ、ちょっとね」

コウタ「へー、あ、始まるみたいだぜ」

タクミ「実況と解説は!」

コウタ「俺、藤木コウタとっ!」

タクミ「俺、神崎タクミでお送りしますっ!」

アリサはこんなアホ二人を放って真剣だ

コウタ「おーっと!ヴァジュにゃんの必殺技発動!」

タクミ「奥義!百獣雷撃拳!」(電撃ぬこパンチとも俺は呼ぶ)

コウタ「あれを喰らうとどうなるんですか?解説の神崎さん!」

タクミ「装甲が弱いと即死、もしくは感電死です!」(難易度3の無印時代より)

コウタ「ゴッドイーターって感電死はないんじゃないですか？」

タクミ「いやいや、怯んでいるうちに踏まれて死ぬことも感電（の途中）死です」

コウタ「それって感電死？」

アリサ「不吉なことを言わないで下さい！」

タクミ「あ、アリサ、上」

コウタ「本当だ、うえうえ！」

アリサ「え？き、きやあああー！」

タクミ「ちっ、実況は頼んだ！」

そう言いながらアルテミス神機を銃形態に変える

コウタ「援護も任せろって！」

俺は上から迫るさながらインブレンスエンドの氷塊を蹴りで砕く！！

そしてその散った氷の塊の大きなものを撃ちぬく！！

その弾丸はまるで生きているように気を抜いていたマータさんの顔を

タクミ「撃ち貫いてあげましょつか、女王様っ！」

マータさんの壊しにくい顔を結合崩壊させた上にその弾丸を貫通さ

せてズタズタにした

タクミ「帝王様もどうです？いっぱいありますよ！」

女王を貫いた弾丸は広がって、二つに分かれて、ピターさんを包んで

タクミ「爆ぜろ！アラガミの癖にっ！」（作者の感情）

ピターさんは前足や顔やマントなどの固い部位が吹き飛んだ

コウタ「ヴァジュにゃんは任せろ！！！」

コウタの激しい射撃でヴァジュラは足止めされている

作者「いまさらながらもどきの表記は省略させていただきます」

アリサはこんなふうに繰り返される激戦に翻弄されている

タクミ「ぼーっとすんな！」

アリサを狙った氷の弾丸は俺がガードすることによって意味が無く
なった

タクミ「大丈夫か？」

アリサ「あ、はい、大丈夫です」

そのときピターさんの電撃が飛んでくる

これは間にあわないのでアリサをお姫様だっことやらの書いてるだ

けでイライラする響きの単語で助ける

タクミ「大丈夫じゃないじゃないか」

アリサ「すみません　あの　降ろしてくれませんか？」

タクミ「あ、ああ、ごめんごめん」

そういつてアリサを降ろす

コウタ「タクミー、こっち手伝ってくれよー」

タクミ「じゃあ、ヴァジュラから沈めてくるよ」

アリサ「あの　その　ありがとうございます」

俺はカノンがいるので頭を照れ隠しに掻いてコウタの加勢に向かう

第十四話「訓練ってこんなに厳しいんだね、知らなかったよ」(後書き)

今回のテーマは、特になし！

作者「今回はフリートークです！」

タクミ「テーマの進言、いい？」

作者「なんだね、神崎君」

タクミ「なんで一週間以上も更新がなかったの？」

タクミ「それに、なんで中途半端な終わり方なの？」

作者「それは、藤木君！説明を！」

コウタ「作者の多忙なスケジュールのせいで更新が出来なかったんです」

作者「多忙なスケジュールっていうのは宿題と体調不良だね」

タクミ「今も壊れかけじゃねーか」

作者「神と戦う上に病気は付き物なんだよ」

T A K E 2

作者「俺の風邪は不治の病なんだ」

T A K E 3

作者「俺の風邪は風邪じゃない、風邪に見せかけた死の感染症なんだ

T A K E 4

作者「うっ、これは何かのウイルスかつ！？」

T A K E 5

タクミ「もういいよ!!!」

作者「おやおや、私は病人なんですよ、そんなに邪険に扱われたら
ry」

コウタ「元気じゃん」

作者「いつか没ネタ全部うpしてやる！」

タクミ「それだけはっ！」

コウタ「だいたい18禁なことをやってのけてたね」

作者「コウタの言う通りだぜ！」

タクミ「お前の考えたことだろうがっ！」

作者「次回予告」

タクミ「スルーすんな！」

コウタ「なにこれ？光の五封剣？」

タクミ「くっ、ふざけんな！」

次回予告

作者「グリーンサラブレッド？無印時代の初関門じゃん」

コウタ「作者は友達とやってたから一人でいざやったときの初関門
だったね」

タクミ「俺の時には雑魚2匹戯れてどうした？って感じだったけど
ね」

作者「体験版で頑張ってミッション全部クリアした俺が通ります」

作者「無印体験版より無印のウロヴォロス墮天のほうがトラウマだ
けどね」

タクミ「でもさあ、ゴッドイーターバースト（ミッション）ってソ
ロでクリアするのがギリギリだったぜ」

作者「あのミッションでSSS+とれた人っていんのかね？」

コウタ「作者はS+とれたよね？あれでもそうとう頑張ったよね」

タクミ「体力増強剤とかOパイアルとかスタミナ増強剤とかフルで
もって行ってその結果だからなあ」

作者「手に入れるものより出て行った物のほうが大きい」

コウタ「論点をずらす魔法を覚えやがった」

タクミ「シユウ二匹、ぶらり旅」

コウタ「絶対違うな！」

作者「タイトルは決まり次第報告します！」

作者・タクミ・コウタ「それではよい日曜日を！」

作者「英語来ました!」

コウタ「なんて読むの?」

タクミ「グリーン・サラブレッドだよ」

作者「この話を英語にしたからには残りのお話も」

コウタ「無理無理」

榊「この私が珍しく断言する、不可能です」

作者「なんでなんだよ!」

タクミ「だって毎回読み方の説明と誤字が心配じゃねーか」

作者「なんだと!俺様をなめるな!」

コウタ「いつから俺様キヤラになっただよ」

榊「それは僕が説明しよう」

タクミ「榊博士!?いつからゲストにつ!?!」

コウタ「今日のゲストはこの世にいないはずだぜ」

作者「その台本ははずれなんだよ、はずれ」

タクミ「使わないで!」

華麗なる神機使い「それで?この三文芝居はいつまで続くのかな?」

コウタ「わからないお友達は頭上に注意」

エッ「う、うわああああー!」

タクミ「なんでこうなっただよ?」

作者「タクミ!新しい台本よ!」

タクミ「知識百倍! キミにももう飽きたし、死ぬ!」

榊「台本なら僕ももってるよ」コウタ「殺せっていつてんだろ?」

こんちくしょうがー!」

作者「お望み通りに、コウタさん」

コウタ「なっ、殺されるのは作者のはずだ!」

コウタ「なにやってる!早くそいつらを殺せ!」

榊「仰せの通りにー! といえいいのかい?」

作者「もういいよ」

神崎タクミ 心臓麻痺で即死

作者「僕の勝ちだ！」

タクミ「その名前ははずれなんだよ、は・ず・れ」

コウタ「はやめてー！」

榊「本編へ行っってはどうかだね？」

タクミ「賛成です、博士」

コウタ「左に同じく」

作者「作者的に同意する」

榊「おつかれ、皆」

タクミ「おつかれしたー」

コウタ「なあなあ、この台本と違う台詞ばかり喋ってたな」

作者「そんなのいいから帰ろうぜ」

アリサ「私の出番は

？」

第十五話「Green・thoroughbred」

訓練場

タクミ「終わったー！」

コウタ「楽勝、楽勝」

俺達は勝った、序盤で。

作者「コウタやアリサがいるから性能的に低めに設定していますスペック」

タクミ「なんか手ごたえがなかったな」

コウタ「たしかに見た目より弱かったね」

タクミ「さ、戻ろう」

コウタ「うん、そうだね」

タクミ「ちょっと待ってくれ」

コウタ「ん？なんだ？」

タクミ「アリサだよ、連れていかなきゃ」

そう言ってアリサに歩みよりその体を背負う

タクミ「アリスの事忘れてたのかよ、ひどいやつだな」

コウタ「俺だって倒れそうだったんだよ」

タクミ「俺だって助けられなかったから同じもんか、ゴメン、コウタ」

コウタ「別にいいよ、戻ろうよ」

訓練場の手前の準備室？ブリーフィングルームでいいや

ツバキ「　　なんだ、このザマは？」

俺・コウタ「す、すいません！」

ツバキ「冗談だ、よくやった」

タクミ「は、はあ」

ツバキ「しかし、なぜアリスにリンクエイドをしなかったんだ？」

コウタ「リンクエイドってなんですか？」

ツバキ「お前には教えたくもりだが？」

タクミ「え？　いったい、いつですか？」

コウタ「教えられたっけ？」

ツバキ「さつき、腕立ての時に基礎知識は全て叩きこんだはずだが？」

タクミ（俺ってなんの知識も無い）

作者「俺は解説書を読まないタイプ（嘘）」

作者「覚えられないタイプなんだよ！体験版のときに何回それで苦労したことやら」

ツバキ「明日は基礎知識の教育もしてやるっ」

コウタ「ツバキさん、勉強はやめてくださいよ」

ツバキは不敵に笑っている

作者「踏み躪って近寄って ボタンだろ？今は覚えてるんだぜ」
一年八ヶ月近くゴツドイーターとして働いているので知っていて当然か

ツバキ「まあいい、今日は解散だ」

タクミ「やったー！」

コウタは明日のことを考えていて気持ちが沈んでいるようだ

そこで俺は励ましの一言をかける

タクミ「お前は新型アサに勝ってるんだぜ」

コウタ「タクミ ああ、そうだな！」

ツバキ「基礎知識の授業にはお前もタクミこい」

タクミ「え？」

ツバキ「わかったな？」

タクミ「は、はい」

新人区面

コウタ「疲れた〜」

タクミ「左に同じく」

コウタ「なあ、タクミ」

タクミ「なに？」

コウタ「じゃんけんで負けたほうがジュースをおごるってのどじょう」

タクミ「いいだろう、受けてやるっ」

タクミ「最初は ジャンケンポン！」

コウタ「なっ、ゲーはどうした!？」

俺は勝った。パーで。

コウタ「力りきんじまった」

もちろんコウタはゲーである

コウタ「きつたねえぞ!三本おごれ!！」

俺はおごりたくないの一言

タクミ「こごしなきや、守モれないものもある」

コウタは絶句した

結局、彼はおごった

コウタ「せつかくおごったのにそんなの買つのかよ」

俺の手には例冷やしカレードリンクの物が握にぎられていた

タクミ「少しでも慣れなきやなんないんだよ」

「でも、おごりごりのときだけな」

コウタ「それ、うまい?」

タクミ「飲めなくない、出来れば飲みたくない」

コウタ「俺はオレンジジュースぐらいのマイナーなジュースでいいや」

タクミ「これ、飲む？」

コウタ「 うん」(これはフリか)

コウタは例の物を冷やしカレードリンク一気に飲む！

タクミ「おつ、おい！全部飲む」ry」

コウタは本来、缶を捨てるゴミ箱に駆け寄る

そして盛大につ

作者「これ以上は、もう、無理だ」

俺はコウタの背中をさする

しかし、コウタは大ダメージを受けている

タクミ「落ち着いたか？」

コウタ「もう 胃の中になんも残ってねえよ」

タクミ「今日はもう休めよ、明日があるからな」

コウタ「あ、ああ、そうするよ」

タクミ「お大事に〜」

コウタは壁によりかかりながら部屋に戻っていった

タクミ「破壊力がすごいな」

俺は床に落ちた缶を拾って捨てた

タクミ「部屋に戻って任務を待つかな、っと」

そういうわけで部屋に戻る

しかし、運命は急展開する？

いきなりドアが開いて、

俺に誰かがぶつかった

タクミ「痛っ、だれだ？」

俺はコウタの部屋のドアに倒れてダメージを受ける

新人区画、左側のドア、もう推理材料は十分だね

アリサ「す、すいませ」

アリサは俺の上に倒れこむ形だったのでダメージは全然

アリサが赤面のまま、平手打ちを

タクミ「っ!？」

作者「解説しましょう!」

「これは、俺の陰謀　じゃなくて、じっ、事故です」

作者「こんな言葉を聞いたことあるかい？」

『ラッキースケベ』

俺の手は大きくて柔らかい15歳のものとは思えないものを驚?みにしていた

タクミ「す、すいません!ごめんなさい!」

アリサ「謝罪はいいですから手をどけてください」

俺は手をどけて心の中で思った

なんでこんなにでかいんだよ!!

俺はそう思いつつも起き上がりお辞儀をして立ち去ろうとした

そのときアリサがこう告げた

アリサ「任務です」

タクミ「マジかよ!?!さっき訓練あつたばかりだぜ」

アリサは淡々と言葉を返す

アリサ「任務だから仕方ありません」

俺はその一言で黙るしかなかった

アリサは踵を返し部屋に戻っていった

タクミ「準備するしかねえか」

俺も自室に戻る

自室

俺は閃いた、そうだ、武器を作ろう

ターミナルに腕輪を挿入して起動させる

タクミ「メールのチェックは 別に今しなくてもいいか」

そう言って装備の合成の所にアクセスする

タクミ「合成っていつでも生成みたいなものかよ」

なので装備を強化することに決めた

タクミ「やっぱりナイフ改にしておかなきゃな」

そう言って強化を決定する

タクミ「獣剣 陽 素材があるけど金が少し足りない」

タクミ「次は銃だな」

結果

ナイフ ナイフ改 獣剣 陽（素材を売りました）

50型機関砲 50型機関砲改

対属性バツクラー（お買い物）

尚、装甲は「避ければ問題ないな」

作者「超回避バツクラーで死姉妹舞をソロでA+とつた男だぜ」

作者「マリアンヌにオラクルソードと超回避バツクラーと銃身とバレットは自由で任務達成できた方はご報告ください神」

タクミ「そろそろ任務に行かなきゃな」

贖罪の街

リンドウ「お 今日新型二人とお仕事だな」

リンドウ「足を引っ張らないように気をつけるんで よろしく頼むわ」

タクミ「俺こそ、足を引つ張らないように頑張ります！」

アリサ「旧型は、旧型なりの仕事をしていただければいいと思います」

俺は手を顔にあてる、やれやれって感じだね
だけどリンドウはこう返す

リンドウ「はっは

ま、せいぜい期待に沿えるように頑張ってみるさ」

そう言つてアリサに近寄り方に手をのせる

そのときだった、オーバーリアクションは

アリサ「キヤアー!!」

俺は空を見上げた

青い空

広い空

雲もある

雨の日もある

この空の下にはいろいろな人がいる

人を使う人、人に使われる人

人を嫌う人、その人を嫌う周りの人

人を嫌う人を受け入れる人、そんな人に俺はなりたい

リンドウ「あーあ　　ずいぶんと嫌われたもんだな」

アリサ「あ す すいません！
なんでもありません、大丈夫です」

リンドウは怒らなかつた

タクミ（俺ならキレてたな）

リンドウ「フツ 冗談だ

んー そうだなあ、よしアリサ」

リンドウ「混乱しちゃったときはな、空を見るんだ

そんで動物に似た雲を見つけてみる 落ち着くぞ」

タクミ「それいいよね！俺もよくやってるよ」

リンドウ「そうか？まあいい」

リンドウは俺をスルーする

多分、話の途中で話たのがスルーポイントだろう

そんな洞察力をひそかに披露しながら話を聞く

リンドウ「それまでここを動くな これは命令だ

そのあとでこっちに合流してくれ いいな」

アリサ「な、何で 私がそんなこと 」

タクミ（新型なのに洞察力がないなあ、ニュータイプじゃないのか
？）

カテゴリーFだと決め付けた

リンドウ「いいから探せ な？」

タクミ「あつた！」

アリサ・リンドウ「？」

タクミ「ブラリナトガリネズミだよ、もしかして知らないの？」

リンドウ「知ってるお前に驚きだぜ」

タクミ「アラスカ地方に生息する毒をもった数少ない哺乳類なんだぜ」

アリサ「どれですか？」（それがわかれば現場に）

タクミ「教えたらそれで現場に急行するつもりだろ？」

アリサ「はい、あ いいえ！違います！！」

アリサが焦っているのでリンドウがこう言う

リンドウ「よし、先に行くぞ」

タクミ「了解！」

そういうことで俺達は下に飛び降りた

漆黒「上を向いてごらん、黒」

普通に話しかけてきた漆黒に驚き上を見ると

タクミ「すっげえ！リンドウさん！リンドウさん！！」

リンドウ「なんだあ？ おお　すごいな　」

俺達の眼中にあるものは雲を見ていてこちらに気付かないアリサの

タクミ「あれに触ったことあるんですよ、リンドウさん」

リンドウ「マジか！？で、どうだった？」

タクミ「ぶつかった拍子でしたが驚？みでした」

リンドウ「おおお！！」

タクミ「柔らかい、けど弾力もある、きつとだれかに揉まれていますよ」

リンドウ「なんでそんなことまでわかるんだ？」

作者「オレーシャですね、わかります

主人公補正ですね、わかります」

タクミ「新型の力ですよ」

リンドウ「新型ってそんなにすごいのか　恐れ入ります」

タクミ「冗談ですよ、冗談」

リンドウ「ははは 騙されちまった」

リンドウ「ところで、だが」

俺はシリアスを感じとり、歩きだした

リンドウ「あいつのことだがな^{アリス}」

どうもいろいろワケアリらしい」

リンドウ「と言ってもお前の方がひどい目にあってるんだがな」

俺はアラガミの襲撃　そして、死んでいく人々の姿を思い出した
恐怖に顔を歪める人、そして果敢にアラガミに挑む人が頭から食わ
れていく凄惨な記憶

建物の崩壊によって火災の発生して炎にのまれる人々もいた
そのときの人の焼けるにおいは忘れられそうにない

ゴッドイーターも出撃したのだが

あまりのアラガミの多さと逃げ惑う人々の波によって思うように戦
えなていなかった

なぜ、あんなにアラガミが襲ってきたのか

作者「いつかご説明いたします」

終いにはゴッドイーターも逃げ出した

退散とかいうやつだろうがそのころは理解できなかつた

あとは記憶から消えている、多分気絶でもしたのだろう

リンドウ「同じ新型のよしみだ

あの子の力になってやれ いいな？」
それから俺の肩に手を置く

タクミ「キヤア!!」

バックステップをする

リンドウ「あ お前もか？」

タクミ「ジョークですよ、ジョーク」

リンドウは苦笑いを浮かべ再び肩に手を置く

タクミ「わかりました、けど、またおごってくださいよ」

リンドウは困ったように

リンドウ「ははは 冗談はよしてくれ」

タクミ「じゃあ」

目を閉じる

タクミ「行くか!!」

その目は赤くなり、あの性格に入れ替わる

リンドウ「うっし じゃあ行くか!!」

結局、俺達がアリサに合流した^{迎えに行った}

タクミ「師匠！行きますよー！！」

リンドウ「師匠？なんだそれ？」

タクミ「シユウの愛称だ、行くぞ」

アリサ「早く行きましょう、時間の無駄です」

タクミ「犬とか猫とか熊とかそこらへんに雲あるじゃん」
俺は指で示す

アリサは言葉をなくした

広場

リンドウ「アリサ！止まれ！」

アリサ「え？」

シユウAはアリサに気付いたらしい

タクミ「ちっ、こっちにこい！」

俺は聖堂の角から飛び出して牽制をかける

弾丸はシユウAにあたり 俺に目標を変える

タクミ「アリサっ！後方支援をつー！！」

アリサ「あなたに指示されなくともしますよ！」

リンドウも指示より早く行動にでる

タクミ「行くぞ！リンドウ！」

リンドウ「わかりました、っと」

タクミ「ぐはっ！？」

俺は後方からの射撃に倒れた

最初はシユウの2匹目かと疑った しかし

アリサ「射撃の邪魔です！」

タクミ「なっ、わかりましたよ！」

その射撃はリンドウも狙う

リンドウ「うわっ！！！」

リンドウはジャンプからの回転斬りを誤射によって撃墜された

タクミ「アリサ、すごいなあ」

皮肉を込めて言い放つ

思わぬ攻撃に撃墜されたリンドウは身動きがとれなかった

そこにシユウが襲い掛かる

俺はリンドウを守るために装甲を展開した

しかし、シユウは一体だけかな？

上空からの爆撃により俺をリンドウは吹き飛ばされる

作者「ゲームでは低空飛行しかできなかった師匠だがこの小説では飛べるのだよ」

作者「ゲームとは違うのだよ、ゲームとは」

リンドウは吹き飛ばされたことにより体勢を立て直して着地する

俺は近くにいたシユウの体に神機アルテミスを突き刺して目を閉じた

そして黄金の力で突き刺したシユウの体に威力の増した銃撃を喰らわせる

硬い体の表面は結合崩壊を起こした

リンドウは降りてきたシユウにさつきできなかった空中回転斬りを喰らわせる

着地して、そこからチェーンソーのような刀身をシユウの翼に斬りつける

片翼の師匠になってしまつてうづくまるシユウを捕食する

ちなみにアリサはあくまで後方支援

見学じゃないんだからね！

一方、俺は倒れたシユウのコアを抽出して安らかな終焉を迎えさせた

作者「長かった 予想以上の長さだ」

コウタ「作り始めて三日だろ？」

タクミ「編集で三日だもんな」

作者「今回のテーマに行くか？」

タクミ「質問いい？」

作者「なんだい？」

タクミ「今回の俺、変態じゃないか？」

コウタ「ざっくり」

作者「お前にちよっとしたプレゼントだよ」

コウタ「俺にくれよ！」

タクミ「俺、小説の中で妻子を持つかも知れない身なんだぞ！」

コウタ「嫁は決まってるけど、小説の中で子供を」

タクミ「へ、変なこと考えんじゃヌエー」

作者「変なことはカットするから心配すんな」

コウタ（没ネタのほうで、お願いしますよ、社長）

作者「任せたまえ、コウタ君」

タクミ「なにを任せたんだ!？」

コウタ「別に変なことじゃないぜ」

タクミ「え？」

作者「榊博士が言ってたぜ、アラガミは『生殖行為』をしないって」

タクミ「そこをデフォルトしないでよ!!!」

コウタ「えーっと、このやり取りに気分を害した場合はご報告くだ

さい」

作者「今回のテーマは、じゃなくて」

タクミ「今回のゲストは台b(ry」

タクミ「カノン!？」（あかん また殺される）

コウタ「隠れろっ!タクミっ!!!」

コウタ「作者もタクミもカノンもっ！どうしてこうなったんだよ！
！」

作者「俺が罰を受けるよ」

「俺の罪だからな」

「次回予告だけさせてくれ」

タクミ「次回、特大巨編！」

コウタ「ヴァジユにゃんが登場！」

作者「前半と後半があるよ！」

タクミ「次回、moon of the firmament

蒼穹の月」

その後、作者はカノンに半殺しの目に遭わされたらしい

それは突然のことだった。

俺は仲間と共に“ヴァジユラ”を討伐する任務のはずだった崩れ落ちた聖堂の天井。そして閉じ込められた隊長。

報告にないアラガミ、しかし、一度ならず二度戦ったことのあるアラガミ“プリティヴィ・マータ”

そして訓練の際に聞いた咆哮。いや、現場では恐怖を引き立てるには十分な咆哮だ

しかし、その咆哮は聖堂の内部より聞こえてくる

敵は数こそ多かったが俺の敵になるはずはなかった

しかし、連携のとれたアラガミほど恐ろしいものはない

それに錯乱状態になっている仲間を守り、そして生き延びなければいけない命令もあるのだ。

なにより、場所も悪かった

俺と一人の同僚は決して仲がよいわけではないがそのときは協力してきりぬけた

なぜ、こうなったのか　それは前日までさかのぼる

榊博士の研究室

いつものなんの変わりのない榊博士のなぜなになんとかだ

いや、変わったことがある、それはコウタが普通に寝ていることだ

だが、二度しか講義を受けていないのにいつもと語るには経験が浅い

榊「アラガミ

オラクル細胞は発見された時、まだアミーバ

状のものだった」

榊「それからミミズ状のアラガミが発見され、半年後には獣型のアラガミが発見された」

タクミ「異常なほどの増殖ですね」

榊「ああ、今の我々からすると、発見したときになにかの手を打っておけばよかったのかもしれないね」

榊「そして1年経つころには、1つの大陸がアラガミに滅ぼされたんだ」

タクミ「すごいな」

榊「彼らが食べたものの形質を取り込み、進化するとしても異常なスピードだと思わないかね」

榊「そう、正確には彼らは進化などしていないんだ」

榊「事実、オラクル細胞の遺伝子配列は変化していない
そう 1つとしてね」

アリサ「そんなはずありませんよ！
現に奴らは形態変化をしてるじゃないですか？」

榊「彼ら アラガミもね、今のキミと同じなんだよ」

榊「食べたものを取り込むというのは」

知識を得るといふこと」

榊「そう、ただ知識を得て賢くなっているだけなんだ」

榊「どついう骨格をしていれば 早く動くことができるのか」

榊「空を飛ぶためにはどうすればいいのか」

俺はそのとき思った（理不尽やなあ）

作者「皆さんもサイゴートやサリエルの飛び方に疑問をもってませんか？」

作者「俺は不思議です」

作者「いや、40年も技術が進んでる、だから心配すんな」

榊「それこそ スポンジが水を吸い込むように

情報を取り込んで」

榊「わずか二十年の間に

彼らは非常に高度な形態を得るまでに至ったんだ」

榊「アラガミがコウタ君ぐらい勉強嫌いだったら

よかつたんだがね」

榊「そう 彼らの勉強熱心さには舌を巻かされるばかりでね」

榊「なんとミサイルを発射するアラガミまで発見された噂まである」

榊「これが確かなら

彼らは人が作った道具さえも取り込んだといふことになる」

榊「実に興味深いと思わない？」

タクミ「超興味深いんですけど」

榊「そうだろうか？」

榊「それほどまでに複雑な情報が取り込めるのなら」

タクミ「取り込めるのなら？」

榊「まるで人間というアラガミが現れるのも
遠い日じゃないかもしれないね」

アリサ「人間という、アラガミ？」

タクミ「質問いいですか？」

榊「なんだい？」

タクミ「モビルスーツはなぜとりこまれなかったんですか？」

榊「なにか勘違いしているようだね」

タクミ「ジヨークですよ」

榊「それじゃあ、これで講義を終了しよう」

俺はコウタを起こしに近寄る

タクミ「おーい、コウター、講義が終わるぞー」

コウタ「ん？母さん？友達？わかったよ」

タクミ「あのなあ」

あきれながらも一言を言う

タクミ「コウタ、遊ぼつぜ！早く起きろよ！」

コウタ「わかったからまってくれ」

タクミ「どうします？」

榊「すまないが部屋に連れて行ってくれないかな」

タクミ「わかりました」

俺はコウタを背負って部屋を出た

部屋を出たときにアリサが話しかけてきた

アリサ「大変ですね」

タクミ「なにが？大変なことでもあった？」

アリサ「この人コウタですよ、自覚もないうえに講義を受けようとする
い姿勢にはあきれます」

タクミ「んー、まあ、勉強嫌いなのは仕方ないし、友達だからな」

アリサ「友達　ですか」

エレベーターが来たようだ

タクミ「それにしても今日はガチで寝てるなあ」

アリサ「え？」

タクミ「コウタは訓練と基礎教育のあとに講義だから仕方ないか」

アリサはなにも言えなくなった

タクミ「コウタは結構がんばってるからさ、あんまり悪口とか言わないでやってくれ」

アリサ「わ、わかりました　」

プライドが高いので難しいとは思ってたが一応言っておく

タクミ「じゃあな、また今度」

アリサ「さようなら」

まさか次に会うときにあんなことになるとは想像もつかなかった

コウタを部屋のベッドに寝かせて俺は自室に戻った

自室

タクミ「えーっと、リンクエイドは戦闘不能の相手の体に触れて力をわけること」

タクミ「体力の半分くらいを分け与えるため、周囲に気をつけておこなわなければ危険である」

基礎になることは授業で全部習ったけど今度テストをするらしいのでメールで送られたことを覚えている途中です

タクミ「眠いと覚えられないな、寝るか」

ということでも眠りについた

翌日

俺は目を覚ました

夢を見た、しかし、いい夢ではなかった

人が死ぬ、そんな夢だった

俺は呟いた、「正夢にならなきゃいいけど」、と

しかし、それは現実となって現れる

俺は寝るときは下着だけのタイプなので服を着る

有名なF制式だ
フロック

最初はF制式カーキの上下だったが黒のほうが好きなので合成で作ってみた
噂じゃリツカさんが作っているらしい

それにしても女性の服はすごい

新品なので綺麗だ、肌触りも悪くない

素材の肌触りはあまり良いとは言えなかったのにリツカさんはすごいと思った

部屋から出てエントランスへ向かう

エントランス

俺は任務の受注をした、初めてで緊張する
タクミ（いままで全部呼び出したかったよな）

蒼穹の月というミッションを受けた

参加する人員は決まっていた

ソーマとサクヤとコウタだ

俺は思った

（ っ てなんだ？ ）

作者「ゲームのボタンです」

とにかく、出撃ゲートで ボタン？

意味がわからないまま出撃ゲートへ向かう

！みたいな感じのボタンの集まりに見えるけど近づくと四角いボタンがたくさんある

基礎知識の方で教えてもらった

神機整備場

やはり受注した俺が一番早い

仕方ないので神機アルテミスの整備台の方に近寄り

柄をつかむ、なんてね

刀身などコアとかの細かいところもメンテナンスは終わっているよ
うだ

待つあいだは暇なのでアルテミスと話をすることにした

自分会議・会場

作者「ちなみにアルテミスの攻略度と適合率は比例します」

アルテミス「あ、黒だ！」

タクミ「よう、アルテミス」

他のやつらは睡眠中

作者「あいつらは自分のペースで起きるから寝てます」

タクミ「アルテミスは朝早いんだね」

アルテミス「メンテナンスのとき以外はいつも起きてるよ、どうしたの？」

タクミ「他のやつらは寝てるから、もしかしたらキミも寝てるんじゃないかなって思ったただだよ」

アルテミス「ふん、寝てた方がよかった？」

タクミ「うん、どうだろう」

俺はアルテミスの寝顔を見てみたいと思った、それに寝ている間に

俺は思春期、許してあげて

タクミ「いや、起きててよかった」

今日のアルテミスの服装は 作者の想像力は限界を迎えたようだ

作者「女の子の服って考えるの意外と難しいね」

タクミ「今日の服、いいね」

アルテミス「そ、そう？ありがとう、黒」

タクミ「その 二人のときは黒って言うのやめてくれないかな」

アルテミス「え？」

タクミ「なんて言うかさ、俺がタクミじゃん」

アルテミス「そう言われるとそうだね」

タクミ「他のやつらもタクミだけど二人だけのときくらい、な？」

アルテミスはうなずいた

????「あれ？だれか近づいてきましたよ、黒さん」

タクミ「あの人は？」

アルテミス「銀っていうの、新しい子なの」

タクミ「新しい子ね、よろしく」

銀「よろしくお願いします、黒さん」

タクミ「呼び捨てでいいよ」

銀「はい！よろしく、黒」

アルテミス「おとなしくてしっかりしてて優しい子なの、黒も優しくしてあげてね」

タクミ「わかりましたよ、ってよりだれが近づいてんの!?!」

銀「あっ、忘れてた! えーっと リンドウさんと、アリサさんです!」

タクミ「戻らねーと、じゃあな」

アルテミス「ここは銀が行ったら?」

銀「いいんですか?」

タクミ「せつかくだし、任せるよ」

銀「はい、任せてください」

神機整備場

銀をタクミ表記でいきます

タクミ「任務ですか?」

リンドウ「ん? ああ、アリサの实地演習だけだな」

タクミ「頑張ってくださいね、色々大変でしょうけど」

銀はどつやら皮肉屋らしい

リンドウ「まあ、とにかく生きて帰るだけさ」

タクミ「それが大変なんですけどね」

アリサ「とにかく早く行きましょう」

タクミ「頑張ってくださいーい」

タクミ「もう無理」

自分会議・会場

タクミ「あれ？銀、早いね」

銀「なんだか他人と話すと疲れるんです」

タクミ「ふーん、そうなのか、よくわかったよ」

銀「そこらへんを配慮してもらえると嬉しいかな」

アルテミス「そろそろ黒が戻ったほうがいいんじゃない？」

タクミ「たしかにそうだね」

銀「ミッション頑張ってくださいね」

タクミ「まあ、頑張ってみるよ」

アルテミス「なんか嫌なオーラが迫ってる気がするんですけど」

タクミ「ソーマだろ？そんなこと言うなって」

そういうことで話をやめて整備場のほうに場面は移る

神機整備場

タクミ「やあ、ソーマ」

ソーマ「なんだ」

タクミ「おいおい、もっと愛想よくできないのかねえ」

ソーマ「無理だ、というか馴れ合うつもりはない」

タクミ「ふーん、馴れ合うつもりはない、ですか」

声マネをして返す

ソーマは俺を無視して自分の神機のほうに行く

俺は思う、皆 神機好きなんだなあ、と

そういう訳じゃないのはわかっているけれどそう考える

タクミ「なんで無視するんだよー」

ソーマ「死にたくなければ俺に関わるな、と言っただけだが」

タクミ「なんで死ななきゃなんないの？」

ソーマ「俺がバケモノだからだ」

タクミ「マジ？ソーマって何歳？」

ソーマ「18だ、話を変えんな」

俺は笑いを堪えて言う

タクミ「お前がバケモノなら俺は悪魔、いや神だ」

ソーマ「なぜだ？」

タクミ「お前、ざk(ry」

タクミ「いや、なんでもない」

ソーマ「とにかく、あまり馴れ合おうとするな」

タクミ「ふーん、孤独主義者かなんかかな」

そのとき、コウタもやってきた

コウタ「よう、タクミ」

タクミ「コウタが三番か、今日は早いんだな」

コウタ「それじゃ俺がいつも寝坊してるみたいじゃん」

タクミ「だってそうじゃん」

コウタ「じゃあ聞くけどいつなんだよ」

タクミ「訓練のとき、ヒバリさんはコウタに一番最初に伝えたらしいけど」

コウタ「マジ？え、マジかよ!？」

タクミ「早めに伝えないと心配らしいってよ、前歴があるらしいね」

コウタ「え？前歴？ちっ、知ってたのか」

タクミ「舌打ちすんなよ」

こうやって仲が良いのか悪いのかわからない会話を重ねていくとダイも来た

サクヤ「これで全員そろったわね」

俺とコウタは思った「一番遅いくせにっ!」

タクミ「とにかく早く行きましょう、行くぞ、ソーマ」

ソーマ「わかっている、指図するな」

タクミ「一人で孤立してたから声をかけたまでさ」

コウタ「とにかく、神機をとろっぜ 話はそれからじゃね？」

タクミ「俺はもう出撃準備オーケーなんですけど」

コウタ「はやっ！」

タクミ「クロックアップさ」

サクヤはさすがに準備できている

タクミ「それより早く準備しろよな」

コウタ「さーて行くか！」

サクヤ「リーダーは誰がするの？」

タクミ「コウタ」

コウタ「タクミ」

同時だった

タクミ「どっぞどっぞ」

コウタ「いやいや、ここはタクミさんが」

サクヤ「もういいわ、私がリーダーをするわ」

俺・コウタ「どっぞどっぞー」

そんなやりとりはあとの悲劇を引き立てるものとなったことは俺達に知る由もなかった

俺達は悲劇の場、
贖罪の街へ足を運んだ

タクミ「ついにきました!」

コウタ「おうよ!」

ソーマ「あまり騒ぐな 奴等に気付かれるぞ」

タクミ「すみません」

コウタ「おお、タクミが素直に謝った!」

タクミ「俺だって先輩には礼儀正しくできるんだ!」

ソーマ「礼儀正しいんなら黙ってる」

タクミ「もういい、ソーマに礼儀正しくしても意味ねーな」

コウタ「あれ?サクヤさんは?」

ソーマ「下だ」

タクミ「もう出撃してんのかよ」

ソーマ「お前らが話してるからだ、行くぞ」

コウタ「そうだね、行く」

タクミ「ああ、行くっぜ」

そういうことで俺達は下に降りた

ソーマ「こっちだ、来い」

聖堂の方にソーマは呼んでいる

コウタ「なんでわかるんだよ」

タクミ「コウタ、ターミナルのスキルの所、チェックしたか？」

コウタ「いいや、それがどうしたんだ？」

ソーマ「スキルは関係ない、勘だ」

コウタ「だってよー」

タクミ「ユーザーセンスじゃないのかよ、っていつか勘でものを言うな」

けれどついていく俺とコウタ

タクミ「いましたよ、ヴァジュラさんです」

コウタ「可愛いですね」

ソーマ「さっさと済ませるぞ」

俺はつなびく

コウタはヴァジュラから10メートルほど離れてバレットを装填する

タクミ「開幕捕食だな」

ソーマはCCチャージクラッシュ派らしい

タクミ「いただきます！」

俺の捕食攻撃の後に続いてチャージクラッシュが弱点の尻尾を切り落とす

そしてこちらを向いて咆哮しようとしたヴァジュラにコウタが銃撃を喰らわせる

俺はヴァジュラの頭を斬りつけてコンボイトをする

タクミ「アルテミス、満腹になったか？」

そう尋ねると答える代わりにさらに刀身が輝く

俺はアラガミバレットが四つになったのを確認してさっそく

タクミ「お前ら、受け取れ！！」

俺は二人に二発ずつ平等に受け渡しをする

すると、基礎知識のほうで教えてもらったリンクバーストという現象が起こる

コウタ「おっしゃー！なんか、力が湧いてくるう！！」

彼は強制解放剤を知らない、製造中止になったのだ
というかバーストするのに支払う代償体力が多すぎたかららしい

作者「そういう都合でお願いします」

ソーマのほうは相変わらずだ

俺はヴァジュラの弱点の後ろに回り込む

コウタの射撃がリンクバーストによって激しくなったからだ

再生しようとしている尻尾を再び斬る

ついでに左足も斬り付ける

そうするとヴァジュラはセクシーポーズのようなダウンを披露する

そのダウンしたときにコウタはLv2雷槌を撃つ

タクミ「すごく　大きいです　」

想像以上に大きい雷槌は俺とソーマを包み誤射となる

コウタ「ゴメンゴメン」

タクミ「いってえ　でも、決着は着いたみたいだぜ」

ヴァジュラはソーマの捕食で活動を停止させた

作者「解説しましょう」

「Lv2雷槌で吹き飛ばされたソーマは後ろの壁でジャンプして
(マリオの壁ジャンプっぽく)

「飛び上がったからヴァジュラの体をマントごと捕食形態の神機で
喰い破りました」

俺はヴァジュラの素材を回収する

時間は一分も経っていない

タクミ「今日はいつらが起きてないからこんなものか」

紅・蒼・黄金・漆黒
あいつらの力は黒にも少し干渉する

コウタ「やったー！」

ソーマは格好つけて

ソーマ「ふっ」

タクミ「紫が普段から起きてりゃ楽勝なんだろうけどなあ」

コウタ「はやくサクヤさん呼んで帰ろっぜ」

呼ぶのはもちろん信号弾

1分後

コウタ「サクヤさんだ！おい、サクヤさん」

タクミ「だから騒ぐなって言われただろ」

サクヤ「ヴァジュラがいたの？」

ソーマ「もう倒した」

サクヤ「さすが、人手が多いと仕事が早くて助かるわ」

タクミ「どこに行つてたんですか？」

サクヤ「もちろんヴァジュラを探してたわよ」

コウタ「せめて索敵命令ぐらいだしてから行動してくださいよー」

ソーマ「ん？何？」

ソーマが何かに気付いたようだ

ソーマが向いている方向を見ると

タクミ「リンドウさん！」

リンドウ「お前ら？」

コウタ「あれ？ リンドウさん、何でここに！？」

サクヤが驚いた表情のままリンドウに質問する

サクヤ「どうして同一区画に2つのチームが どうしてここに？」

リンドウ「考えるのは後にしよう」

さっさと仕事を終わらせて帰るぞ」

リンドウ「俺たちは中を確認　お前らは外を警戒　いいな」

タクミ「2人だけじゃ危険ですよ、ってより、中にはなにもいないですよ」

リンドウ「まあ、あれだ、チェックしといて損はないだろ」

タクミ「わかりましたよ」

なんだか不吉な予感がする

それは俺が「ニュータイプ」新型だからだ

リンドウとアリサはそんなことも知らずに中に入っていく

聖堂・内部

それはリンドウとアリサが中に入ったときだった

いきなり中「プリティヴィ・マータ」にあいつが入ってきた

リンドウ「下がれ！！後方支援を頼む！」

「プリティヴィ・マータ」
奴は咆哮を上げる

そして、聖堂の床に無造作に降り立った

リンドウ達の前に立ち塞がり、再び咆哮を上げる

一方、アリサは

アリサ「パパ　！？ママ　！？

やめて　食べないで　」

アリサの幼い頃のトラウマが再び、掘り起こされる

リンドウ「アリサあ！どうしたあ！？」

アリサは後ろに下がり照準を合わせようとする

そのとき、フラッシュバックがアリサの中で起こる

極東支部、支部長の声だ

シクザール「そうだ！戦え！打ち勝て！」

続けてロシア支部の頃からの先生の声が思い出される

「こう唱えて引き金を引くんだ

アジン　・　・　・　ドウヴァ　・　・　・　トウリー　「！」

リンドウがアラガミに殴り飛ばされる

起き上がったときにはアリサは

アリサ「アジン　・　・　・　ドウヴァ　・　・　・　トウリー　」

再びあの声がよみがえる

俺とサクヤは聖堂に入った

タクミ「なっ、これは!?!」

俺が見たのは崩れ落ちた天井の壁によって閉ざされた聖堂の内部だ

サクヤ「あなた　　!!　　いったい何を!?!」

タクミ「落ち着いてください!」

サクヤ「落ち着けるわけないでしょう!?!」

アリサ「違う　　違うの　　パパ　　ママ

私、そんなつもりじゃ　　」

サクヤは聖堂の内部を閉ざす岩の壁にレーザーを撃った

しかし、貫通はできなかった

タクミ「そんなときはこのステンドガラスを割ればいいんですよ」

サクヤ「そうね!」

俺は蹴りでステンドガラスを思いっきり蹴り破る

その頃、外はというと

ソーマ「まずいな　　こっちも囲まれてやがる　　」

プリティヴィ・マータだ、4匹は居る

1匹がコウタに飛び掛りそのまま聖堂の入り口まで侵入する

俺とサクヤはステンドガラスを破ってリンドウ救出作戦中だったが
即座に対応した

タクミ「本気でいかせてもらおう!!」

飛び込んできた奴の頭に渾身の一撃を喰らわせる

頭は碎け壁に叩きつけられる

俺は焦りに焦ってパワーセーブをしなかった

そこにソーマの音がする

ソーマ「早くしろ! 囲まれるぞ!」

タクミ「今やっている! 指図するな!!」

虫の息のマータに止めの捕食をしながら答える

実は目が紅になっています

そのときだった、割れかけのステンドガラスからリンドウの音がする

リンドウ「命令だ!! アリサを連れて、アナグラに戻れ」

サクヤ「でも」

リンドウは怒鳴る

リンドウ「聞こえないのか！

アリサを連れて、とつとアナグラに戻れ！」

タクミ「でも、あんたもこっちにこれんだろうがっ！」

リンドウ「新手だ、そいつを片付けたら帰るから心配すんな」

リンドウは素早く切り替えて指示を出す

リンドウ「サクヤ！全員を統率！

ソーマ、タクミ、退路を開け！！」

アリサ「パパ　ママ　そんな　つもりじゃ　」

タクミ「まだ言ってるのか、大丈夫か？」

サクヤ「リンドウも早く！！」

タクミ「それは俺の言った言葉だ！」

リンドウ「わりいが、俺はちょっとこいつらの相手して帰るわ

配給ビール、とっておいてくれよ」

俺はアリサに手を差し伸べる

タクミ「立てるか？」

しかし、返事はない

なので背負うことにした

サクヤは緊迫した声で言う

サクヤ「ダメよ！ 私も残って戦うわ！」

そう言った頃にコウタがこっちにやって来た

リンドウ「サクヤ これは命令だ！！

全員生きて帰れ！！」

サクヤ「イヤああああ！！」

タクミ「子供みたいに騒ぎやがって アリサ、大丈夫か？」

返事はない、しかし、力強くしがみついてくる

タクミ「この調子なら、大丈夫かな」

コウタが荒ぶるサクヤを抑える

コウタ「サクヤさん！ いこう

このままじゃ全員共倒れだよ」

サクヤ「いやよ！ リンドウうつうつ！！」

そう叫ぶと天井が崩壊を始めた

そして場面と時間は変わる

リンドウは煙草を吸っていた、高級なやつを

プリティヴィ・マータが近くでよこたわっている

多分こいつを倒して一服していたのだろう

彼には力など残っていないかった

兵装も全て使い果たして、残ったのは神機と煙草と体だけだ

その体も長年の任務と歳もあつて疲れきっていた

リンドウ「行つたか」

後輩達は自分の命令で撤退した

そのとき、外の景色から異形の怪物が現れた

ディアウス・ピター（通称ピター、パパジュラ、おじさん、）だ

リンドウ「はあ　ちよつとぐらい休憩させてくれよ」

リンドウ「体がもたないぜ」

煙草を吸い、煙を吐く
そして煙草を投げ捨て、立ち上がる

作者「その後、リンドウの行方を知るものは誰もいなかった」

テーマ「リンドウさん」

作者「リンドウさんについてです」

タクミ「舞台裏とかで書いてないけどいい人だったぜ」

コウタ「俺達を逃がすために」

タクミ「でも行方は」

作者「ネタバレはいかんだよ」

コウタ「いやいや、書いてる時点でネタバレだし」

作者「その後、コウタの行方を知るものは誰もいなかった」

タクミ「作者の言ってみたい台詞の中盤ぐらいにはいつてる台詞じやん」

作者「タクミの次の戦いの舞台だったりしてね」

タクミ「あの物語に俺は介入できねーよ」

コウタ「人を勝つてに殺すなー!!」

作者「とにかく、テーマを変えてやろう」

テーマ「没ネタ&設定詳細」

タクミ「やめて！絶対やめて!!」

作者「そういえば最近カノンと逢っていないようだね」

タクミ「っ！そ、そんなことないぞ!!」

コウタ「へー」

タクミ「昨日だって一緒に晩飯喰ったりしたぞ」

作者「くつたりりの字が違うぞ？野外デートか？」

タクミ「　　そうだよ！」

コウタ「開き直った！」

作者「なぜ登場しなかった？」

タクミ「そ、その　　文字の節約です」

作者「ふーん」

コウタ「そういえばアルテミスも　　」

タクミ「ばっ、バカ！」

作者「とにかくそこらへんは没ネタのほうで」

作者（まだそこまで発展してないから安心を）

タクミ「とにかく！次回予告だ！！」

作者「次回の神崎タクミの戦いはっ」

タクミ「どうも！刀身コンプリートを最近しました？」

作者「こつちの話だ！」

タクミ「まあいい、最近、所持金が余る余る」

タクミ「なんすか？これ？」

作者「アルダノ　　ネタバレはいけないな、ある特定のアラガミ狩

りをしてたら素材が集まらずに金だけ余った男の物語さ」

コウタ「ゴッドイーター（無印）よりは少ないけどな

作者「無印は一億でやめた」（錬金術を使った軟弱者）

コウタ「神酒以外は1000個キープでやってたら1000万、だっ
け？」

作者「見ている方はもっともってらっしゃるでしょう」

タクミ「でも100万は楽勝だよな」

作者「なんつったって無印体験版で30万（約30時間）　　稼げた
から楽勝ですよ」

コウタ「タイムアタックでしたっけ？あれで結構稼いだらしいです
ねえ」

タクミ「いったい、いくらだよ!!」

作者「個人情報に関わりませう」

コウタ「いーじゃねーか、ケチ!」

作者「1つだけ教えましょう、服代で100万は使った」(素材代)

タクミ「次回予告!」

作者「そうだな、あとで振り込んでおくよ」

神崎タクミはセカンドデータであり、現在、432906fcもっている

出演料として年代物の木像100個渡したのは少々有名な話

タクミ「次回予告!!」

作者「わかったよ、あ、コウタが寝てる」

タクミ「もういい!!」

作者「次回、どんよりとしたムードが漂うアナグラ」

タクミ「カノンも精神的なダメージをつ」

コウタ「んー、眠いよ」

作者「修正してやる!!」

コウタは眠りながら寝言で眠いと言ったため修正を受けています

タクミ「もういい!!俺が単独でやる!!!!」

タクミ「Q検索ミッション、行きますよね? Aストーリー上無理

なんだ、ごめん」

タクミ「次回、揺れる魂」

タクミ「次回は前書きが復活する予定です」

タクミ「次回は来週中に投稿しようと思います!!」

作者「ちよつと待て!!!!」

タクミ「なんだ?」

作者「小説を書くのは俺なんだ!!」

タクミ「サーセン」

コウタ「ようやく帰ってこられた」

作者「とにかく、揺れる魂、および設定詳細&没ネタをお楽しみに！」

タクミ「今日の俺はあんまりチートじゃなかったね」

作者「そんなことないぜ」

コウタ「ママジユラを一撃必殺だったじゃないか」

作者「十分チートだ」

タクミ「俺が求めてるのは協調性さ」

コウタ「黒と銀だけで一撃はすごいな」

タクミ「仲間を使い、自分を使え、それがチームワークを生む、だろ？」

作者「あんななんかリーダーになれないんだからね！」

コウタ「まあいいや、それでは次回」

第十八話「揺れる魂 回想編」(前書き)

作者「とにかく、揺れる魂です」

タクミ「質問、いい？」

作者「なんだい？」

タクミ「死んでくれない？」

作者「なんで!？」

コウタ「どうせ歴史改革の件でしょ」

タクミ「そーそー」

作者「お前 散々、愚痴言つてたくせに」

コウタ「そういえば、言つてたね」

タクミ「いつだよ!?!」

回想中・・・

タクミ「あれは、あれだ」

作者「一番揺れているのは主人公の魂であることを発見」

コウタ「荒れるの間違いじゃね？」

タクミ「もういい!! なんで俺が、隊長になつたかをこの話で証

明してやる!?!」

コウタ「隊長!？」

作者「近い将来、主人公は第一斑、隊長となるのは他の方の小説で

知つてくださるとありがたいです」

コウタ「すげえ 出世じゃん!! 大出世じゃん!?!」

これ、なんて言うんだっけ? 下克上!？」

タクミ「リンドウさん」

作者「ドン引きです」

コウタ「なんでだよ!？」

タクミ「下克上ってのはな」

説明中です

コウタ「ゴメン、知らなかった」
タクミ「下克上の意味を知るチー連携形イハヒ字イダシTRHHAAG」
作者「長すぎだな」

第十八話「揺れる魂 回想編」

アナグラに俺達は戻ってきた。

皆、ポロポロの姿だった。

俺と、ソーマと、コウタは、身体的なダメージ

サクヤと、アリサは、精神的なダメージを受けていた。

アナグラの空気は最悪だった。

神機使いは、この事態を、受け入れられない、という表情で、それぞれリンドウのことを話していた。

作者「リンドウさんが死ぬわけない、というような話です」

そのなかを、アリサを背負って医務室へ向かった

途中で、あまり見ない顔の神機使いに話しかけられたが、コウタが代わりに相手をしてくれた

やっぱり、コウタはいいやつだ、と思いながらエレベーターに乗り込んだ。

アリサが、相変わらず同じ事を言っている。

作者「パパ、ママ、違うの、ですね、わかります」

オオグルマという医師がいたが、あまりいい印象は受けなかった

医者のかせに、医務室で煙草を吸う、ある意味すごい

煙草を見ると、反射的にリンドウのことを思い出してしまっ
しかし、アリサをベッドに寝かせ、医務室を立ち去った。

タクミ「なんだあいつ」

オオグルマは、ぐったりとしているアリサを見て、少しニヤっとしていたような気がする。
気のせいだと思ったが、実は本当だったりする。

タクミ「生理的に無理な奴だな」

俺は、そう言って、自室に戻った。

自室

いざ部屋に戻ってみると、静かさが思考を進ませる。

一応、ベッドに潜り込む。

俺は、3人の神機使いを思い出した

1人は父親、まあ、もちろんと言えばもちろんだが

一度だけ、現場を父親と見たことがある

ロシアのアラガミ殲滅作戦の後始末に向かう前だった、そのときの父親は、気合が入りすぎて空回りしていたことが記憶に残っている。

俺は9歳だった。

その頃は、まだ、アナグラに住んでいた

そんなことを、なんで思い出おもしていくか、というと

父親は、ロシアから帰ってこなかった

父親の代わりに帰ってきたのは、刀身が半分に折れて、その上、装甲がほぼ削りとられた神機だった。

1人で、集落を守った上の戦死らしい

しかし、そんな報告は要らなかった

ただ、父親が帰ってくるだけでよかった

もちろん、そんなことを聞かされて、9歳の少年には精神的なダメージが大きかった

その上、外郭居住区に住居を移動させられた

俺は、アナグラには友達というか、同い年の子供がいなかったので、そっちの方には抵抗がなかった。

それから、6年

外郭居住区の生活にも慣れ、友達も出来て、楽しく暮らしている頃だった。

^{アラガミ}奴等は、突然現れた。

逃げ惑う人々と、逃げ遅れた人々、どっちも死んだ。

みんな死んだ。

血に塗れた家、燃える家、壊される家、転がる肉片
地獄絵図とはこのことだ

俺は、その頃、オウガテイルに追いかけられていた
今考えると、笑える？ 話だ

今なら素手で、^{アラガミ}あいつらを殺せるから、かな

逃げているうちに、俺はこけてしまった。

俺は、「ドジった 死んだな」と思うのは当然だった

第三者みたいな一言のあとに、俺は、恐怖で気絶した。

しばらくして、目を覚ますと、オウガテイルは、バラバラの肉片に

なっていた。

俺は笑った、ざまーみろってね

なんでオウガテイルがこうなっているか、という疑問はあったが、笑った

周りに、神機使いはいない、笑うしかない

空は暗い、煙だね。

笑っていると、急に寝てしまった

次に目を覚ますと、アナグラの医務室だった。

作者「こういうことだった、のかな？」

二人目は、もちろん、エリック・デア、なんだったけ？

作者「フォーゲルヴァイデー！」

どこからか、“フォーゲルヴァイデ”という単語が、聞こえてきた。

二人目は、エリック・デア「フォーゲルヴァイデさんかな？

俺は、彼を守るために戦った、しかし、彼は、死んだ。

そのときは、自分の力不足をソーマのせいにしてしまった。

今では、反省している

けど、ソーマは手伝わなかったなあ

これが、責任転嫁という奴だ、ソーマ、すまん。

そして、今は彼の遺志を継ぎ、人類のために華麗に戦おうと決意した。

エリックの死は俺にとって大きかった。

目の前で、人が死ぬなんて、こんな時代だろうと、一度でいいことだ
そして、生死がわからない雨宮リンドウ

あの人なら生きている、皆が皆でつぶやいているが、生きているか
はあくまでわからない。

それは、リンドウのことを思い出している途中だった。

ドアの外から気配がする。

タクミ「ニュータイプだからわかるのだよ」
小声で呟き、ベッドから抜け出した。

そのとき、ノックをしてきた

俺は、素早くドアを開けに向かった、外の人物がわかったからだ。

スライド式だがノックを掛けていたから俺でないと開かない。

作者「ノックを掛けたら、腕輪認証、もしくは入出許可を取ったら
入れる設定にしました」

タクミ「カノンか、入って」

俺の声は、なんか暗くなっていた。

再び部屋に戻ると、俺は対応が悪かったことを、反省してこう言っ

た。

タクミ「その ロック掛けててごめんな」

カノン「私こそ、急に来てごめんね」

タクミ「リンドウさんのこと？」

カノン「う、うん」

タクミ「今、リンドウさんのこと、おも思い出してたんだ」

カノン「そうなの」

タクミ「俺は、あの人を助けられなかった 逆にリンドウさんに助けられたよ」

カノン「うん」

タクミ「なにも変わってないんだ、俺 アルテミス力を、手に入れたのに、リンドウさんにエリック」

カノン「大丈夫だよ」

タクミ「え？」

カノン「リンドウさんは生きてると思うよ、けど タクミが無事でよかった」

タクミ「お、俺!？」

まさかの一言に、俺は混乱する
つまり、カノンはこの一言を言いに来たということが、わかった、
ニュータイプだから。

カノンは、抱きしめてきた

なんというか、前回の逆パターンということが飲みこめてきた

タクミ「心配かけて、ごめん」

俺は、どうしようもなくなって、抱きしめ返す
その反応でカノンは、俺が前回したこと、つまり4番を選択した
（第五話をご覧ください）

カノンは、俺の頭に手を伸ばし、優しい言葉を

カノン「なんて言えばいいかわからないけど　タクミは、強いよ」

タクミ「え？　俺が？」

カノン「うん」

そついう言葉って、頑張る気になれるんだよね

タクミ「ありがとう、カノン」

その状態がしばらく、続いてしまったので

カノン「搜索ミッション、行くよね？」

タクミ「聞かれなくても、当たり前だ」

この状態では、こういう言い方になってしまった

少し離れて、優しく、カノンの頭を撫でる

カノン「じゃあ、戻るね」

タクミ「ああ、またな」

俺は、そう言い手を振った

タクミ「俺が、強いか　期待には答えるよ」

俺は、戦闘の疲れを癒すために、眠りについた。

一方、コウタは

コウタは、自分の部屋に居た。

彼は、親友タクミの部屋へ訪ねる者がいたことに、焦りを覚えた。

コウタ「俺は　どうしたら　？」

作者「隠れて、タクミとカノンの話を聞けばいいと思うよ」

コウタは、親友タクミの会話から、なにかを学ぶことを、謎の声から教えてもらった。

数刻後

コウタ「抱き合うのか　なるほど」

優しい言葉を掛けるタイミングなどを、メモするという勤勉さをアピールしている。

コウタ「早速アリサの看病につ！！」

医務室の手前の廊下

コウタの野望はすぐに潰えた。

コウタ「面会謝絶う？」

立ち往生していると、医務室から、例のあの人が出てきた。

オオグルマ・タイコ

オオグルマは、1度コウタを見ると、なにもなかったようにエレベーターの方に向かった

コウタは、仕方なく、自室に戻った。

第十八話「揺れる魂 回想編」(後書き)

今日のテーマ「ニュータイプ」

タクミ「俺!？」

コウタ「俺だよ」

作者「中の人はニュータイプ役もしたね」

タクミ「あんたもニュータイプのはずだろう」

コウタ「俺はスペシャルって呼ばれるニュータイプだ」(ドヤ)

作者「話がそれました、完全に」

タクミ「なんでだよ」

コウタ「なんでそれるんだよ」

1、ニュータイプとは?

この小説における万能主人公の説明 別名「新型」

2、他のやつとの関わり

他のやつとは?

支部長の権力、と主人公の強さ、とだが私は謝らない、そして作者の不思議な力などの露骨な救済プランである

タクミ「つまり、小説を書く際に簡単にすることができるものだな」

作者「いやいや、その、すみません」

コウタ「次回も揺れる魂?」

作者「ちよつと早いぞ」

タクミ「次回予告ー!」

作者「どーも、最近、修学旅行の準備で小説がなかなか書けない作者です」

コウタ「おいおい、修学旅行の準備のせいにすんなよな」

タクミ「そーだそーだ、ついでに修学旅行の短編でも作りやがれ」
作者「わかったわかった」

タクミ「マジ!?」 冗談のつもりだったんだけどね」

作者「とにかく! 次回!!」

作者「揺れる魂 決意編」

タクミ「次回は決意? いったい何を?」

コウタ「主人公なのに知らないの?」

作者「もういいよ、では次回」

後書きで修学旅行の短編を書くとかでましたけど、連載になるかも
知れません

短編で一氣に書くか、連載で書いていくかをアンケートでいこうか
な、と思います。

ご協力、お願いします

第十九話「揺れる魂 決意編」(前書き)

作者「やってきました!」

タクミ「何が?」

コウタ「いきなり何だよ」

作者「なんでこんなに無知なんだー!!」

タクミ「さあな」

コウタ「だって台本ねーもん」

作者「ゆとりがあ」

タクミ「作者もゆとりのくせにバカ」

作者「バカって言った方がバカだ!!」

コウタ「そういう考えって5歳のときには捨ててたな」

タクミ「本編行こうぜ」

作者「最近、前書きが異様に短い気がするけど気のせい?」

コウタ「気のせいだろ、行こう」

作者「10月のクオリティが11月に比べて高い気がするんですけど」

タクミ「スサノオのおかげだろ? とにかく行こうぜ」

スサノオ戦は禁忌を破る者で特徴を
を自分で考えて書くこと
でよくなつた気がします

作者「わかった! 前書きにゲストが
ってオイ!!」

作者「待ってくれたっていいだろ」

第十九話「揺れる魂 決意編」

目を覚ました

いや、目が覚めた

夢を見た、なんというか悪夢だ

俺の額には汗があつた内容は残酷すぎてまるで旧世代の映画だ
自分が死ぬ手前で夢から覚めたので後味悪い夢だった

俺はベッドから起き上がり早速コーヒーを入れる

これはもう趣味になってしまったらしい

コーヒーの味を試行錯誤していると色々なことを忘れられるからか
例えば悪夢とか
も知れない

お湯はどうした、と思った方は2050年までアラガミがいなかつたことを考えてくださると嬉しいです

服を着る、いつもの癖だ

そしてコーヒーを飲み、そして、1人、評価を付ける

タクミ「今日の味はなんというか」

後味が悪い、やはり心と味はつながっている、ということか

気分を晴らすにはコーヒーだけでは足りない

つまり飯だ
アラガミ

しかし、エントランスは人でいっぱいなのであの人のところへ行く
神博士

榊「やあ、よく来たね」

タクミ「いきなりすみませんね」

榊「ところで用件はなんだい？」

タクミ「こんなときですけど、なにかやることありませんか？」

榊は以前のことを思い出しながらこう言う

榊「うーん、そういうことは支部長に聞いた方がいい仕事が回ってくると思うよ」

タクミ「やっぱりそうですか」

榊「とにかく、私が支部長に伝えておくよ」

タクミ「ありがとうございます」

支部長室

シックザール「やあ、話は博士から聞いているよ」

タクミ（仕事の話のときは役職で呼ぶんだな）

シックザール「さっそくだが、任務だ」

タクミ「ターゲットは何ですか？」

シックザール「場所は廃寺だ、ターゲットは複数なので順次伝える」
タクミ「なるほどね」

シックザール「これは本来、リンドウ君の仕事だったのだが」

シックザール「キミなら適任だろう」

タクミ「ありがとうございます、支部長」

鎮魂の廃寺

今日は防寒着だ

雪山で雪から目を守るサングラス的なものも装備している

前回の寒さと雪で死にかけて反省だ

あと、サングラスが似合っている

敵を確認するまでは紅でいることが自分会議で決定した

以前までのスタイルだ

タクミ「さあ、行きますか」

俺は下に降りた

積もった雪は以前より深くなった気がする

この辺りはアラガミが現れる前に雪など降らなかつたらしいが異常

気象というやつだ

しばらく歩くと鈍い足音が聞こえてくる

ゆっくり足音のする方へ向かう

いたのは“クアドリガ”だった

交戦したのは紫なので記憶がまず無い

周囲には幸いアラガミがいなかった

俺は体に積もった雪を払う代わりに全速力で走りだした

まるでクロックアップしている気分だ

クアドリガの近くに迫ると足音を感じかれると厄介なので空中から攻めることにした

雪が全身に強く当たるがそんなことでは止まらない

タクミ「俺を止めなきゃモビルスーツMSでも持つてきな!!」

モビルアーマーMAっぽい奴に向けてそう言った

今の一言でクアドリガは振り返り弱点頭部を俺に向ける

タクミ「かかったな!!!」

頭部アルテミスに神機を斬り付ける

すると前面装甲が開き最大の弱点があらわになる

そこにも紅の力で一刀両断とする

地面の雪が紅に染まる

クアドリガは二つになって倒れた

コアを摘出する前に素材を摘出した

次に神機アルテミスを地面に置く

すると、捕食形態に勝手になる

俺とアルテミスは精神結合したので勝手に食べてくれる

精神結合ってというのはつまり自分会議に出席できるようにまじ
たってことです

この光景に俺は見蕩れている

というか俺以外にこの光景に見蕩れる者はいないだろう

神機アルテミスが単独でコアを摘出してクアドリガの体は霧散した

その頃、俺は雪に埋もれていた

アルテミスが必死に食べている姿は可愛い

つまり、見蕩れているうちに雪が積もってきたというわけだ

俺はクアドリガが霧散したことでそのことに気付いた

雪を掘るようにして雪中を脱出した

タクミ「寒い」

防寒着の中に雪が入ってしまったのだ

雪を外に出して神機アルテミスを持ち上げる

そして俺は紅と漆黒を交代させた

これには意味がある 索敵だ

漆黒は侵食場で神機の結合を強めたり、アラガミの結合を脆くしたり出来る

それ以外にもアラガミの偏食場を感じとり、位置や種類を把握することが出来る

万能すぎる漆黒、それには漆黒の設定が関連している

しかし、今話すことではない

タクミ「捉えた!!!」

エリアAに2匹、エリアHとLに一匹ずつ、そしてエリアPに三匹、しかも戦闘中だ

全て大型のアラガミだ

一番近くて安全なエリアHに向かう

少し歩いていくと尻尾が建造物のところからひょっこり出ている

タクミ「そう見せ付けられると、斬りたくなるねえ」

しかし、その気持ちを抑えて高台に登る

なぜかって？ 尻尾が斬りやすいからさ

高台から背中に飛び乗る、そこで気付かれた

叫ばれたら他のアラガミが寄ってくるかもしれないので尻尾を切り落として怯ませる

怯んでいる隙に捕食を背中で行う

血飛沫が俺にかかる、しかしサングラスに視界は守られた

タクミ「万能サングラスだっ！！」

そう一言言つと俺は飛び降りて、さらに喰らわせる

バーストだ

バーストをすることによって身体能力はさらに上昇する

二段ジャンプが出来たりするのもバースト状態の恩恵だ

そして斬る、斬って、斬って、斬りまくる

後足はこのラッシュに耐えられずダウンを起こした

そこからプリティヴィ・マータの頭部の方に跳ぶ

漆黒の力を開放する（まだまだポテンシャルはあるよ）

プリティヴィ・マータの頭部に渾身の右ストレートを喰らわせる

頭部は結合崩壊を起こし、完全に倒れこむ形になった

このままでは時間がかかるのでコアを抽出した

というか全部喰らい尽くした、というのが正しい

この戦いのうちにアラガミの位置は変わってしまった

エリアPのアラガミは一匹に減ってお食事中らしい

エリアGとEに他のアラガミは集まって交戦中だ

タクミ「エリアGEねえ、俺を呼んでるんだかな」

プリティヴィ・マータが2匹とクアドリガとボルグ・カムランだ

クアドリガのミサイルはボルグ・カムランの盾に防がれた

クアドリガのミサイルを防いでいるボルグ・カムランの尻尾にプリティヴィ・マータの1匹が喰らい付き、もう1匹がクアドリガに氷

の弾丸を放った

しかし、クアドリガは放熱を行った

氷の弾丸は溶けて水がクアドリガにかかったただけだった

プリティヴィ・マータは気を抜いていた、トマホークで狙われていたことも知らずに

そう、クアドリガはトマホークを撃ち出す際に放熱をする
つまり、放熱はトマホークのついでだった

トマホークはプリティヴィ・マータに直撃した

トマホークの爆発した瞬間に俺は飛び出した

乱闘だったので俺の存在に気づいたのはクアドリガだけだった

クアドリガは戦車などの装備をトレースしたアラガミなのでレーダー的なものがあるらしい

クアドリガに咆哮されると面倒なので一撃で仕留めることにした

漆黒の力で前面装甲に一撃、蹴りを喰らわせ、クアドリガは巨体を
仰け反らせる

装甲が少し開いたのを俺は見逃さなかった

タクミ「クロックアップ」

小さくそう言うと仰け反った巨体の弱点部分に一瞬で間を詰めた

そして瞬時に捕食形態に切り替えコアを摘出する

クアドリガは黒い霧となつて霧散する

そして、地面に立つ

あの巨体が全て黒い霧となつただ、気付かないアラガミはいない

俺はいつも携行しているオウガテイルのコア（シックザールと榊には許可をすでに取っている）

そのコアをアルテミスに食べさせる

味^カはじかに伝わってくる

力は衝撃波と威圧感に変わる

既に怯んでいるプリティヴィ・マータは吹き飛ばされて池に落ちた

その間にエリアG方面のボルグ・カムランの盾を素手で粉碎した上
に神機^{アルテミス}で脚払い、というか脚を断ち切った

脚を失った騎士は雪の地面に倒れこむ

そして尻尾を切り落とすと同時にプリティヴィ・マータの頭部を砕いた

そのまま神機^{アルテミス}を地面に差して

一呼吸する

それもアラガミにとっては00・1秒もなかった

神速カミヤマトになつた俺はこんな時間でも十分な休憩だ

コアバーストの恩恵はスタミナを無限の領域までに昇華させ、戦闘能力は救世主計画のゴッドイーター達もビックリ仰天だ

しかし、抑える

これはあくまでストレス発散とアルテミスのお食事なんですよ

でも、コアバーストでさらに巨大化した捕食形態は2匹とも喰い潰した

今回はコアを抽出した、これ以上のコアバーストは無用だからだ

池から必死に上がるうとしているプリティヴィ・マータ、可愛い

タクミ「可愛いから食べてあげる」

プリティヴィ・マータを食べさせると、月が見えた

満月だ、空気が冷たくて澄んでいるからよく見える

タクミ「ブルーツ波なんてないよな」

とても綺麗な満月に一言呟いて振り返る

振り返ったとき、プリティヴィ・マータは黒い霧になった

階段を登っていく、とても長い階段だがコアバーストでは疲れがない
心地よい疲れとかがあるそうだが、多分これは長い階段はそうだろう

月明かりを雪が反射させる、幻想的な光景だ

以前、コウタとここに来たときにカノンと来たら
なんてことを言ったが本当にそうだな、と、ふと思った

そしてエリアJに着いたときだった

黄金の仏像？ ディアウス・ピターがある本堂から帝王が現れた

俺は奴より早く咆哮し、怯ませた

怯んでいる隙に頭に跳び膝蹴りをする

頭部は結合崩壊を起こし、ダウンを誘発させた

それから、俺は昨日の復讐のように帝王を斬り付けた ディアウス・ピター

マントは全て斬られてなんとも言えないほどのみすばらしさをあら
わしている

ヴァジユラ種共通の弱点の背中にコアバーストの無限の射撃を喰ら
わせる

体を貫いた弾丸はディアウス・ピターから離れる前に爆発する

帝王は全ての行動を停止した、いや、停止させられた

勝った、俺は勝った

いやいや、このままではいけないね

蒼穹の月の後の報告ではプリティヴィ・マータとディアウス・ピターが乱入したという報告だった

今回の数は大体同じだったのでこいつらかと思っただら違った

リンドウが生きているという望みがまた、減った

しかし、俺は立ち止まってられない

そして俺は極東支部に連絡を入れた

タクミ「神崎タクミです、目標を駆逐しました」

シクザール「ごくろう、実によくやってくれた」

シクザール「それでは迎えをよこす、エリアJ辺りで待機していてくれたまえ」

タクミ「了解しました、それでは」

しばらくしたらヘリコプターがやってきた

ヘリコプターに乗り込むとサングラスを外し

眠りについた

第十九話「揺れる魂

決意編」(後書き)

次回、感心現象

ファーストコンタクト

第二十話「感応現象 ファーストコンタクト」(前書き)

前回、俺は任務(後の特務)に出た
強力なアラガミが大勢で待っていた
蒼穹の月のメンバーかと思っていたら、アラガミ違いだった
無傷で帰った俺を待っていたものとは

第二十話「感応現象　ファーストコンタクト」

俺は30分ぐらいのヘリの旅を寝て過ごした
しかし、コアバーストは続いていた。

途中で目が覚めたので、ヘリのドアを開けて、アラガミを撃つて暇
つぶしをしていた。

一緒に搭乗していたのはパイロットだけで、彼は無言で運転している。

ウロヴオロスが居たので、狙ってみたら、なんとコアを砕いてしまった。
った。

巨大なウロヴオロスは、一瞬で霧散した。

パイロットは、驚いたような表情を浮かべてその光景を眺めている
しかし、彼はすぐに運転に戻った。

俺は、何か面白くない気分になって、前方を飛行していたザイゴ
トを撃ち落とした。

そうしていたらコアバーストが解けた。

外郭居住区が見えてきた

同じような建物ばかりで、どこがどこだかわからない。

ヘリポートの上に着いた

一応、礼を試してみる。

タクミ「送ってくれて、ありがとう」

パイロットは見向きもしなかった。

ヘリポートまで10mのところまで飛び降りた。

面白くないから、だ。

エレベーターに早速乗り込み、パイロットを置いて行った。

エントランス

エレベーターは、エントランスにようやく着いた。

屋上から地下まで降りてきたので長い時間乗っていた

エレベーターは、俺が降りると、すぐに、屋上の方へ向かった
彼の乗る分だろう。

階段の下で会話をしている者がいる

雨宮ツバキと防衛班の面々だ

カノンもいる

ブレンダン「教官！ 俺たちもリンドウさんの探索に向かわせてください！」

ブレンダン・バーデルが何やら言っている

ツバキ「何度も言わせるな それについては正規の部隊が動いている 経過を待て」

そんな報告は受けていないので俺は知らない

パイロットが正規の部隊の一員だったことを俺は知らない

タツミ「しかし！ 人数が多い方が発見の可能性が」

ツバキ「くどい」

ツバキは少し、苛立っているようだ。

カノン「リンドウさんは命の恩人なんです！ だから今度は私達が

」

ツバキ「くどい」と言っている！」

ツバキの一言で、全員はうなだれる。

空気を呼んだのかはわからないがヒバリは声を掛ける。

ヒバリ「ツバキさん 支部長がお呼びです」

この呼び出しが俺の活躍をツバキに伝えるものだとは思いつた

ツバキ「わかった しばらく頼む」

ヒバリ「了解しました」

そう言われるとツバキは歩きだした

そして残された防衛班の面々に百田ゲンが渋い声で説教的な話をする

ゲン「おい テメエら」

ゲン「あいつの目の前で、何人死んだか 教えてやろうか？」

俺はわかった

28人だ

なんたつて目の前だからな
いや、死神の記録を書き換えやがった

カノンがゲンの一言でさらにうなだれる
年寄りには言い方つてもものはないのか、俺はそう思った

ゲン「ましてや血を分けた弟だ 飛び出したいのはあいつの方だろ
うに」

俺はエントランスを立ち去った
逃げた、と言えば正しいのかもしれない
聞いていられなかったのだ
多分、俺は、ツバキさんに顔をあわせられないだろう。

自室に戻る、いや、コウタに会っておこう

コウタはいつも明るい、しかしコウタも人間だ、暗くなるときもあるだろう

コウタの部屋

タクミ「よう、コウタ」

コウタはバガラリーを見ていた
ちなみに13話だ
多分1話から見直しをしているのだろう

コウタ「よお、タクミ」
その声にいつもの明るさはない

タクミ「バガラリーの13話ねえ、見直しか？」

コウタ「うん、そうだけど」

声に暗さが現れた

コウタ「そ、そうだ！ 今度俺ん家来ない？」

唐突な提案に戸惑うが俺は答える

タクミ「いいのか!？」

コウタ「うん、いつでもいいぜ」

タクミ「じゃあ明日でもいいか？」

コウタ「明日は」

明日のことを考えているようだ

コウタ「明日って丁度休暇じゃん」

休暇の日とかは覚えているようだ

タクミ「じゃあ決まりだな」

コウタ「あ、アリサのお見舞いに行こうと思うんだけどさタクミもどう？」

タクミ「確かにそうだな」

コウタ「じゃあ、決まり！」

ラボラトリの廊下

アリサの声が聞こえる

アリサ「見ないで」

コウタ「今の声で変なことを想像した俺って」

タクミ「オオグルマ あの野朗!!!」

コウタ「オオグルマってあの変な顔のオヤジか？」

アリサの音が続く

アリサ「もうほっといてよ 来ないで」

アリサ「 私なんか 私なんか!!!」

タクミ「まさかっ!!」

コウタ「嘘だろ !?」

オオグルマの で生きること絶望

次の人物の声で、俺達の心配は杞憂に終わった

ツバキ「鎮静剤を クッションは交換しておけ」

タクミ「ふう、心配無し、か」

コウタ「変なこと考えちゃったな」

アリサ「ああ　ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

アリサ「パパ　ママ　私　違う！！　違うの！！！！」

タクミ「　ゾクゾクするねえ」

コウタ「こっついうアニメ見たことあるぞ」

タクミ「そこらへんもゾクゾクするねえ」

ツバキ「がなだめるように話しかける」

ツバキ「私だ　分かるか？　アリサ」

しかし、その言葉も彼女の耳には入らないらしい

アリサ「そんな！　そんなつもりじゃなかったの！！」

アリサ「違うの！！　私じゃない！！　私のせいじゃない！！！！！！」

アリサ「ほっといてよ！！　私なんかほっといてくれればよかった
のに！！！！」

タクミ「行くぞ　」

コウタ「ああ、行くっ」

決意を固めたとき、奴は来た

オオグルマ「ああ、君か」

コウタ「あ！、Er(ry

俺はコウタの口を押さえる

オオグルマ「今は会わないほうがいいだろうな」

コウタは俺の手を振り払い、言う

コウタ「なんでだよ！！！」

オオグルマはコウタを無視して俺を見ながら話だす

オオグルマ「薬が切れるとあの調子だ 日を改めたほうがいいぞ」

作者「その薬はなんと！！ 最終的には毒殺のつもりだったんだよね」

詳しくはエイジスに侵入するときね

とにかく話に合わせる

タクミ「わかりました、では日を改めて訪れます」

すると医務室から悲鳴が聞こえる

アリサ「イヤアアア！」

オオグルマ「彼女だって、今の様子はあまり見られたくないだろうしな」

俺は嫌がるコウタを引きずって部屋に戻った

自室

コウタ「すげえ」

コウタが部屋の広さに驚きを隠せないでいる

コウタ「なんでタクミだけこんなにいい部屋なんだよ……！」

タクミ「支部長が　いや、新型だから」

コウタ「新型って　アリサもこんな部屋なのかな？」

タクミ「そう望むよ」

コウタ「なあ、タクミ」

タクミ「なんだ？」

コウタ「部屋の交換　いやっ……泊まらせてください……！」

タクミ「交換は色々無理だけど、泊まるぐらいならいいよ」

コウタ「さっすがー！！ さすが、新型！」

タクミ「ニュータイプって呼んでくれ」

コウタ「じゃあ、さすがニュータイプー！！！」

タクミ「コーヒーでも飲むか？」

コウタ「話題、変えんなよ」

タクミ「すまんすまん、変なこと言わせたな〜って思ったから」

コウタ「ニュータイプってハイテンションだと使いづらいね」

タクミ「そういえばそうだな」

コウタ「コーヒーは無理！！」

タクミ「お子様ですか？」

コウタ「くっそー！！ バカにしゃがって！！！！」

タクミ「じゃあ、砂糖多めだな」

榊が言うからにはコーヒー豆から煎るとまた味が違うらしい

しかも煎り方によっても味は変わるらしい

そう、コーヒーの味は無限大なのだ！！！！！！！！

コウタの分は砂糖多め、それに、シンプルに行く。

不味いと言われたら最期だからな

自分のコーヒーは時間を掛けて入れる

ブラック、無糖だ

コウタ「美味しいな、これ」

タクミ「どうよ、俺の自信作」

実は嘘である

後に神崎レジエンドという名で役員区画に自動販売機が置かれることとなる

コーヒーだけの自動販売機ですよ（味は色々）

しかし、それは別の話である

自分のコーヒーを飲む

味は以前とは違う、何かが変わった、そんな感じだ

それから最近の仕事の話になったが、すぐに仕事の話はやめた

ディアウス・ピターの話になったからだ

気まづくなってしまったがコウタの話題を切り替える力には頭が下がる

コウタはいつもみたいに家族の話をするが、俺には聞いていきつかった

コウタ「でさー、妹がな」

タクミ「なあ、コウタ」

コウタ「ん？ 何？」

タクミ「荷物でも取ってきてたらどう？」

コウタ「それもそうだな、ついでに家に連絡いれるよ」

タクミ「ああ、わかったよ」

コウタは手を振りながら俺の部屋から出て行った

俺はエントランスに向かった
なぜかって？ 理由はないよ

エントランス

俺は階段を降りる

降りて光ってる板（サクヤがニュースを見てたやつね）の方に向か
おうとしたときだった

ヒバリ「あ、タクミさん」

タクミ「何？ ヒバリさん」

俺はちゃん付けで呼べる勇者ではない

ヒバリ「最近、頑張ってるらしいやんね、ようですね」

タクミ「そ、そうかなあ」

ヒバリ「役員達の間でもそろそろ昇格じゃないかな、って言われてますよ」

タクミ「ふうん、キミはどうなの？」

ヒバリ「私、ですか？」

タクミ「うん、ヒバリさんはどう思ってるのかな、って」

ヒバリ「報告書を見ていて、たった5日間の活躍とは思えませんよ」

討伐したアラガミは

オウガテイル十数頭

ヴァジュラー頭

プリティヴィ・マータ四頭

ディアウス・ピターー頭

コクーンメイデン二頭

コンゴウー頭

作者「スッバラシイ!!!」

ヒバリ「でも ミッションは私の所で受けてください、お願い

します、ね」

タクミ「分かったよ、ヒバリさんの所でミッションは受ける、それでいいんだろ」

ヒバリ「ありがとうございます」

タクミ「ところで」

ヒバリ「そういえば！ このことを伝えるのを忘れてました」

タクミ「オイオイ、しっかりしてくれよ」

ヒバリは苦笑する

タクミ「やっぱり、笑った方が可愛いよ」

俺は自然にこの言葉が出てしまった

ヒバリはすごく照れている

いつもはタツミ（ちょっと名前が似てる人）に絡まれて嫌そうな顔ばかりしていたが、ちょっとドジって苦笑した今の顔はとても可愛かった（しかし、カノンには勝てる気しない）

ヒバリは照れていたが、仕事となるとやはり、笑顔は消える

ヒバリ「アリサさんが先生がいる間なら面会可能になったようです
が、まだ回復の兆しが見えないそうです」

タクミ「なるほどね、心配だな」

ヒバリ「面会してみてはいかがですか？」

タクミ「そうだな、行ってくるよ」

ヒバリ「それでは許可をとっておきますね」

タクミ「色々とありがとな」

ヒバリ「オペレーター、ですから」

タクミ（漆黒のときに酷いこと言っちゃったんだよね）

感謝しながらエレベーターに乗り込んだ

医務室

椅子に座る、アリサの顔を見つめる

タクミ（寝顔がすごく可愛いんだな）

安らかに眠っている姿を見てそう思った

オオグルマ「話しても無駄だよ 効果の高い鎮静剤が届いたんでね
当分意識は戻らないはずだ」

タクミ「ふん、そうなんだ」

どうでもいい、みたいな反応をする

そしてアリサの手に触れる

一瞬の出来事だった

フラッシュバックとでもいうのが知らないが脳裏に焼きつくような
感覚だった

ざっと説明するとですね

アラガミ、アラガミ、アラガミ、リンドウさん……！

ナズエール、インドウザーアーン？（下手なオンドウル語に挑戦）

考えているうちにアリサが目を覚ました

アリサ「あれ　　ここは　　私、どうして　　」

手を握ってる俺の方にアリサの顔が向く

オオグルマの表情が変わる

オオグルマ「い、意識が　　回復しただと？

まさか　　し、失礼する！」

オオグルマは出て行った

俺は手を引っ込める

アリサ「今、あなた　　の　　」

俺は自分の手を見つめた

タクミ（これではフリト・アノにつー！！）

機士A Gの第二話と第五話ですね、わかります

アリサは俺が考え事をしている間に再び意識を失った

意識が戻ったのはいい傾向のはずなので、布団を掛けて医務室を立ち去った

第二十話「感応現象　ファーストコンタクト」（後書き）

九話まで1日、十三話まで2日、十六話で3日経過、十九話で4日経過、現在5日の日数が物語の中で経っています

作者「このままじゃ、いけない!!!」

タクミ「いったいなんだよ!!!」

コウタ「オープニングをしてみる」

作者「このままでは他と同じになってしまう!!!」

タクミ「確かに、他の作者さんの小説じゃこんなに前書きと後書きが長い方とかあんまりいらっしやりませんからね」

作者「お便りコーナーはどうしたんだよ!!!」

タクミ「お前が打ち切った」

コウタ「確かにその通り」

作者「クレームばかりじゃん！ あいつらクレームしか吐かねーじゃねーか」

タクミ「ユキの悪口言っんじゃねえ」

コウタ「榊博士の　まあ別にいつか」

作者「は付けんな、似合わない」

タクミ「次回は」

コウタ「だ・か・ら!!!　次回予告は早いつて」

作者「ゲストを呼ぼうにも皆忙しいしな」

コウタ「あー」

作者「

コウタ「違っつて」

作者「何がだ？」

タクミ「今回の俺のことだろ？」

コウタ「そうそう、それぞれ」

作者「今回の主人公って天然攻略王でも目指してんのか？」

コウタ「分かった！！」

タクミ「フォーゼ見てたの、そうしたらねえ」

作者「主人公がフラグを立てようとしてた？」

コウタ「あれは天然じゃなくて、周りの影響だけ」

タクミ「そうなの！？」

作者「お前はお前でいいんだよ、それが一番だ」

タクミ「それって俺がカノンに言った言葉じゃね？」

コウタ「こつちが先だ！！！」

作者「もう、次回予告、行く？」

タクミ「コウタの家にお泊り」

コウタ「主人公、神崎タクミを待ち受けている者とはっ！？」

作者「カァーッ！」

コウタ「なんだよ！！」

タクミ「前書き、見てみるよ」

コウタ「引用です」

作者「前書きぐらい把握しようぜ」

タクミ「取り直しだ！！」

タクミ「コウタの実家にお泊り！！」

コウタ「俺ん家には可愛い妹がつ！！」

作者「妹自慢すんなよ」

タクミ「このまま行こう」

コウタ「惚れんなよ」

タクミ「紅&黄金コンビが放っておかないと思うよ」

タクミ「そして、もう1人、主人公・神崎タクミの運命を変える出

会いが

作者「いったいなんでしょうね」

コウタ「それでは、次回」
タクミ「お楽しみに!!!」

第二十一話「休暇」

オラクル襲来

（前書き）

初休暇、それは無残な終わりを告げる。

コウタ「何が終わんのか解らないんですけど」

タクミ「俺が死んだりして（；。）。（）ガクブルがクブル」

作者「初めてのガクブルがここだよ」

コウタ「初休暇が終わるのか、それとも、休暇以外があるのか」

タクミ「ご想像、だろ」

作者「他に言うことはあるかな？」

コウタ「ハイハイ、オレオレ！」

タクミ「興奮するな、下手したら、死ぬぞ」

コウタ「何で!？」

作者「興奮することによって体内のオラクル（ry」

コウタ「覚えられないからいいや」

作者「ひ、酷すぎる」

タクミ「人の忠告は聞いておくべきだぜ」

コウタ「だって、覚えられないもん」

タクミ「今のも忠告だったんだけどな」

作者「くそっ!! 前回のラストを利用して復讐してやる!!!!」

タクミ「まてつて!! 俺もやばくなりそうなのがする」

作者「想像通り!! 2人で地獄に堕ちな!!!!」

コウタ「初休暇に何が終わるんだ？」

作者「そういえば ルナは？」

タクミ「ルナ? 誰？」

コウタ「そういえば」

作者「本編行こう、駄目だ

こいつ

」

1つのベッドに男が2人。

何故、こうなったのか

それは、前日に遡る

コウタ「広っ!!」

コウタは、俺の部屋の広さに驚いていた。

コウタは、俺を泊まらせる！ ってな感じで泊まることになった。

荷物といってもその日の服だけだ。

しかし、俺がアリサの見舞いに行っている間に、コウタはベッドを制圧していた。

次に、ターミナルを侵略していた。

ターミナルの壁紙がバガラリーのキャラクターの立ち絵になっている。

(コウタがリツカちゃんに依頼したんですね、わかります)

俺の女神はどこに行った

しかもアーカイブはバガラリーだらけだ、全話持つてるのに

(つまりバガラリー×2)

それからどうでもいいような世間話で盛り上がり、コウタが寝たのは午前2時だった。

俺は自分のベッドが占領されているため、ターミナルで時間潰しをすることにした。

タクミ「優しいその指が、終わりに触れるとき、
信じてもいいんだろう」

機動戦士ガンダムSEED DESTINYだ。

DVDを拾った俺、運がいい。

しかし、8話までしか見れなかった

タクミ「あれ？ この声」

ルナマリア・ホークだ（結構好きなキャラクター）

タクミ「声が 誰かに、似ている気がする」

そのとき、ベッドの人物が目を覚ます。

コウタ「アリサ！？ よくなったの！？」

タクミ「アリサ？ そうか！ アリサに声が似てるんだ！！」

俺はアーカイブを閉じ、ベッドに潜り込んだ。

現在、午前3時48分、限界がやってきた。

いつもの癖は封印する

しかし、寝ている間に脱げてしまうのも問題だ。

俺はすぐに意識の奥底に辿り着いた（つまり、眠りについた）

午前6時、休暇でも絶対に守らなければいけない起床時間だ
予想通りにコウタは寝ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7138w/>

GOD EATER - ゴッドイーター - ~ 神崎タクミの戦い~

2011年11月21日03時18分発行